米國ノ情勢

墨其西哥ノ内訌

南米三國條約締結

ん事を計較せり、

一暎咭唎國の船々此處を通るに於ては、五十个日中は支那へ到る事を得ゐし、

亞墨利加

一メキシコ地ピューブラ地名は於て、前司職サンタアンナ人名を共和政治は引戻し、權威を古復さしめんとの誓約空しくなせり、

一門徒等一揆を起んと勉强したせとも、司職コモンフヲルト人名の嚴しき取扱を以て、其初發に於て空しくなれり、

一メキシコー地名の南方クェルレロ地名は於て、黄金豐饒の地を發明さり、

一ブラシリ幷アルゲンテインの共和政治、及ひパラキュアイの三國、和親貿易航海の條約を決定さり、

一ユラギュアイ地名は於て、評定官と司職の間は、確執を生さり、此義極て右共和政治とブラシリ地名の堅義を折くは至らん、

一合衆國ボリフィアは於ては、人々其司職とならん事を欲するの故は、不穩事屢なり、

一セーリー地名は、當今平穩はして、ドン、マニュヱル、モント人名五个年の間同所司職の任あり、將北亞墨利加合衆國およひサルディニー國と、和親貿易航海之條約を決定さり、

「ビユカナン」大統領ニ選バル

東洋ニ於ケル歐洲列國ノ海軍

一ビユカノン君、北亞墨利加合衆國の司職は撰まれあり、此人は、スラーフル子イ人を購て奴僕は仕ふをいふ、の連綿を護る人の列なるは、其相手にする人は、スラーフル子イ前出廢するを護るコロ子ル官名フーモント人名なり、

一南北亞墨利加中、イスパニヤの亞墨利加諸共和政治談判して、フレイボイトルス戰爭の時は當て、政府の命を以て、敵國の商船抔押領する人をいふ、を止め、及ひ貿易筋容易の趣向を取極、ワスヒングトン地名は於て、ニーウゲレナタ地名ギュアテマラ同上メキシコー、ペーリュー同上ボリフィア同上コルタリカ同上及ひフヱ子シュエラ同上の諸使節名判さり、將此條約を取行んか爲、ボリフィア前出のリーマー地名は於て、集會あるゐし、

一北亞墨利加のフレイボイトル前出ワルケル人名事、中央亞墨利加ホンデュサス地名及ひギュアテマラ地名の頭領あらん事を欲さしは、屢其住民は罰せ、多分破船するは至らんと見へあり、

海軍

一終の觸面はては、唐海幷東印度出張の歐羅巴海軍左の如し、

副章Aの部を見るへし、

一和蘭海軍、同所出張左の如し、

副章Bの部を見るへし、

一北亞墨利加海軍、唐國幷東印度海出張左の船々なり、

副章Cの部を見るへし、

Aの部

一アコイン　船號　喫咭唎　大砲十二門　船司アウアホード
同二門　船司フブコルリンソン
一アルリガトル　上同　同六門　同ハハベアミス　リール、アドミラール名官
一ビュストルド　上同　同八十四門　船將シルムセイモウルウキンクホルレ
一ビッテルン　上同　同
一コルキュツタ　上同　同十六門　船司クフコルフキレ
一カミルラ　上同　同十四門　同ルエンキンス
一コミュス　上同　同三門　同スドングラス
一コロマンドルス　上同　同十七門　同セフェルラウエス
一コロイスル　上同　同十二門　同イフセハミルトン
一エルク　上同　船將グウドオコルラグハン
一エンコウントル　上同　同十四門

一フュレイ　上同　同六門　船司セトレクキー
一ヘルキュレス　上同　同四門　同エフデント
一ホンコン　上同　同十七門　同セセフヲルセイト
一ホル子ット　上同　同六門　同イコルベット　ハフエルリスマストル　コニュイート
一インフレクシブレ　上同　同四門　同
一ミンデン　上同　同五十門　船將ホンクステュワルト
一ナンキン　上同　同十三門　同ホンアアコグラ子
一ニゲル　上同　同四十門　同シルフウエニコルソン
一ピキュエ　上同　同十二門　同エクバルナルト
一ラセホルレ　上同　同五十門　同コムドレホンハケププル
一ラレイグ　上同　同六門　同船將グスハント　イリダーツマストル　コニュイード
一サムプソン　上同　同六門　同
一サラセン　上同　同三門　同キュルメ
一シルセフォルベス　上同　同二十六門　同船將シルウキンハステ
一スパルタン　上同

一スタールリンク上同　同三門　同アイフヰルレルス
一スタウンク上同　同二門　同ルウヰルトマン
一セイビルレ上同　同四十門　同コムドレホムセグイブエルリオト
一カプリシーンセ上同　拂朗西　同船將コルリール
一カテイナット上同　同六門　同シュルアルク
一マルセアン上同　同モラッテ
一ニシュス上同　同十二門　同シーレイ　リールアドミラール名
一フヰルギニー上同　同五十門　船將キュエリンプラス
一アマソナ上同　ポルトガル　同六門　船司イエスカルニコー
一モンデクス上同　同二十門　同コムタファレス
一ヨルゲユアン上同　イスパニヤ　同四門　同フデブリオ子ス

Bの部

一パレムバング船號　フレガット船　船將セイベルクホイス
一ボレアス上同　コルフェット船　第一等助役アフック
一バタフィア上同　蒸氣船　船將アフアンワセンドルフアンレイン

一デハーイ上同　ブリッキ船　第一等助役イファンマウリッキ
一ペイラデス上同　アドフヰースブリッキ船同　グドアムプト
一レムバング上同　スクーヂルブリッキ船同　セイグストルムファンスガラーフエサンデイアファンデコロイスセピラールムハヤンセンハアモッドルマン
一セイルプ上同　同　同
一サパルーア上同　同　同
一バンダ上同　同　同
一ランシール上同　同　同　イイブテヨンゲオウドラートプファンブリーシフエイキリス
一パダング上同　同　同
一第十四番カノヂールボート　第二等助役ルプストロイク
一メデュサ號船　捻コルフェット船　船將次官グファビユス
一プリンセスアメリヤ上同　同　同　ウハアウエスセリンキ
一モンタラドー上同　捻スクーヂル船　第一等助役イアンデレアル
一アムストルダム上同　蒸氣船　船將次官アアデフリース　イイウエステロウエンファンメーテレン
一メラピー上同　同　同
一エットナー上同　同　同　アドファラルクソン

一プーニキス上同
一シュリナーメ上同　同
一サマランング上同　同
一セレベス上同　同
一アドミラールファンキンスベルゲン上同　同
一オンリュスト上同　同

Cの部

一サンヤシントー船號　大砲十三門　コモドーレ官名イアルムストロングヘンレイハベル

右千八百五十七年第七月二十日、安政四年巳閏五月廿九日、第二番印度和蘭領都督職之決定ヨ附屬ヲ、

承知、

右之通和解差上申候、以上、

巳十月

八日甲寅　幕府年頭使宮原義直　攝津守　高家　參內、正ヲ賀ス。

奉行所公用人

名前不詳

名村八右衞門
楢林榮左衞門
荒木熊八
西慶太郎
西吉十郎

幕府年頭使及老中堀田正睦參內日取決定ノ件

幕府年頭使參內ノ際ニ於ケル取扱ニ就テ

〔九條家記錄〕○東京帝國大學所藏本

二月五日、

一東坊城前大納言（聰長、武家傳奏）殿御參、過日御沙汰ニ相成墨夷使節申立之趣ニ付、所存書相揃候ニ付、被入御覽候、猶又堀田備中守殿今日上京、被參內之義、可相成哉高家年頭使相濟候上、引續之方都合之趣ニ候間、七日高家京着之樣子ニ候間、八日年頭使、九日堀田參內、十日年頭使御暇被下候哉、日限之處明日相伺候積りニ付、思召被相伺候事、○中略、

七日、○中略、

明八日、巳刻、關東使宮原攝津守、本多美濃守同伴、參內被　仰出、御對面可賜天盃哉、

來十日午刻於長橋奏者所御返答申渡、賜歸府暇、拜領物被仰付、可賜菓酒候哉、

十日午刻迄、女房奉書被出候樣致度候事、

〔京都所司代本多忠民通達〕○九條家記錄所載

安政五年二月八日

禁裏　准后ニ年頭爲御祝儀、
御使宮原攝津守上京候間、參
內等之儀、宜被成御沙汰候、攝津守ゟ被御案內可申達候、以上、

二月七日　　本多美濃守

廣橋前大納言（光成、武家傳奏）殿
東坊城前大納言殿

〔議奏坊城俊克通達〕○宮內省圖書寮所藏本武家書翰往來所載

明八日、巳刻、關東使宮原攝津守、本多美濃守同伴、參
內被　仰出候、仍爲心得申入候、以上、

二月七日　　坊城中納言

大久保大隅守殿
都筑駿河守殿

〔武家傳奏回達〕○伯爵橋本實誠所藏本回文備忘所載

口狀

關東使宮原攝津守、明八日、巳刻、參　內候間、辰半刻當番前番可有御參集候、此段御相番中ニも御傳達可有候也、

聰長
光成

幕府年頭使宮原義直八日參內ノコトヲ達ス

本多忠民病ニヨリ參內セズ

幕府年頭使宮原義直參內

二月七日

〔京都所司代本多忠民通達〕○九條家記錄所載

○二月八日武家傳奏へ

今八日、御使宮原攝津守同道參　內、
准后ニ茂同日參入可仕旨、被　仰出候處、私儀風邪ニ付、參　內難仕候、此段宜御取計可被下
候事、

二月八日

〔非藏人日記（乾）〕○東京帝國大學所藏本

二月七日、癸丑、晴、議奏當番坊城中納言（俊克）殿、傳奏兩卿參侍、○中略、
一明八日巳刻、關東使宮原攝津守、明後九日巳刻、關東使堀田備中守等、參　內被　仰出之旨、
議奏坊城殿被申渡、○中略、
一明日、東使參　朝ニ付、出向交名傳奏衆江附進、○中略、
八日、甲寅、晴、當番議　奏裏松大藏卿（恭光）殿、傳奏兩卿參侍、
一關東使宮原攝津守義直朝臣參　內、諸司代臨期依所勞不參、先是獻物傳奏衆雜掌諸大夫間江持參、番

頭受取、如左、

御太刀一腰　御馬代白銀百枚一匹　蠟燭千挺　自大樹公

御太刀一腰　御馬代黄金拾兩一匹　自水戸中納言慶篤卿

御太刀一腰　御馬代同　上一匹　自尾張中納言慶恕卿

御太刀一腰　御馬代同　上一匹　自紀伊宰相慶福卿

御太刀一腰　御馬　一匹　自宮原攝津守義直

右御拜道廊下陣列之上、目錄上包臺等撤之、如例、傳奏衆有內覽、此時大樹太刀折帋紙六位江被渡、任命三家太刀折帋黄金附臺等、議奏衆前廊下江操付、番頭議奏衆江申屆、大樹公白銀附臺幷蠟燭竪目錄、白銀附臺之上江載之、小御所東廂江操付、兩武士自分披露、太刀折帋高廊階下以金屏風圍之置、御對面之節、出向者候家江渡之、

一傳奏衆案內之上、武士參着、於鶴間兩役昵近衆等出會、有程傳奏衆更出席誘引、於小御所有　御對面、賜　天盃、先是御殿御搆殿奉行衆沙汰也、円座敷設如例、

一武士鶴間歸座之後傳奏衆出座、　天盃頂戴之、御禮申述退出、此時傳奏衆直依退出、右口上議奏衆江可申入、番頭江被命、

一小御所御塞被解之後、小御所之獻物議奏衆江申入、東廊下江令運送、武士太刀折帋議奏衆前廊下江操付置、此時獻物四折書付進之、番頭代江戸切帋遣之、

〔非藏人日記坤〕○東京帝國大學所藏本

二月八日、甲寅、晴、未剋斜時々雨、當番議　奏大藏卿殿其餘參集、傳奏衆參侍、

一年頭御禮關東使宮原攝津守但、所司代臨期依所勞不參也、參　內也、大樹公ヨリ御太刀一腰・御馬　代白銀百枚

一疋・蠟燭千挺、水戸中納言慶篤卿ヨリ御太刀一腰・御馬　代黄金拾兩　一疋、尾張中納言慶恕卿ヨリ御太刀一腰・御馬代黄金拾兩　一疋、紀伊宰相慶福卿ヨリ御太刀一腰・御馬代黄金拾兩　一疋、宮原攝津守義直ヨリ御太刀一腰・御馬一疋等獻上也、未半一剋過　出御于小御所、有　御對面、其後賜　天盃、先是御殿御搆殿奉行衆沙汰也、御塞設、鷺王質梅等杉戸鎖切、鶴杉戸立寄、小御所西簀子北妻戸掛金ハスシ置、引物依有之也、御火鉢貳面出之、

一出御之儀、內々外樣端等江申通、

一出向親禎（大西）・爲成（松本）等勤之、

一同列前番渡殘御用見計令退出、當番辰半剋早參也、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記宮內省圖書寮所藏本

二月七日、晴、○中略、

年頭關東使宮原攝津守上京云々、明八日參　內云々、昵近爲心得武傳兩卿名非藏人右筆鳥飼觸、

家公(言知)御到來之間、當勤昵近三條西中納言(季知)江出會之事觸給云々、

一鳥飼觸到來、

御用之儀候間、明八日辰半剋、御參可被成候也、

追而御服御用候、御前衣紋人躰相知候ハヽ可被示聞候也、

二月七日　言成

山科三位殿承候、令返却了、

御前裝束綾小路(有長)前黃門江觸遣了、

明八日辰半剋　御前裝束可被參仕樣候也、

二月七日

按察(綾小路有長)前中納言殿承候、被返却了、

八日、陰晴不定、入夜降雨、

辰半刻衣冠・奴袴參內、依年始關東使宮原攝津守參內御服御用之、御前按察卿被參、以非藏人議奏江屆了、大藏(裏松恭光)卿承知云々、午刻前武家參云々、所司代依所勞不參云々、昵近出會之事、三條西不被示候間、不能出會、

未刻前出御云々、御服奉仕如例、退加入近習惣詰列了、御前按察卿小番御免之間、被退休所

主上小御所ニ出御

宮原義直ニ謁ヲ賜フ

云々、武傳兩卿參于常御殿、大樹口述言上云々、兩卿退之後出御、諸臣平伏、着御小御所上段、御座定、御劍梅溪少將(通善)・御裙豐房(清閑寺)等、退出西庇云々、近習惣詰出東庇惣詰、武傳披露太刀目六了、外樣・雲客撤之了、宮原參進平伏是東使之了、退、次私御禮太刀・馬自持參云々、外樣五位殿上人撤之云々、御對面了、賜　天盃、御陪膳新大納言、御手長豐房、

武家天盃拜領了比、近習惣詰退入候廊下、事了、入御了、

人々歸番所々々、御服勝手可令退出議奏被示傳御前卿了、

〔中御門經之日記〕(○侯爵中御門經恭所藏本)

二月七日、丑、晴、○中略、

一明八日、關東使宮原攝津守、本多美濃守同伴、參　內ニ付、辰半剋惣詰被觸、

一御手長之事、東使之節ハ、入魂挨拶銀壹枚到來有之、仍順番ニ不被觸節ハ、兩三度相續、

又ハ一向不當、御手長迷惑之旨、風ら(萬里小路)噂有之候付、正房(萬里小路)卿可取計間、順番被尋ニ付、明日(權右中辨清閑寺豐房)ハヽヨ辨順番、次予、次博房(萬里小路)之旨申入、左候ハヽ、其旨可取計被申答、及挨拶了、○中略、

八日、寅、晴、○中略、

一出御、申前剋、　御裾豐房、　御手長同人、　申次胤保(廣橋)朝臣、

一諸司(所)代依所勞不參、公家計之、年始之、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

二月八日、甲寅、晴、巳剋參內依番々、今日大樹名代宮原侍從參內、諸司代不參、所勞云々、被申上年始御祝儀云々、有御對面、候詰今日不能出會、日來風邪之間、宿退出了、

〔菅葉〕○五條爲定日記　宮內省圖書寮所藏本

二月七日、癸丑、晴、○中略、自武傳有觸、明八日巳剋、關東使宮原攝津守參　內候間、辰半剋當番・前番可參仕之旨也、卽剋觸出于相番中、○下略、

〔土山武宗日記〕○宮內省圖書寮所藏本

二月八日、

一

右關東ヨリ年頭御使參　內、諸事如例、今日所司代同伴之處、臨期所勞不參、

關東使高家

宮　原　攝　津　守

〔中山績子日記〕

二月八日、

御き嫌御よし〳〵、こう家關東使參內御對面、常御所まて御ふく男のた、傳奏しゆ御口上、御ぬくすミ申入らるゝ、小御所御ゐいめん天盃給ふ、

〔庭田嗣子心おぼえ〕○伯爵庭田重行所藏本

二月八日、

關東使宮原攝津守參內、對めん、く御、御引直衣、御すへ御とらゐ也、○中略、

十日、

關東使御いとゐ參內ニ付、參內殿へ傳奏御兩卿御まいり、青門（尊融入道親王）ゟ御參り御たいめん、

〔京都所司代本多忠民通達〕○九條家記錄所載

○正月十日武家傳奏へ

正月十一日、○中略、廣橋前大納言殿、

禁裏　御所方ニ、年頭之

御使宮原攝津守、被

仰付候段申來候間、爲心得申入候、以上、

正月十日

廣　橋　前　大　納　言　殿

東坊城前大納言　殿

本　多　美　濃　守

安政五年二月八日

〔東坊城聰長日記〕○宮内省圖書寮所藏本

正月十一日、巳半剋參內、○中略、

一禁裏御所方へ、年頭之御使宮原攝津守被　仰付候旨申來由、所司代書狀、兩公ニ入覽、附議奏、

十五日、巳剋出仕、衣冠・奴袴、○中略、

一年頭關東使宮原攝津守、去七日御暇被下、來廿四日江戸表出立、道中無滯候者、二月七日京着申越候旨、附武士以手帖申越、兩公申入、附議奏、

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

二月廿三日、○中略、

一年頭ニ付、京都　御名代高家宮原攝津守、今晝時歸府、直ニ中務大輔(脇坂安宅、月番老中)殿御屋敷ニ罷出、御同人御退出を待居候樣子、

〔安政年錄〕○內閣記錄課所藏本

二月廿六日、

宮原義直歸府謁見

幕府年頭使江戸出立ノ件

右歸府ニ付　御目見、

京都御使

高家

宮原攝津守

○溫恭院殿御實紀・高麗環雜記ニモ、マタ同一內容ノ記事アリ。

幕府、評定所留役勘定加藤餘十郎ヲ以テ代官(備後石見)ト爲ス。尋デ(十六日)代官(備後石見)屋代增之助ニ支配場所替(攝津・河內・和泉)ヲ命ジ、壹萬石ヲ增地ス。

〔安政年錄〕○內閣記錄課所藏本

二月八日、

御勘定評定所留役

加藤餘十郎

加藤餘十郎ヲ代官トナス

御代官、永々御目見以上、

右被　仰付旨、於御右筆部屋椽頬、老中列座、中務大輔(脇坂安宅)申渡之、

〔溫恭院殿御實紀〕○續德川實紀所載

二月八日、永々拜謁以上被命者、

御勘定評定所留役

安政五年二月八日

一　御代官
永々御目見以上

加藤餘十郎

右被　仰付旨、中務大輔申渡之、

〔松平忠固日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

二月六日、

一四ツ御太鼓ニ而出宅、

一登　城四半ニ貳寸前、○中略、

一廻り出懸、松溜ニ列坐、御勘定奉行ニ、自分ヶ左之通相尋、

御勘定評定所留役

御勘定評定所留役加藤餘十郎を、御代官ニ被書出候、

場所相應之者ニ候哉、答

病身ニて無之哉、　答

心障之義て無之哉、　答

承置候段申達、夫ゟ廻り、詰衆伺御機嫌相濟、一同引、○中略、

二月八日、

一自分痞積腹痛ニ付、難致登　城段、同列衆ニ手紙差出、○中略、

御代官被　仰付勤候內、並之通御足高被下、永々　御目見以上与可相心得候、

右於御右筆部屋緣頬、中務大輔申渡、老中列坐、

〔安政年錄〕○內閣記錄課所藏本

二月十六日、

加藤餘十郎

支配所場所替
壹万石增地

御代官

屋代增之助

右被　仰付旨、於御右筆部屋椽頬、伊賀守申渡之、本多越中守(忠德若年寄)侍座、

〔松平忠固日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

二月十六日、

一四ツ御太鼓ニ而出宅、

一登　城、四半ニ貳寸前、○中略、

一廻り講釋寄セ付ニ付、詰衆雪柳御杉戶際ニて伺御機嫌謁、夫ゟ大和殿(老中久世廣周)と被引、紀伊守殿(老中內藤信親)

ニて直ニ講釋之席ニ出座、中務殿ニて蹲躇之間ニ出座、自分ニて御右筆部屋緣頬ニ出座、

右京亮侍坐、

安政五年二月八日

支配所場所替、壹万石増地被　仰付、
右申渡、召連之御勘定奉行石谷因幡(穆清)に外御代官増地割替等之義、書付に覺書添相渡、畢
る引、

堀田正睦參內ニ就キ指令ヲ請フ

九日乙卯　老中堀田正睦(備中守○佐倉藩主)參內、金品ヲ獻ズ。小御所ニ於テ龍顏ヲ拜シ、天盃ヲ賜ハル。

〔京都所司代本多忠民通達〕○東京帝國大學所藏本 九條家記錄所藏

今度爲
御使、堀田備中守致上京候間、參內等之儀、宜被成御沙汰候、以上、
二月五日
廣橋前大納言(光成、武家傳奏)殿
東坊城前大納言(聰長、武家傳奏)殿

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

御代官
屋代增之助
名代　篠本彦次郎

一九二

二月七日、癸丑、晴、議奏當番坊城中納言殿、傳奏兩卿參侍、○中略、
一明八日巳刻、關東使宮原攝津守、明後九日巳刻、關東使堀田備中守等、參　內被　仰出之旨、議奏坊城(俊克)殿被申渡、

○堀田正睦參內ノ期日ヲ、九日ト決定セシコトニ關シテハ、九條家記錄、二月五日ノ部ニ其ノ記事アリ。但シ、既ニ二月八日幕府年頭使宮原義直參內ノ條下ニ採錄セルヲ以テ、玆ニ之ヲ省ク。

〔議奏坊城俊克通達〕○內閣記錄課所藏本 武家書翰往來所藏

○二月七日禁裏附大久保忠良等へ
明後九日巳剋、關東使堀田備中守、本多美濃守同伴、參
內被　仰出候、仍爲心得申入候、以上、
二月七日
大久保大隅守殿
都筑駿河守殿

堀田正睦參內ノ日時ヲ通達ス

〔雅俗日簿〕○山科言成日記 宮內省圖書寮所藏本

二月七日、晴、○中略、
一鳥飼觸到來、
明後九日、關東使堀田備中守、本多美濃守同伴、參

坊城中納言

内候間、辰半刻御參可被成候也、

二月七日

――――――――山科三位殿承候、――――――、前番・當番連名之、

昵近爲心得、自武傳以鳥飼觸被示云々、則當勤三條西江其旨達給云々、

〔回文備忘〕○伯爵橋本實顯所藏本

二月八日、從美濃權介到來、藪大夫に傳了、

口狀

關東使堀田備中守、明九日巳刻、參　内候間、辰半刻當番・前番可有御參集候、此段御相番中にも、御傳達可有之候也、

二月八日　聰光　長成

右之通被觸候――――也、

同日　爲　定

〔菅葉〕○五條爲定日記宮内省圖書寮所藏本

二月八日、甲寅、晴、自武傳有觸、關東使堀田備中守、明九日巳剋、參　内候間、辰半剋當番・前番可有參集旨也、卽剋觸示于相番中、

本多忠民疾ニヨリ不參

堀田正睦參内金品ヲ獻ズ

〔京都所司代本多忠民通達〕○九條家記錄所載

○二月九日武家傳奏へ

二月九日、一東坊城前大納言殿、

今九日、爲

御使堀田備中守同道參

内、

准后にも、同日參入可仕旨、被

仰出候處、私義風邪ニ付、參

内難仕候、此段宜御取計可被下候事、

二月九日

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

二月九日、乙卯、晴、當番議奏德大寺大納言殿、傳奏兩卿參侍、

一關東使老中堀田備中守佐倉侍從正睦、爲御使參　内、于鶴間着座、諸司代岡崎侍從、臨期不參、

一自大樹公、色繪鳳凰御香爐・御加羅壹本・黃金五十枚、

一從御臺御方、大ゑんまんせ三拾ゑ年、

一自佐倉侍從、御太刀一腰・臘燭三百挺・御馬代黄金拾兩一匹、以上献上、

一御進献御品々、於櫻間口、傳奏自雜掌受取、此度御品附添之武士壹人、櫻間東面着座、狩衣着用、御品舁立云々、麻上下之武士廣椽南面着座、雜掌櫻間北面、近習運送也、此時宜已前雜掌申出請取之上、傳奏衆江申入、於御拜廊下御点檢、御目錄如例六位侍中江被渡、傳奏卿御落手之旨、於同所雜掌江申渡、附添之武士共引取、畢而御使献物雜掌持參請取、傳奏衆江令入覽了、御進献之御品々、小御所東廊下江操(繰)置事如流例、御臺御方御目六者御品臺之上ニ置、御目錄上包臺等如例撤之、備中守自分献上物、太刀目錄等露臺下江操(繰)置事、是又如例、

一未半一剋過出御小御所、有御對面、賜

天盃、關白殿被謁之儀、因御不參無之、次紫清兩殿拜見、傳奏衆誘引、高廊ヨリ往返、先是南殿御裝束行事官相廻、命烏飼、南面格子令上、撤却之後、同斷清涼殿設、惣而六位侍中沙汰也、尤南殿掃除、前日命烏飼、御鳳輦拜見庭上江相廻、附武士誘引、先是儀立今朝行事官相廻、惣而拜見畢退出、但シ、御禮於事寄廊下、番頭江被命之儀無之、

一御塞被解之後、進献之品々、御詰東廊下操(繰)之、且雀間杉戸内ニ在之御目錄、使太刀目六等、林和靖間前廊下江操(繰)之、此旨議奏衆江申入、進献目六寫、議奏衆并番頭代等江進之、

〔非藏人日記坤〕○東京帝國大學所藏本

主上出御正陸拜謁天盃ヲ賜フ

二月九日、乙卯、晴、當番議奏德大寺大納言殿、其餘參集、傳奏參侍、

一關東使老中堀田備中守、所司代本多美濃守同伴參　内也、但、所司代臨期依所勞不參也、大樹公ヨリ御香爐・御加羅一本・黄金五拾枚、御臺ヨリ大をんなんを三十たん、佐倉侍從正睦御太刀一腰・蠟燭三百挺・御馬代黄金拾兩一匹等、献上也、未半一剋過　出御于小御所、有　御對面、其後賜天盃、申一剋過

入御、先是御殿御搆殿奉行衆沙汰也、御塞設、鷺王質梅等杉戸鎖切、鶴杉戸立寄、小御所西簀子北妻戸掛金ハスシ置、引物依有之也、御火鉢二面出之、

〔中御門經之日記〕○侯爵中御門經恭所藏本

二月八日、寅、晴、○中略、

一明日、東使堀田備中守、本多美濃守同伴參　内、惣詰被觸、

一明日御手長被觸、辰半刻、

九日、卯、晴、○中略、

一參　朝巳下刻、東使參　内、御手長ゝ、屆如例、

一諸司(所)代不參之旨、議卿ゟ御手長子細不被申渡、不參又無沙汰如何之事哉、昨日又如此、是迄例、御手長子細被申渡、尤不參之義も被示之、議卿可謂無念之、

一出御未半斗、

御裾胤(廣橋)保朝臣、　申次長順(葉室)朝臣、　御陪膳忠順(綾小路)卿、御手長予、役送大江俊堅(北小路)、

一今日自關東判金五拾枚・金造鳳凰御香爐・加羅一箱・綸子□□□献上、且參　内子細ハ不相分、只時節伺　御機嫌献上ト云々、

一老中　御殿幷鳳輦拜見ニ付、今朝卯半刻御□□、諸司出仕、□□兼日頭辨下知ト云々、

尤兩頭商量之、撤却申刻、豐房當番ニ付、□□□第一江被賴置、尤議卿ニモ其旨被申入置旨之、

一各退出、申下刻、

〔雅俗日簿〕○宮内省圖書寮所藏本

二月九日、晴、○中略、

今日關東使堀田備中守、本田美濃(多)守等同伴參内云々、

御服高倉侍從(永祐)云々、御劍言繩(山村)朝臣、

堀田備中守家來當家門弟馬場志津馬・依田十次郎等隨從上京、今日參内ニ付、於施藥院、衣紋彼人等奉仕云々、當家々來爲檢知、可出頭施藥院依在賴、狩衣着用松田左番長行向云々、

○中略、

堀田備中守參　内、自大樹公、黃金五十枚・金銀鳳凰御香爐一對・沈香一箱、右獻上云々、

亞墨利加一件之儀ニ付、國主大名插異心、良欲及國亂、依之希　勅命、爲人心和熟上洛云々、

堀田正睦參内異國船ノ事情言上

〔德大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

二月九日、晴、

一關東使堀田備中守上京、有御對面、黃金五十枚・金孔雀香爐・伽羅一筥等獻上、異國船事情依言上也、御鳳輦・御殿等　拜見、其後參　准后、又參入于兩内覽、无面會了、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

二月九日、乙卯、晴、巳剋參内殘番之、今日佐倉侍從老中參内、諸司代不參、墨夷條約之儀爲言上被差登ニ付、被窺御機嫌云々、黃金五十枚・伽羅木・色繪香爐、從御臺大紋綸子三十反獻上云々、准后江羽二重二十反、從御臺色綸子十反獻上云々、又予出會如例、事了退出、于時申斜斗々々、

〔甘露寺勝長日記〕○孝明天皇紀所載

二月九日、乙卯、○中略、堀田備中守參内云々、此人、亞米利加一條ニ付今度始上京也、予殘、總詰ニ付、巳半刻許參内、衣冠差袴、小時兩役面會、次□□之人々、次ニ予面會了、未刻許出御、御對面天盃等如昨日、御裾頭辨、御陪膳忠順卿、御手長經之、役送大江俊堅等也、今日自關東獻物判金五拾枚・綸子三拾

巻・香爐金地銀、幷赤銅ニテ、鳳凰菊之模様之由、傳聞、伽羅一筥等也、

〔坊城俊克日記〕○孝明天皇紀所載

二月九日、東使老中堀田備中守、本多美濃守同伴參內也、諸司代依所勞不參、

黄金大判五十枚・金之香爐一箱・綸子三十反、

右獻上也、今度參內儀亞墨利加一件之由、但、今日之處、子細言上先無之、窺御機嫌已云々、

未曾有事歟、

〔藏人細川家日次案〕○細川常典日記　維新史料編纂會所藏本

二月九日、乙卯、晴、

一老中堀田備中守臨時參　內、役送御用辰半刻予參仕、同　天盃、役送俊堅參仕、

一未刻過　出御、有　御對面、賜　天盃、此已前、進獻目錄於御拜道廊下、傳奏被渡、例所江

繰置、此時依傳奏目令持參、進退如例、事訖、申刻過令退出、

一此日進獻、如左、

大樹ゟ
鳳凰香爐　一

伽羅　一本

黄金　五拾枚

堀田正睦參內當日御殿及鳳輦等拜見ノ件

御臺ゟ
つまんず　三十匹

〔平田職修日記〕○宮內省圖書寮所藏本

二月八日、○中略、

一極蔦(藤島助胤)ゟ剪紙到來、如左、刻限申不來故、後刻、禁中面會尋候處、辰刻ヒ被示之、

明九日、堀田備中守參

內、御殿・鳳輦等拜見ニ付、

殿上敷設之事、嘉永三年十一月、松平和泉守(乘全、岩中、西尾藩主)參　內拜見之節通、万事可被沙汰候之、

二月八日

一右ニ付、參勤、小舍人能弘・所衆嘉清等江申遣之、○中略、

一御車惣代岩佐主稅來、

今日、吉田彌一參候而、明九日、堀田備中守御車拜見ニ付、儀付ニ罷出候樣、取次ゟ申

聞候ニ付、惣代方ゟ出勤可有之ヒ申候、此迄、童子方ゟ差圖ニ而出勤不仕候、併シ先例

加勢ヲ童子ゟ賴、出勤之義ハ御座候、

右之趣、申候故、

一御車拜見之夏、當方一切不存候得共、先例有之候ハヽ、先例通、隱便(徒)ニ而宜候、

右之趣、令返答、先例取調候処、文政八年九月廿五日之、惣代、左様之義候ハヽ、童子方江掛合候而、頼候ハヽ、致出勤候、

右之趣、申帰候之、

九日、

一御車童子來、堀田備中守御車拜見ニ付、舁付罷出候様、取次申候故、唯今ゟ罷出候を届之、

一御車惣代岩佐主稅ゟ、

童子江掛合候処、何分相談致度候間、御車舍江參呉候様を申來候故、參勤仕候、

右之趣、申越候之、

一堀田備中守老中也、御殿拜見ニ付、予着略束帶、辰刻出仕、於非藏人口、出仕旨六位藏人申候而、下侍鍵申出、催方追々出仕、

御藏能弘、所衆嘉清、

一差次（北小路俊昵）、勝手を被示、仍御庭江廻、

一殿上渡廊設、如例、

一中殿東面、灯樓綱五筋返、

一東面五ヶ間、格子上之、

一左ハ、六位藏人也、

一晝御座江、御硯筥被設、

一東面大床子江、御褥被設、

一御帳中江、表筵被設、

西面格子、不上之、仍御調度、不被設、

右之後、差次退出、撤却ニ申剋出仕を被示、仍申達候而、各退出、予歸宅、巳刻前也、

南殿幷三輦等、拜見申之、○中略、

一撤却ニ付、予申剋出仕、小舍人・所衆茂、同人出仕、差次、撤却を被示、

殿上渡廊、如例撤却、灯樓綱撤却、下格子、

右之後、差次、退出を被示、仍申達、予歸宅、申半剋スキ也、

一酉刻比、御車童子吉田彌一・藤木仙納來、

御車、御老中拜見相濟候而、舁付撤、引取、

右之趣届、同時ニ岩佐主稅來、手傳ニ午剋罷出を届之、

〔土山武宗日記〕○宮内省圖書寮所藏本

二月九日、

安政五年二月九日

一

右關東ヨリ爲御使參　内、未刻過、御對面、天盃頂戴、紫清兩殿拜見相濟、退出之節、御鳳輦幷參　内殿・奏者所邊拜見、唐御門ヨリ退出、御附衆以下隨從、　御車舍ニテ御車五輛共拜見有之、申剋過相濟、暫時當番相勤、戌剋前退出歸宅、

一今日關東使所司代同伴之處、依所勞不參也、進獻物差添、奥御祐筆組頭原彌十郎・兩番格奥御祐筆立田錄助罷出、休息所上之間へ錄助罷通候事、

十日、

九日事

一關東ヨリ進獻、色繪鳳凰御香爐・御伽羅一木・黄金五拾枚、　御臺樣ヨリ大紋綸子三十端、准后御方へ羽二重二十疋、　御臺樣ヨリ色綸子拾端、

一　御勘定奉行　川路左衞門尉
　奥御祐筆組頭　原彌十郎
　御勘定組頭　高橋平作
　御勘定　日下部官之丞
　御目附　岩瀨肥後守
　兩番格奥御祐筆　立田錄助
　御賄格御徒目附　平山謙二郎

右、此度爲御使、堀田備中守殿就上京、當地へ爲御用致上京候旨、御附衆達有之、

十三日、

一此度、關東御使堀田備中守上京ニ付、勾當内侍銀三拾枚被下、

右、今日辰刻、御附大久保大隅守御役宅へ、同役井上左衞門尉罷越、大隅守面會請取歸、表使ヲ以テ上ル、表使請取書調印、翌日御附衆差出有之、但、先例文政十年之振合也、

〔中山績子日記〕

二月九日、

御き嫌御よし〳〵、老中堀田備中守參内、小御所まて御あいめん、御あく男のた、天とい、たふ將軍家より御言傳、金乃御香ろうおうを・御加羅一本・大方半金五十枚進ぜん、御臺ゟより廣ぜんす三十ゟん、

〔庭田嗣子心おぼえ〕○伯爵庭田重行所藏本

二月九日、

此度いこくの事ニ付、將くん家ゟ、老中堀田備中守上京、今日參内まて、御たいめん、小御所へなる、御引直衣・御すへ・御とう帷子・御末廣、御服以下男ゟさ、將くん家ゟ御言傳ま、半金五十まひ・御きやら一そこ・むくろ金さいくおうおうの御香ろう一そこ、御臺御方ゟ白ぜんぴ三十反進上也、備中守事、御おうぜん・長橋の車よき・御くるま拜見也、

關東ヨリ勾當内侍へ銀三十枚ヲ贈ル

異國ノ件ニ就キ老中堀田上京參内

〔御進獻幷被遣物覺〕○九條家記錄所載

正月廿二日、
一廣橋前大納言殿、

覺

此度、備中守爲
御使、上京之節、御進獻物、
禁裏に
公方樣より、
色繪鳳凰御香爐
御伽羅　一木
黃金　五拾枚
准后に
羽二重　二十疋
禁裏に
御臺樣より、
大紋綸子　三十端

准后に
色綸子　十端
公方樣より、
白銀百枚
卷物　十　九條關白殿
同　斷　鷹司太閤殿
白銀五拾枚
卷　物　五　宛　兩傳奏
白銀三拾枚　勾當內侍
以　上

〔九條家記錄〕○東京帝國大學所藏本

二月九日、
一東坊城前大納言殿、○中略、
以手紙啓上仕候、然者此度爲
御使、堀田備中守就上京、當地に爲御用上京仕候御勘定奉行以下名前書、幷御進獻之御

品ニ差添候御右筆名前書共二通、爲持進達仕候、以上、

二月八日

御勘定奉行　川路左衛門尉
御目付　岩瀬肥後守
奥御右筆組頭　原彌十郎
兩御番格奥御右筆　立田錄助
御勘定組頭　高橋平作
御賄頭□□徒目付　平山謙二郎
御勘定　日下部官之丞

右、御進獻之御品差添、
御所向相勤候事、
十日、

原彌十郎
立田錄助

一東坊城前大納言殿、
昨日、東使參　內、御進物ハ、此度備中守被差登候ニ付被進候旨、且外ニ書付壹通、兩人へ相渡候ニ付、御內覽被入候旨也、
亞米利加國之使者申立候趣、不容易儀ニ付、於關東衆議を盡し候上、申立之條々精々及論談、彼方ゟ差出候條約案文之每條、夫々取縮及談判候ニ付、今般私被差登、委細之事情可申上旨被仰付候、此段御兩卿御心得ニ被置宜敷可被仰上候、

堀田正睦施藥院ニ至ル

參內

〔佐倉藩戊午年集〕○伯爵堀田正恒所藏本

二月九日、晴、
一卯上刻、　御目覺、
一六半時御供揃、縅御甲斗目麻上下被爲　召、初御參內ニ付、五時御出宅、一條烏丸通施藥院ニ御出、暫時御休息、御衣冠御召替、九時過傳奏衆ゟ宜旨御案內申來、夫ゟ中立賣御門通、御唐門ニ而御下乘、平御唐門御這入被遊、諸大夫之間御椽下ニ而、御太刀公御用人ニ御渡、御楷(段)下石檀(壇)ニ而御沓御脫被遊、御供目付取之、
但、御太刀ゟ公御用人ゟ御刀番請取之、御袋入御大小御供方持之、御冠箱持・御沓持、

安政五年二月九日

何も平御唐門内庭上ニ圓座敷着座、御供待いゐし居候事、

八時過　天盃御頂戴相濟、以御取次御下ケニ相成、長量平於御椽請取之、七時過御退出、

御手續前同斷、夫よ里、

准后御殿ニ御出、御唐門外ニゐる御下乘、御車寄前ニゐる御沓御脫被遊、御供目付取之、御太刀御携、御車寄ゟ里御上り、無程御頂戴之御菓子、以御取次を御下ケ被遊、御刀番請取之、無程御退出、又候施藥院ニ御立戻、御長上下之御召替、九條關白樣・鷹司大閤樣、御使御勤、傳奏衆東坊城大納言樣・廣橋前大納言樣、爲御禮御廻勤、御歸家六時、

一御供、

公御用人騎馬　淺井伊織

一施藥院ニ御先番、左之通、

公御用人　金子文藏

御衣紋方　依田十太郎

馬場志津摩

御刀番　田中文助

松永吟彌

御案詞奉行　福與平橘

御近習　宮崎生駒

佐治岱次郎

御側小性　岩井辰次郎

隅谷八十造

御參內ニ付、御進獻、左之通、

禁裏御所ニ、

御太刀　一腰

蠟燭　三百挺

御馬代黃金　壹枚

准后御殿ニ、

羽二重　五疋（白三紅二）

干鯛二拾枚入　壹箱

右御品　御參內前、長量平持參相納、

一御袖裏幷禁裏附ゟ被差出候御次第書、左之通、

御袖裏

安政五年二月九日

澁井榮太郎

施藥院ニ至ル

一今日巳刻參內候樣、一昨日　傳奏衆ゟ被申越候ニ付、五時熨斗目・半襠着出宅、施藥院に相越、如例施藥院門內に出迎候ニ付、鳥渡及會釋、玄關下座敷に取持中居小膳・小（京都大工頭）（京都郡代）堀勝太郎・三輪嘉（二條殿番）之助出迎刀渡之、壹人ゟ座敷入口迄先立、刀ゟ同斷家來請取之、

一書院に通り着座、施藥院幷取持之者兩人にも逢、相應及挨拶、

但、施藥院不快ニ付、山脇道作罷出、

一施藥院に參着之案內、御附に公用人ゟ徒士使を以申達之、

一御附入來於二之間逢、御次第等相替儀無之哉之旨相尋、無替儀旨上座之者ゟ申聞之、先格之通取計候樣申達之、夫ゟ懸合料理差出之、

進獻物納入

一進獻物無滯相納候旨、家來申聞之、

一御附歸候ゟ見計、衣冠着替、

一山科家雜掌松田左近番長、衣服爲改相越、於休息所閾を隔逢、公用人披露、衣服改之退去、

但、引續原彌十郎・立田錄助に於書院逢、

一御進獻物夫々相納候旨、美濃守家來罷出、以公用人申聞之、

一傳奏衆ゟ雜掌來、時刻宜候旨案內候樣口上、公用人承之、自分二之間正面に着座、太刀ハ後ニ差置、公用人を以、右使者相通、公用人披露、是にと申進候付、御口上之趣致承知、追付致參內旨宜ゟ申達候、少々見合、施藥院ゟ退散、如例何ゟ相送候間、夫々及會釋、門外ニゟ乘輿、

施藥院ヨリ退ク

一御唐門外ニゟ下乘、太刀携、御門內ニゟ御附初、夫々出迎有之、及會釋、一人先立、平御唐門外ニ同心出居所內、右之方與力・同心出居、諸大夫之間緣頰ゟ上り口三間計手前ニゟ太刀用人に渡、

御唐門外ニテ下乘

一沓ヌキ石ニゟ沓ヌキ參　內、鶴之間着座、

參內鶴間着座

御次第書

參內之儀

一堀田備中守參內、鶴間着座、

「諸大夫之間ゟ參入、（朱書）　參內之儀、非藏人を以、傳奏衆に被申述、」

一傳奏出會、「廣橋東坊城」（朱書）備中守、

御口上被申述、傳奏退入、

「此間ニ議奏衆・昵近衆・御由緒之衆出會有之、」（朱書）

言上之後出席、告可有

小御所内見ノ儀

御進獻目錄披露龍顏ヲ拜ス

御對面之由、

「(朱書)御口上、

彌御安全被成御座、目出度被　思召候、今度外國御取扱之儀ニ付、爲　御使私被差登候ニ付、御目錄之通、御進獻被遊候、

一小御所内見之儀、傳奏衆に申達、自分兩人誘引ニゐ罷越、」

一出御之後、傳奏衆鶴之間出席誘引、備中守小御所取合廊下北方列座、

「(朱書)兩卿誘引ニゐ廊下通り相越、小御所取附御廊下ニゐ一度中座、又會尺ニゐ入、羽目之間を後ロニして着座、」

一御進獻之御目錄、傳奏衆披露、備中守於中段、被拜

龍顏、

「(朱書)御目錄披露之傳奏、廂着座之上、傳奏會尺有之、御中段御閾外ニゐ下ニ居、御閾に之内に摺上り二疊目に掛り候程ニゐ、末廣前ニ置、拜

龍顏、畢ゐ元之處に復ゑ、」

御臺御方御進獻物、預置東廂、

一備中守自分之御禮、貫首申次、御太刀折紙持參、置中段於廂、被拜　龍顏、

天盃頂戴

九條關白ニ謁ス

「(朱書)傳奏衆會尺を受、太刀目錄持出、中啓と廊下ニ置、廂御拭板中程とゆ上之方向下ニ居、夫ゟ靜ニ膝行御敷居之外ニ居、」御敷居ゟ少し手前ニ居り、二膝程摺り出し候ゐ、左之手をも添太刀差置候、「(朱書)御閾之内、壹疊目之下御ゐりへ付置、」但、御目錄之字頭を手前ニいゐし、太刀ハ常之通りニ置、「(朱書)廂に靜ニ膝退、御障子際、貫首之脇ゟ少し下り、左之方に膝退左り廻りニ起座、又取合廊下ニ扣居、」

一備中守於中段、

天盃頂戴、

「(朱書)又候、傳奏會尺ニゐ罷在、

御中段壹疊目に入、御長柄自分之左之方に出居候、右口ニ載有之、御土器を取りいゐじき候上、三獻銚子いゐし、於廊下篤と掌中にしゐみ頂戴、非藏人に渡、」

一關白殿、於麝香間被謁、

「(朱書)御三家方に掛御目候振合ニゐ取計、御機嫌伺有之、御挨拶申述之、此方とりも今日之御禮申述、」

一於鶴間、御禮申述、

一御殿拜見、傳奏誘引、

「(朱書)傳奏誘引ニゐ、

紫宸殿清涼殿拝見

紫宸殿・清涼殿拝見畢る、鶴之間に着座、傳奏衆向に着座、拝

龍顔、天盃頂戴、御殿・御鳳輦拝見難有旨、御禮申述之、取扱之挨拶も申述之、

但、御鳳輦ハ、退散掛ケ致拝見候得共、先に御禮申置之、

鳳輦拝見

一右相濟る、兩卿ニも、

准后御殿に、先に被參候由ニ付、被入、」

參内殿奏者所拝見

一御鳳輦拝見、御附案内畢る退出、

「暫有る非藏人案内申聞、退出、非藏人先立、階を下り、夫を里御附誘引、内侍所通り、

庭上ゟ拝見、次ニ御鳳輦拝見いるゐる、

但、御附を里金剛草履之挨拶有之、相用、

准后御殿ニ參上

一夫を里跡に立戻り、平唐門通り、外御唐門を出、乗輿、」

一御殿拝見兩卿御誘引、右相濟、諸大夫之間ゟ下殿、夫ゟ御附案内ニる、廣庭通りを南に

承明門前ヲ東に、御鳳輦舍ニる御鳳輦拝見相濟、本路平唐門に退出、夫ゟ御車寄前

を北に、參内殿・奏者所邊拝見、如元南に御唐門ゟ退出、夫ゟ御春屋之御門を入、御車拝

見相濟、直ニ

准后　御殿に參殿、

一表御門外ニる下乘、　御車寄ゟ上り、太刀持上ル、薄緣に取次出迎有之、

一御客間着座、御次第書之通り相濟、退散、

准后御方之儀

一備中守參上、御客間着座、傳奏對座、

「御車寄を里參上、階上に御附出迎、先立太刀持上り着座之後ロニ置、兩卿と着座之

上出座、」

一上﨟出會、有口祝、備中守、

御口上被申述、上﨟退入、

「兩人に口祝有之候上、自分進ニ出、

御口上前同斷、申述之、」

一上﨟更出席、

御返事、追る可被　仰入之由申述、退入、

一賜菓酒、各盃三獻、

重肴御乳人引之、

「兩卿相伴、給仕北面、不戴會尺ニる請取、頂戴御菓子之内壹ツ紙ニ包懐中、」

安政五年二月九日

堀田閣老參內小御所ニ於テ天顏ヲ拜ス

一備中守御禮申述、退出、

（朱書）「兩卿に菓酒頂戴之御禮申述、退散之節、兩卿初之席迄送り有之、」

御手扣御袖裏

一九條殿・鷹司殿に、

御使相勤候ニ付、（熨斗目長襠、）着替之上、取持幷施藥院に逢、如今朝、

一傳奏衆に、今日之御禮廻勤申置候事、

但、九條殿・鷹司殿にも、同斷申置候事、

〔川路聖謨都日記〕○宮內省圖書寮所藏本

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

（二月）九日　朝しくしめきたる雪。晝晴。山ハ霞實によろし。哥にいふのとし。此と關東にハなし○備中守殿別段　御使ハ廉にそ。參　內之。小御所にそ

天顏拜有之候。御自分之御禮ハ。御椽にゐ有之候由。陪臣

天顏拜。關東乃執政故なるへし。はしめて。御勘定奉行御目付て。御附添にそ。參　內之積之しの。夫に不及しそ相濟申候（○中略、）○備中守殿　御使御口上て。　禁裏彌御安全云々と有。御勇健御機嫌なとゝハなし。何にと思召候と認る。こゝ往古よりて　御使ゟ兩卿へ被遣候。御書躰之。○元來て衣冠にそ。御附添申上候ゐ。參　內之積之しの。御進獻物に御右筆附添。布衣淺沓ハ用ひ申候。右にそ兩人ハ御附添に不及。實に官家之人に被笑不申もよし。沓て至ゐてきにくし。左衞門尉なところひ候ハ。受合なれ。其患もなく助りしハ。實に天助なるへし。

〔小倉藩京都戊午日記〕○伯爵小笠原長幹所藏本

二月九日、晴、（○中略、）

一堀田備中守樣、今日初ゐ御參　內、首尾好相濟候事、

二月十日、

一左之通、御使者相勤候事、

干鯛　一箱
昆布　一箱
御樽代　五百疋

以上

御名

御口上手扣

今般御參

內、首尾好相濟、珍重御事御座候、右爲御歡、以使者、目錄之通致進覽之候、

堀田備中守樣

安政五年二月九日　二一九

〃

右立歸候ゐ、御安否相伺候事、

〔米使波兒里士於江戸廢舊約更交易條約結定一件〕〇外務省所藏本續通信全覽所載

小…使者　中村、、、

堀田正睦上京奏聞案

備中守上京

奏聞振下案

近來、亞墨利加合衆國度々渡來有之候ニ付、御勘考之處、當時海外之振合、戰國七雄と申時節ニ付、　御國計古法を申立候共、追々夷人渡來、如何樣之儀出來も難計候間、今般　御國法　御變革被成度、夷人申立候儀、可成丈取縮め條約致し遣し候ハヽ、

御安心之場ニも可至、中興之　御開業之　思召ニ候得共、　御國人心居合不申候ゐハ、却ゐ禍之端を引出、內外よ〻亂を生候樣成る時ハ、實以不容易、　御國體ニ拘〻候間、此段御相談被　仰上候、

戊午二月九日、

九條關白以下幕府ノ贈物ヲ受ケズ

一堀田備中守、今日參　內、黃金五十枚・金香爐鳳凰・伽羅等二品被獻之、關白九條尙忠公始、傳奏・議奏等ゟ贈物有之候得共、其取計振賄賂ゟ紛敷候故、各受納無之、如斯躰ふて

長野主膳斡旋

ハ、容易ゟ事情之切迫を可得說時機ゟ無之ニ付、百方籌策を旋し候へとも、不得便宜、然るゟ幸、井伊掃部頭家來在京長野主膳（義言）と申もの、攝家方始堂上家へも立入熟意之向も趣（向）ニ候間、同人を以て、九條家嶋田左兵衞へ大ゟ游說させ、首尾を繕せられよし、密ゟ風聞有之、

堀田正睦參內ノ報告ニ對スル在府老中ノ返翰

〔老中書翰〕〇公爵德川圀順所藏本御城書拔書拾遺所載

〇二月老中堀田正睦宛

御狀令披見候、御自分儀參內可致旨、被　仰出、去ル九日、朝參、

公方樣御口上之趣、兩傳奏ニ申達、被進之品々差上候處、　御感悅ニ被　思召旨、被　仰出、於　小御所、拜

龍顏、　准后にも參入、　御諚之趣被申、進物差上候處、　御滿悅ニ被　思召候、得其意、

御紙面之趣、及　上聞候、恐惶謹言、

二月　　連名

堀田備中守殿

御狀令披見候所、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤候、然ゝ御自分儀、朝參被致候處、拜
龍顔、天盃頂戴之、　准后にも參入、御菓子・御酒頂戴之、誠以　御威光故ニ付難有由、得其
意、御紙面之趣、及　上聞候、恐惶謹言、

二月　　連　名

堀田備中守殿

幕府年頭使參内

堀田正睦參内

〔森泰次郎書翰〕○昨夢紀事所載

○上(二)略、當月四日、左衞門尉(川路聖謨)殿京着、同五日佐倉侯(堀田正睦)御初、御勘定方・御目付・御右筆方とも上京御
坐候、同六日、一同御休息、同七日、年頭使高家宮原攝津守殿着、翌八日參
内、同九日備中守御參
内、衣冠、午刻過迄施藥院宅ニゐ御待合セ、午半刻比參
内、夕七つ時過迄御手間取、於
小御所、
天顔拜有之、關白殿參　内無之、傳奏兩卿而已御面會、議奏衆へも御面會之趣、一ト通り之
御咄御座候旨、關東ゟ御使之趣意、御書取を以傳奏兩卿被達候旨、紫・清兩殿幷御兩輦御車
とも御拜見、夫ゟ

准后御殿へ參入

准后御所へ御出相濟、御着替之上、關白・太閤殿へ御越、關白殿ハ御不快に候得共、押ゐ御
面會、太閤殿ハ御逢無之旨、夜六半時過御旅館へ、御歸○中略、二更およひ候儀、亂書失敬之段、
偏ニ御用捨奉願候、右之段御請旁奉申上候、以上、

二月十三日　　森泰次郎拜復

小石川様　尊下

奉再啓候、今晩泊ニ付取認候間、其儘呈上仕候、必失敬亂書之儀、御宥免之御沙汰奉願候、
以上、

○附錄

兩役一同ニ判金一枚ヅヽヲ賜フ

〔坊城俊克日記〕○孝明天皇紀所載

二月十二日、參内之處、今度亞墨利加一件ニ付、段々心配苦勞ニ思食由ニ付、兩役一同關東ヨリ進獻之判金一枚ツヽ拜領、
以女房(生島朝子)駿河賜之、

〔中山忠能手記〕○宮内省圖書寮所藏本中山忠能切歷資料所載

二月廿三日、建内話、(久我建通、議奏)○中略、

一内々　禁中へ、一萬金可獻、又兩殿下へ一萬兩ツヽ、武傳へ千兩ツヽ可送由之處、
禁中ハ、　叡慮不可被同之獻上不宜、殿下命終、殿下之不(マヽ)被受之、太閤ハ事濟之上、目出度可被受由ニて返却、依之武傳迷惑、同
太閤之趣意欤ト云々、

安政五年二月九日　二二三

〔松宇日記〕○水戸藩士西野宣明日記 子爵澁澤榮一所藏本

三月五日、天氣晴、和暄、早朝御文庫出仕、○中略、

尊慮云、閣老堀田去月九日參拜、龍顏、頂戴、天盃、參入准后云々、內云々、林家、諸神社・佛閣之古記・什物等見物、京中徘徊之由風聞云々、

幕府、新番頭林元賓內藏頭・先手永井尙德能登守ヲ西丸留守居ニ、日光奉行松平乘利上野介ヲ新番頭ニ、持頭河尻鎭長式部少輔ヲ日光奉行ニ、中奧小性渡邊孝綱肥後守ヲ山田奉行ニ轉補ス。

〔將軍申渡〕○內閣記錄課所藏本 安政年錄所載

御座間

日光奉行　松平上野介

新番頭　林內藏頭

御持頭　河尻式部少輔

御先手　永井能登守

中奧御小性　渡邊肥後守

新番頭　林內藏頭跡

西丸御留守居

日光奉行　松平上野介跡

西丸御留守居

山田奉行　山口丹波守跡

松平乘利

林元賓

河尻鎭長

永井尙德

渡邊孝綱

二月九日、右、於御前被仰付之、

〔松平忠固日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

二月九日、○中略、

御役替之書付

二月九日、

山田奉行　山口丹波守跡

日光奉行　松平上野介跡

西丸御留守居

新番頭　林內藏頭跡

右　御直ニ被仰含之、

〔代官竹垣直道日記〕○維新史料編纂會所藏本

安政五年二月九日

（高麗環雜記）

中奧御小性　渡邊肥後守

御持之頭　河尻式部少輔

新番頭　林內藏頭

御先手　永井能登守

日光奉行　松平上野介

二月八日、半晴、○中略、

一河尻ゟ奥文ニ而、明日被爲召候ニ付、そつ・ちよ差越呉候様申來ル、

一同人ゟ奉札御用
召爲知來ル、

同九日、晴、○中略、

一河尻式部日光奉行被仰付候爲知、奉札來ル、

同十日、晴風、

一朝五半時出宅○河尻ヲ相越、御役替歡○中略、九ツ半時過歸宅、

〔神宮御用留〕○小田七大夫手記 神宮文庫所藏本

二月九日、○中略、

一内家司ゟ來書、
新御奉行
渡邊肥後守殿御請狀一條之事、
同返事遣ス事、

一新御奉行渡邊肥後守殿へ請狀差出し候事、

〔安政年錄〕○内閣記錄課所藏本

二月十一日、

右組中御引渡之旨、於中之間、老中列座、中務大輔申渡之、

新番頭
松平上野介

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

御白書院御勝手
御暇
山田奉行初ゐ
渡邊肥後守

三月十五日、○中略、

時服四、羽織

右御禮、

○安政年錄・温恭院殿御實紀ニモ、マタ三月十五日ノ條ニ同一内容ノ記事アリ。

大坂城代土屋寅直采女正○土浦藩主 同町奉行久須美祐雋佐渡守ノ建議ヲ容レ、大坂及其附近ノ開港ヲ否トスル意見ヲ、老中堀田正睦備中守ニ上ル。

〔大坂城代土屋寅直書翰〕○伯爵堀田正恒所藏本 堀田正睦外國掛中書類所載

堀田備中守様　　土屋釆女正

以剪紙啓上仕候、春寒去兼候處、益御勇健被成御在京、珍重御義奉存候、然ゟ、舊冬亞墨利加官吏申立之儀ニ付、當地町奉行久須美佐渡守一名ヲ以、見込之趣、　御手前様ニ申上候書付、（下ニ掲ゲ）私迄差出候ニ付、右之段申上、愚意添書共貳通（次ニ掲ゲ）入御披見候間、厚御賢考御座候様奉願候、此段申上度如是御座候、以上、

二月九日

堀　備中守様

參人々御中

土屋釆女正

猶以、時候折角被成御厭候様奉存候、以上、

〔大坂城代土屋寅直建議書〕○公爵徳川圀順所藏本 邊疆羣議拾遺所載

（朱書）「午二月九日、堀田備中守殿京都旅宿ゟ差出候書付、」 邊疆羣議隨拾遺

亞墨利加官吏申立之儀ニ付、今度久須美佐渡守見込之趣申上候書付一通、私迄差出候間則

久須美祐雋ノ意見書ヲ提出ス

大坂開港ハ不可

米人漸ク賊心ノ本性ヲ顯ス

異國船ノ内海ニ入ルヲ禁ズベシ

進達仕候、右ゟ兼々私儀ゟ愚意之趣申上置候通、當地之儀ゟ皇都御近邊之儀、殊諸國輻湊之要津ニ付、若開港交易等之儀有之候ゟゝ、當所之人心ゟ勿論、往々諸藩之氣請迄ニも差響、其外萬事以之外御不爲之儀出來可仕ゟ奉存候、尤、萬一異國船渡來之節取計方之儀ニ付ゟゝ、去巳四月中被仰下候御下知之趣も御座候事故、右之心得ニ罷在候得共、舊冬追々御達御座候亞墨利加人申立之趣、其外等之事情ニゟゝ、當地にも開港之儀、彌相願候趣ニ相見申候、右躰之事ニゟゝ、兼ゟ條約之趣ニも相違いたし、彼等追々賊心之本性を顯候儀ゟゝ深心配仕候、乍去　御國法御大變革之御沙汰被　仰出候上ゟ、今更可申上様も無御座候得共、當表ゟ勿論堺・兵庫・西宮其外都ゟ幾内・中國之内海・紀淡之要門ゟ内ニ異國人乗入候儀ハ、猶又嚴重御禁止被　仰出候ゟ可然御儀ゟ奉存候、殊佐渡守（久須美祐雋ノ大坂町奉行）心附取調申上候趣、夫々尤之筋ニゟゝ、偏ニ　御爲を奉存、一己決心遮ゟ申上候段、誠ニ精忠之心底感入候儀御座候間、其儘入御披見申候、何卒厚御賢慮被成下此上御永久萬全之御良策　御爲宜御所置御座候様仕度奉存候、依之此段申上候、以上、

二月

土屋釆女正

（堀田正睦外國掛中書類）

〔大坂町奉行久須美祐雋建議書〕○邊疆羣議拾遺所載

安政五年二月九日

大坂町奉行佐渡守様ゟ、御城代土屋様ゟ被差出候書付寫、

午二月六日、此方様ゟ御持參御進達、同九日、京都ゟ以御添書御呈進、〇湖辺輯書

（朱書）「大坂町奉行久須美佐渡守ヨリ、堀田備中守殿ゟ差出候書付寫、」〇過歴彙議拾遺

亞墨利加官吏申立之内大坂表開港之儀ニ付愚意之趣申上候書付

久須美佐渡守

大坂開港ハ不可

大坂ハ金銀融通商品請拂ヲ以テ産業トス

此度御達御座候亞墨利加使節差出候書付、幷應接書和解之趣承知仕候、實以不容易儀從來之御國法存亡之機會奉恐入候次第、於私も忘寢食晝夜不堪苦心儀、尤　御國法大御變革之於御所置ゟ、今更可申上様も無御座候得共、使節差出候書付之内、通商開港之儀、當御地にも相開申度段相見、右ゟ中々以　御許容可相成儀共不奉存候得とも萬一（イ許容）御免御座候ゐゟ、

帝都近之儀ゟ申、人氣騷立可申、其上

御國内諸産物融通忽ニ差支候儀ゟ奉存候間、其儀大略左ニ申上候、

一當御地之儀ゟ、金銀融通ゟ勿論、諸國取引第一ニゐ身元宜町人共、諸家に手厚ニ金銀貸出、勝手向引受取計居、土産ゟ申物ゟ更ニ無之候得共、其筋之問屋商人共諸國に仕入先貸等仕、何品ニ不寄手廣ニ請拂仕候儀を專ら産業ゟ仕、其利潤を以融通も宜、江戸初諸

大坂ヲ開港スレバ奸商跋扈富豪畏縮セン

要用ノ品ヲ以テ無益ノ品ト交易スルノ害

堺港ヲ開クノ風評

國之通辨相成、右故古來ゟ商法嚴重ニ相立居り、姦商共有之候ゐも漫ニ手を出し候儀難相成儀ニ御座候、然處今般夷國通商之港御開有之候ハヽ、一時混亂之上奸商共ゟ時を得候ゐ、空手ニゐ大金を貪り候様之巧可仕ゟ必定、身元宜敷正路之商仕候豪富之者共ゟ畏縮いさし、手を縮メ可申ゟ勿論之儀、左候ゐゟ江戸およひ諸國に之融通諸藩に之取引共、一時ニ差支可申儀、尤當地ハ融通第一之土地柄故、異國ゟ通商有之候ハヽ、猶更手廣ニ融通可相成哉之論も可有之哉ニ候得共、其儀ゟ事實不相當之儀ニゐ、今日　御國内日用之品を得候事ニ候ハヽ、生民之益も可有之候得共、當時ゟ　御國内ニ於て不足之品無之候處、米穀ゟ勿論、絹布・紙・蠟等を初、何品ニゐも要用之品を以、無益之品物ゟ交易有之候様ニゐゟ、此上諸物之價騰貴ゟ勿論、諸國に之取引差支候儀まて、素々米價ゟ勿論、諸國産物之相場等迄、都ゐ引受候土地柄之儀故、差當り融通大ニ差支、

御國内之四民可及難澁ゟ目前之儀其節ニ至り如何程嚴重ニ商法等相立候共、素々夷人共に引合候儀ニ付、姦商共之取締方中々以難行屆、終ニ騷亂及ひ可申儀ゟ奉存候、

一大坂表之儀右躰　御國内樞要之場所ゟ付、通商御開港ニゟ難相成、就ゐゟ堺港之儀ゟ往古異舶渡來仕候儀も有之候由ニ付、大坂代港ニ御開も可有之哉之風評も御座候得共、往古ゟゟ地理も相違いさし、市中盛衰も有之候儀ニ付、萬一大坂代港ニ御開ニ相成候共、

和製砂糖ノ件

大和川

築留ノ要害

有名無實ニ望無(イ其詮)之儀、既ニ先年和製砂糖一事ニ付候ゐも、於堺ニ捌方差支、大坂之ゟの
を語ひ取捌候ゟ、兩所大ニ混雜および、伺之上當時之御取計方ニ相成、漸仕方相立候儀、
纔ニ砂糖一種ニゐも右之樣之弊を生し候儀、況異國通商ニ於てハ何レよも大坂之ゟの
相語ひ、堺之ゟの重立取計候樣可成行ハ必定之儀、左候得ニ前書申上候融通合ニ差支候
儀ニ同樣、其迄ニ兩所之ゟの混亂いさし騷立可申儀、且又、堺・大坂ゟ之境ニ大和川之流
末有之、右川上ニ和州長部郡其外所々枝流も落合候由、年柄ニ寄渇水通船滯候儀も有之
候得共、先ニ大坂・堺ゟ大和路ニ相廻候荷物ニ勿論、同所ゟ差出候品も運漕無差支通行
往來候川筋ニゐ、末流より凡八里程川上河州安宿部郡龜ヶ瀨村地先ニ、龜ヶ瀨之瀧ゟ唱
候ゐ、水面壹間程高低有之、是迄ニ通船も相成、此處ニゐ一旦陸揚之上、猶又瀧之上手ニ
て他船ニ積替往來仕候事之由、是より陸路ニゐニ京都ニも容易ニ通行相成候儀、其上右
川筋河州柏原地先ニ、築留ゟ唱、大坂表御要第一之由申傳候大切之伏樋有之、河州村
々ゟ日夜樋守之ゟの附置、其上樋元役ゟ唱、右村々役人共年番ニゐ、四五人宛築留會所
ニ詰居、水行分水等之世話仕候趣ニ有之、右堺表ゟハ纔ニ四里不足之地ニ、右樣大切之場
所も有之候儀旁以於堺御開港有之候ハヽ、同所在留中之夷人共、小船ニゐ手近之儀故、
右大和川末流ゟ乘入候儀も可有之、是以不容易儀、土地之ゟの共も一同危踏、別ゐ人氣

西宮兵庫ヲ開港スルハ不可

大坂兵庫西宮堺等ハ警備不十分ナリ

騷立可申儀ゟ奉存候、
一攝州西宮・兵庫兩港之儀、是又、大坂代りニ開港之御評議も可被爲在哉、然處西宮ニ別ゐ
手狹之儀、兵庫之方ニ船著も宜場所故、堺港ゟも廻船輻湊も仕候趣ニ候得共、諸向萬事
是又手薄ニゐ、中々大坂替り開港ニ難相成場所、其上大坂ニ關係融通方等ニ差支候儀
ニ、堺ゟも甚敷儀ニゐ、殊ニ兵庫・西宮共船路ニ無之候得共、陸地ニ大坂を不經して京都
ニ容易ニ往來相成候儀故、旁以御開港ニ難相成地所ゟ奉存候、
右當御地ニ勿論、兵庫・西宮・堺等御開港相成候ゐニ、御國內諸品融通礑ゟ差支可申次第、
愚意之趣大略申上候儀ニゐ、其餘差支之廉々多端之儀ニ有之、第一帝都近之儀、江戸ゟ違
ひ諸大名詰合ゟ申ゟのも無之、御手薄御不安心ニ申上候迄も無之儀、深く心痛仕候儀ニ御
座候、依之　御國法大御變革被爲
在候得共、何卒右場所之儀ニ、通商之御開港御除ニ相成候樣仕度奉存候、此儀御役ニ對し、
差當り御爲第一之儀ゟ愚意決心仕候間、遮ゐ此段申上候、厚く御賢察之程奉願候、乍去、御
雄斷之上被　仰出候儀ニて、申上候趣意難相立儀ニ候ハヽ無是非次第、素ゟ不調法至極之
私儀、中々以右樣之御用難相辨儀ニ御座候間、何卒　御免被成下、御場所相應之ゟのニ被
仰付被下置候樣仕度、此段奉願候、尤同役(戸田氏榮)ニも熟談之上、可申上哉ニも候得共、同人儀ニ昨

年來之在勤、地理時情等も一通ゟ承知仕居候得共、いまゝ委細ニゟ熟察仕間敷、其上差急き御在京中ニ申上候儀、素々愚意見込之趣共、一途ニ申上候儀ニ付、旁一名を以申上候儀ニ御座候、以上、

午二月　　久須美佐渡守（涕泣輯書）

林津田兩人下坂セズ

大坂臺場改築ノ内命

〔大坂城代土屋寅直書翰〕○退鑾彙議拾遺所載

○二月十五日前水戸藩主德川齊昭宛

（表紙）「安政五年午二月　土屋采女正ゟ差上候封書寫」

御別紙拜見仕候、舊冬林大學等上京之處、此度備中殿初大勢登り候儀ニ付、段々御推考御深配慮之趣、一々御尤御儀奉存候、右ゟ林・津田兩人ゟ、御用向相濟次第、當地にも罷越、外夷之事情等委曲申聞候樣、最前老衆より御沙汰も有之、早春ゟ相待居候得共、今以下坂無之ニ付、不容易御時勢ニ罷成心痛仕候、且又、備中殿上京之儀、幷大學等之事ニ付、此地に被　仰下候御達之趣等、（本月二十四日ノ條ニ收ム）別紙寫指上申候、且又、此表御臺場等又々御模樣替之御内意被仰下、何分急々之儀ニ不行屆心配仕候、殊ニ

久須美祐雋ノ建議ヲ堀田閣老ニ呈ス

左内京都ニ至ル

叡慮之程、深奉恐入候御儀奉存候、縷々御教諭被　仰下候趣難有奉感銘候、扨又亞墨利加申立之趣ニ付、當地町奉行久須美佐渡守一己存寄書取、私迄指出候、直京地に備中殿に去ル九日私添書仕、進達仕候間、御内々奉入御覽候間、委細ゟ書中ニゐ御承知可被下候、老人ニゐ此度之見込決意之心底、誠ニ感入候儀、於私も同意奉存候、私筆頭以早々申上候、以上、

二月十五日

○本書ハ、正月二十六日、德川齊昭ヨリ土屋寅直ニ贈リシ書翰ニ對スル返翰ナリ。齊昭ノ書翰ハ、正月二十六日ノ條ニ收ム。參看スベシ。

福井藩士橋本左内（綱紀○景岳○變名桃井亮太郎・桃井伊織）京都ニ至ル。（七日）是日、三條家諸大夫森寺常安（因幡守）ニ賴リテ、密ニ内大臣三條實萬ニ謁シ、詳ニ海外ノ情勢ヲ述ベ、大將軍建儲ノ急務ナルヲ說ク。（十四・十六・二十二日、左内、マタ實萬ニ謁シ入說スルトコロアリ。）

〔福井藩士橋本左内書翰〕○春嶽文庫所藏本

○二月八日江戸福井藩邸内中根靱負宛

急便ニ付、不取敢一筆謹啓、先以

奉恐悅候、隨て奉恭賀候、次ゟ去月念七出程、日々の風寒飛雪、生來始て之難義、乍去、先川々ハ指支不申、昨七日首尾克京着仕候、京都ニては大驚愕、併、此ハ直ニ鎭定致し申候、此

巷説區々人心騒擾

書生輩ノ流言

堀田ノ上京ト林津田兩人ノ進退

表へハ、縉紳家御書御願被成度内旨を蒙り上洛致候旨、大阪ハ航海術取調なり、其外諸家之秘書記錄探出之爲ニ、態々小拙幷二生被遣候（（備前山伯藏・取部雅五郎））と申唱候て、先服部（（雅五郎））へ諸名家之御染筆御秘書等内調之義申付、三條家・久我家へハ我等より直手次有之趣申聞候處、服部大喜ニて厚心配致呉候、偖、途中之巷説區々、江戸ニては既ニ兵刃相接居候勢ならんなどと、殊之外人心騒擾、雲介土民迄大ニ擔憂、頻ニ詰問ニ逢ひ困切候位、堀田・川（（川路））・岩（（岩瀬））之徒ハ、戰爭之御達使なりトも、或ハ伺之使なりトも申候得ども、所要、血臭世の中ニ相違ハなしと申合、萬口一和、實ふ不安事ニ御座候、依て聊御爲ト存じ、精々安着致候様、處々ニて辨解申候處、其ニて中ニは氷釋致候者不少奉存候、其中可惡ハ書生輩頻ニ流言を觸らし候鹽梅、此等より別て不落付ニ相成候歟ト被思遣候、

京俗之説ハ夫ニ反し、交易ハ列藩不落付故、堀閣黄白ニて交易勅降拵ニ被參候也と專ら申居候、

近畿開港御嫌之義、既ふ勅答有之候ハ舊臘之事、林・津田京着前ニ有之、此ハ此地へ參り、始て分明ニ相成申候、

林・津ハ最早御暇被仰出候由、傳奏衆より昨臘被伺候海防之條々、既に奏問ニ相成候間、何時ニても勝手次第ニ引取候様トの降旨、

久我三條兩卿ニ就テノ世評

然處明九日、堀閣參內之由ニ候間、其迄ハ定て出立不相成事ト被考候、此兩人を返し候ハ全く川・岩之策ならん、兩人罷在候内ハ、舊臘の伺振相消不申故、舊冬之不都合ハ總て使節之落度ト申趣ニ取成、新ニ奏聞仕仕組候義ならんト奉愚考候、堀・川・岩ハ大津泊ニて、去五日京着、彼此ニて直接探索相試候へ共、未タ三人技倆何ニ出候哉相分不申候、

久我殿（（建通））ニハ專ら打拂論之由段々承及申候、三條殿（（實萬））ニハ出凡之御沙汰も有之、且世評ニて〻御相談ニ御加可被成降旨御座候事ト被考候、內實承候へバ、舊臘以來海防一議、傳奏衆（御先役と申、御人物と申旁ニて、）の、外ニ發輝するハ、勿論ふ御座候、

今日、追付森寺因州（（常芳））方へ仕懸候積、何分手詰早急之合戰、駑才痴質、手廻り兼、特命相蒙候萬一ニも堪不申、深奉愧入候、定て書生間ニハ種々論も可有之候へ共、先、內實相知候迄ハ粗忽ニ乘出候ハゞ、顚覆阢隉の患も可有之ト指控、乍難澁、俗眼明慧之者より內探候件々、如右ニ御座候、尚、追て猶藏輩ニも爲調可得御意候、大急擱筆、

二月初八　　景岳

雪江君

〔橋本左內書翰〕（伊地知幾所藏本）

三條實萬ニ謁シ肝膽ヲ吐露ス

安政五年二月九日

○二月十五日中根靱負宛

内書親展

謹裁、本月十日夜之來報、今曉相達、當日夜戌之刻、日本橋近邊ゟ出火、當邸ハ御近火、靈邸ハ御近火に候哉、又ハ御燒失ニ候哉ハ不相分候へ共、何分不一方御混雜奉恐入候、先以君上益御機嫌克被遊御座奉恐悅候、隨ゐ愈御清安奉壽賀候、邸内一統御無事ニ候哉如何ト、頻ニ關心仕候、人世之得失、禍福之乘除、殆端倪窺破そゐらほ、實ふ浩歎ニ餘申候、乍去、當邸丈ハ必定萬安ゟ、此儀樂ニ致居申候、偖、此地之情狀も千難萬艱、例之御方ニ者得拜晤、肝膽吐露仕候、兎角、百事書生輩之爲ふ種々公武嫌疑も相生し、却ゐ皇國之御爲筋ニも不相成こと出來可申哉ゟ、深痛心罷在候、且、處々耳目口舌饒多、針も棒にゐり、冥々も照々ふ異ならぬ勢、誠ふ所措手ふ困切申候、乍去、益厚爲天下蒼生御心配御座候條々者、隨宜處分仕置候、何分、今後ハ　國家寧靖、人情鎭伏仕候て、

上々樣　御惱慮不被爲在して事治候樣の御代に相成候樣、微臣之心願に御座候、縷々得御意度奉存候へ共、秘中の秘、漏泄ゟ恐候故指控申候、吳々上爲國家、下爲生民、精々心配仕候間、此段御承領奉希候、

吾藩の義も舊臘の御建白振、全西洋風にて、

皇國を思之狀も無之云々ト、

上下ふ沙汰も有之候哉ニ、内密取沙汰仕候、此義篤御耳ニ入候得方、愬ニ御勞思ハ被下間布、此地之一義者萬緒微力なりふ、周旋可仕候、書ニハ恐露漏、不書ハ患不盡、人事常如此、此際、寸情萬々御諒察、

二月十五日

時下、例ニ暖意相生候、御自玉奉專祈候、以上、

（内封）

常盤橋邸ニて三ニ出ル

中根靱負樣　　橋本左内

用書

二月十五日發

平安

（外封）

中根雪江樣　　桃井亮太郎

内用御直披

二月十五日發

平信

〔橋本左内京都報告書〕○春嶽文庫所藏本

安政五年二月九日

○二月二十九日江戸福井藩邸内中根靱負へ（節錄）

三條家應接

三條公ニ西洋ノ事情ヲ說キシモ理會ナシ

議奏ノ人物

公家ノ迂遠特ムニ足ラズ

國内ノ問題ニ就テハ三條公議見アリ

建儲問題ニ論及ス

(二月)九日、三條公へ拜謁之節ハ、極力西洋之事情等說盡候得共、長袖故歟殆ンド充分の御融解不相成、精神氣力其上へハ注不參事忽看破致し、依て此ハ矢張令格舊套不脫却人と存じ、此ニてハ堀田之應接嘸々と被案候、議奏方も何れも正論（實ハ迂遠也）ト申內、久我ハ一番、次て德大寺・萬里小路のよし、恰悧圓熟ハ三條を最ト承及候處、果して探索思案盡其圖を得、三條公外の事ハ恰悧なり、圭角鋒稜盡消滅して、混然一溫々恭人、其上御思慮隨分被爲在、天下の事ハ關心被致居ながら、事業上ニハ中々得力なし、依て始て公家之迂遠寬漫、不足恃事熟察、鎌倉へ權之移ルも仕方なしと、心中ニ嘆居候、依て前說を飜し、三條公へ直ニ國內の御處置に說及候處、着々御得心、海外形勢トハ別段の味御坐候、續て關東人物の御品評ニ相成候、此又一段御味有之、餘程御自身樣御考案も有之候位、由此西城へ轉じ大ニ御見識一定致し候、此頃も既ふ縉紳家ニハ堀田ハ論不足、依てなど〳〵ふ致し追返し、諸縉紳の建白（十二八九戰論、攘關東へ持下し、勅使、列侯衆始列座之中ふて開披し、東人ニ落膽せしめ可申抔云事攘、上策ニ被致居候方々不少、（傳奏・議奏擧て此論ニ歸し居候、因て此邊ハ兒戲同前之義と申、三條公へ反覆及說得候処、此も能御

了解ニ相成候、

爾後兩三日攘經て、西丸建立之沙汰大ニ世ニ廣り候故、果吾策之行候攘トシ歡申候、

十四日罷出候節ハ、重ニ前日之論攘反覆し、何分天下の事攘議候者ハ、天下の人に拔んじ候先見なくんバ不叶、又行之勇なくんバ非らず、當世之務ニ處するニハ、智勇の兩字肝要なる趣申上、次で內ニ奸佞徒有之時ハ、大ニ吾志を妨、智勇難施氣味有之事、古今を歷證して陳述ス、依て京地之御模樣承候處、太閤ハ奸物なる趣被相咄候、其外彼此の義御咄御坐候、

左內再度ノ參邸

左內三度ノ參邸

三條公ノ議論

十六日罷出候節ハ、三條公ゟ段々御議論有之、何分海內之處置ニ到候てハ、此方抔中々才力ニ難及、實ハ舊臘如此建白致候とて、越侯を後見ニ致し候ハゝ可然志願のよし御認有之、又尾ハ政事の才に乏しき人と被考候旨抔御物語有之、又備中殿ゟ改正條約書被指出候趣ニて、條約書抔被差出、色々御論判有之、（此條約ハ堀ノ口上ニてハ、備中守出立後尙又入念候て及應接、被縮候處別紙之如相成候ト申出し候由、隨分能御受被遊候、又此條約ニ就キ、一々難詰も致度候へども、堀ハ迚も筆舌共論辯ニ不足、畢竟川・岩ト應接致し候迄のよし被仰、此ニハ甚困入申候、依て三家々門之御人ニても被登候ハゝ、重疊ト被仰候、此節有志公家之論、全如此、國家之大典ニも候へゝ、倍臣風情ト及論定候ハ如何之義、何分堀一人ニ任置候ハ關東ニも不行屆、御三家・御家門ニハ有志之方も有之候

堀田ハ論ズルニ足ラズ

安政五年二月九日

左内四度ノ参邸

三條公ヲ說破ス

建儲問題ニ對スル鷹司太閤ノ態度

へと、其等罷出候ハヽ、物事丈夫ニも論談も可立抔被申居候鹽梅、

廿二日三條殿へ罷出候節ハ、彼公仰ニ、近日今明日ニも、關東へ向、尚又厚列候之存御尋被成度旨、（朱書）「内實承候ニ外之義、一向太閤と議不叶、漸、此一事太閤・關白合評相成候よし」

叡慮も有之、衆評一決致候旨、依て夫ハ乍恐御策不上乘、其譯ハ唯人心の紛擾疑惑を御招被成候迄ニて、列侯迚も縱令異存有之候て、昨年之暮申立候事、唇未乾間ニ變換六ヶ布、又徒ニ時日を費候事實ニ恐入候、堀田を御輕視故ニ可有之候へとも、此ハ何分閣老被任置候義ニ候へヽ、幾度も御論判ニて、愈此廉御不審と相成候處ニて、列侯へ御尋なり、關東へ勅使なり、御尤ニ奉存候、其上其限の事ニてハ、迚も天下の治亂存亡ニ益なき事、當時如此大事を乍被抱、其迄の瑣些の義、今日迄時日を被費候哉ト嘆息致し、反覆辯難仕候處、大ニ御迷惑、究る所鷹一人異論ニて、建儲等御内降も有之度處、何分關東之意ニ觸候てハ如何と、頻りニ壓屈被致、爲其諸卿有志家御迷惑被成、關白殿ニは正論なれ共、大力量無之、前役ト申、御老人と申、何とやら扣氣味相成居、爲之

叡慮達兼候鹽梅、始る切ニ伺取申候、依て人臣之職事君致其身ト申處三四講究仕候處、大ニ御發悟ニ相成、何分同志大寄合、尚又此後の運方共厚相談、又々樣子可申聞旨被仰聞、

右、三條應接之大略、

八日森寺常安ヲ訪フ

九日三條公ニ面謁ス

秘密嚴守ヲ誓フ

形勢議論條々

江戸ゟ道中風說種々の事、一々申上置候通、嫌疑之有之も、古今最第一ニ御坐候、可恐々々、過日も小拙森寺因州に罷越候を附廻し、兩度迄相調候へとも、森寺心得居候故、浪華ゟ所用有之罷越候趣申對候樣子、野村淵も無屹度探索ニ逢ひ消魂申候、可笑可怖事ニ候、本月八日夕刻、森寺へ金七百疋・雲丹三曲持參ニて罷越候處、留守ニて暫時俟居申候、無程悴（森寺常邦）若狹守歸宅、一二閑話、俗說ニ及候折へ、因州面會ニ相成、依て主人ゟ願事有之趣申述、且土俟御直書指出候處、渠も我內情を察候ニ哉、頻りニ時世の事痛嘆仕候、且、明五時頃上下ニて因州宅迄罷越候へヽ、三條公ニハ必御逢可有之旨申聞候、九日朝、山水圖・金千疋持參ニて、外ニ唐紙持參、三條公御染筆相願申候、四ツ時前三條殿へ上ル、無程御面會、種々御話御坐候、先我ゟ當今之御時勢如何被成候思召ニ候哉と御尋申上候處、兼て越侯賢明ハ耳底ニ響居候故、此方ゟ手も附申度と存居候へとも、此ゟ有土之御方へ手指も如何ト控居り候、高知（山内豐信）ハ隨分有志と見受、先年來熟話致居候、乍去、壯年故英果ニ過、動輒引害の恐有之故、每々警置候、然ルニ近來御主君ト御懇意の模樣、殊更今般ハ越侯の近臣御遣、大慶之至、今日ハ無腹藏可相咄候條、戶外ニ出候てハ雙方共片辭も漏聞敷と申事の御誓有之候、依て越前守ニも賢

左内先ヅ内外ノ形勢ヲ説ク

堀田ノ人物評

和戰イヅレモ廟算ヲ要ス

繼嗣問題ニ論及ス

公の御盛德流傳已來已ニ七星霜、今日小臣肺肝吐露仕候も、啻土侯の爲ならす、固機事ハ貴密候事、萬々心得候旨申上、次て海外の景勢御洞察候哉、又ハ御詳聞候哉ト御問詰（此ニて聊御試申上げ候也、）申候處、茫然の御樣子、夫ニてハ御咄六ヶ敷候、先私ゟ說始候半ト申、近來魯英之垂涎・墨夷之恐愒等粗申上候處、一通御了解御坐候、次て關東之勢、水老公之御不首尾御英烈、閣老之優游不斷ニ相成候も、英主・哲辟なき義抔粗御物語仕、次て堀田・川・岩等の品藻御尋ニ付、粗申上置、隨分介護致論候處、堀は拙人也と御笑被成候、又福山（阿部正弘）トハ大相違抔申御話も御坐候、所要御見込ハ打拂ニ候哉、和議ニ候哉と御詰問申上候處、先當今之模樣推測候ての事也ト被仰、去らハ和議ニ候哉、唯一通り平穩無事を喜候ハ俗情ニ御坐候、和ならバ益臨戰之手當無之て不相叶、夫ニハ此儘も六ヶ敷義と奉存候、戰ニても唯廟算先定が主トのミ申、五事・七計、各其道を不得して、漫ニ戰ト云鬪ト云ハ、書生の迂論也ト申上候處、何分三家々門內の御人ニ英傑有之樣被存候、其人が恃と被仰候、依て逐々橋公（一橋慶喜）の事ニ及候處、拍掌御歡ニて得其人ト被仰、續て其譯御問申候處、暗ふ　西の丸の御論ニ移候故、直ニ越前守樣御心配條、近來只箇一事ニ御坐候と申、年來之顚末拜陳仕候處、誠ニ御贊賞、越公の被薦賢候事、誠ニ可喜事と被仰、其義ハ內實此表ニも沙汰も有之候間、尙又周旋可致被仰候、夫ゟ將軍上洛等之御咄ニ相成申候、

川路ニ京都滯留ノコトヲ報ズ

舊冬ノ建議叡慮ニ反ス

一橋慶喜ノ風評

主上ハ關白ニ御左袒

粟田宮ノコト

（二月）十二日、此表逗留、是非東人へ可洩存候故、川路迄一筆認（下ニ掲ゲ）遣置、同日野村淵藏（此ニも隱度候へとも、此ハ是非御國ゟ可知事看破、且耳目之用ニハ相立候積ニて、此ゟ態と呼ニ遣し候處、果大悅也、）頻りニ舊冬御建議之事、大ニ叡慮ニ戻り、粟田宮樣始、久我・德大寺・有志方御不同意、唯三條家ハ其ニ稍御心動候よし、殊ニ大坂湊之事相障候旨申立、野村餘り困迫之樣子故、一術施し鎭定申候、（此ハ猶藏同席致居候、御聞ニても可相分、無益故省文仕候、）

十三日、處々へ手を廻し候處、果して御建白引掛阿時の疑有之候鹽梅、三條公も何トやら御疑念有之候樣子、其外野淵之辭不全虛、可恐々々、

十四日、橋公之事、虛實取交、處々ニ沙汰有之、此ハ川路より淺市尹（京都町奉行淺野長祚）（此人川ニ佞附、川ノ耳目也、）ニ態ト洩し、流傳爲致候也、

十五日、關白ト太閤ト正邪之論有之事相分、

主上ハ關白ニ御左袒之事、太閤ハ近來御不出來、殊ニ關東之賂を被受候事など、一々相知申候、

十五日、粟田宮樣手筋附掛候處、果して越ハ賴ニならぬト被仰、大ニ御機嫌不宜よし、依て眞忠不可以迹論ト申事申込、逐々及議論置候、

伊丹藏人ノ斡旋

十六日、御近臣ニ内話候處、此人伊丹藏人（重固）と申頗才力有之者ニて、能小捌申處ニ感服、遂ニ越ハ關東之間者ニ無之事說破して、宮樣御機嫌も御直り申候、其上種々御懇之御意も有之、剩へ仕義ニより御目見も出來候事ニ相運申候、

三條公ノ人物評

十四日、十六日、三條家へ罷出、十五日、森寺へ對談、

果斷ニ欠ク

十七日、春日讃岐守被訪ふ、有故不訪、（十七日朝ゟ廿一日迄伏枕、精神恍惚、頭重食無味、發熱下利、腹痛變急、）此間世上至て平穩、東西の合戰なし、

人物評

三條公御人品格溫雅寬平、御年ハ五十六、御軀幹不肥腴候へ共、亦甚痩小ニも候ハす、中人體ニ御座候、」流石事慣候御方故、圓熟之狀餘りて鋒角稜々可恐方ハ無之、易就の氣味有之候、」三公之官ハ例格ゟハ長御勤ニ相成、世間ニハ格別御規模の事ト申居候、」御同志ハ青蓮院宮樣・中山樣・久我樣・德大寺樣・萬里小路樣位ニて、其中中山樣ニハ別して御懇のよし、」池内大學（陶所ト號ス、）懇意ニ參殿ハ申候へとも、機密十分ニハ御打明無之よし、」御性質御怜悧ゆへ、隨分申上候事ハ能御分り被成候へとも、長袖故ヵ勇邁ふ乏しく、見機而作と申果決ハ一向御見受不申、俗人ゟ申候ハヽて、宜御人ニて、何やら氣象ニ可畏處もあるト

正論ノ人

申位、英傑ゟ申候ハヽて、優柔ト小規模ノ二端ハ不免御人と奉察上候、共語大事ニハ遺憾有之候、其上衆善兼採の德ゟして、邪正混淆之患有之被案候、併徹上徹下正論ニ被趣候御人ニハ相違なし、」先年

主上ノ知遇ヲ受ク

仁孝天皇樣ゟも精忠と申被蒙叡感御賞ニ御預被成候事も有之候よし、」

將軍上洛ノ議

仁皇樣ニハ格別御倚賴被遊、其頃禁中御式事など一切御一手ゟて御裁し被成候よし、方今之

主上ニハ御幼年の頃ゟ御傅にて、御習字抔の義ニ付ても御世話被成候よし、依て　知遇も不薄義ゟト奉存候、」（朱書）「別紙にて知候譽、」昨暮も某公を後見ニ被仰付候ハヽて、幕府之御爲ニ可相成、皇國之御都合ニも宜しからんと申御上書御坐候て、則先夜（微臣ヘ内々ニて、）拜見被仰付候、」當年御上書ハ何分公武御嫌疑有之候てハ不相成、

天朝ゟハ幕府之不行屆處御世話可被成筈、幕府ゟハ又

天朝を御介護可申事肝要ニ候、偖當節ハ非常之御時節故、關東ニてハ追々非常の改革被致候よし、別して今般墨使之登城も寬永度の例ニて出來候事ゆへ、其頃の如く將軍家ニも上洛等有之、　御直ニ御對談等有之候ハヽて、何事ニ御嫌疑も不相生、甚御都合可宜、就てハ時

古典ニ通ズ

節柄故可成丈事輕ニ相成、將軍ニも供廻始可減丈ハ減却致候方可然、無左時ハ疲弊も彌增相加可申奉存候云々樣之御趣意ニ候、」此書ニても典故ニ實ニ御了通ハ分明ニ相分り申候、其外　皇朝之御記錄類ニハ、至て御博識之御樣子ニ被考候、此度狂歌ニ、

公家ノ大出來物
久我ハ才略ナシ

三文も梨の木町の天保錢、忠義のことは百も御しやうち、

中山ハ卓然タル人物

（朱書）「御內證貧と申候へとも難信、」と申出候、御殿號を、俗ニ轉法輪と申居候、梨木町ハ御住居ニ御坐候、又此頃の雜說ニ、三條家の門ニ無二膏を廣々とぬり付、傍ニ公家之大出來物ト書付置候よし、俗間評判ハ如此宜御坐候、　久我家ハ正論と申條、直氣一片ニて才略ハなく、大抵春日讚岐守の入智惠ニて被致候鹽梅、乍去此節縉紳家にてハ受方よろしく候、御自身ニハ强ち春日申通ニハ致さぬと申居られ候鹽梅なれと、內輪相考候へハ餘程倚賴の處見へ申候、中山家ハ骨格雄嚴中々長袖之形貌ニハ無之、卓然タル人物、文字なけれと頗ル才略もあり、持守ハ諸卿第一ト被思候位、春日も極口贊稱、三條公も尤御同志之御方の樣ニ被仰候、」

○本書ハ橋本左內ガ、二月二十九日橫山猶藏ニ付シ、江戶ニ携行セシメタル報告書ノウチ、「三條實萬ニ入說ノ始末ヲ知ルニ足ル部分ヲ抄出セシモノニ係ル。報告書ノ大部分ハ、之ヲ二月二十九日ノ條ニ收ム。參看スベシ。

〔橋本左內意見書〕○春嶽文庫所藏本

○二月中旬三條實萬へ

外夷ノ處置ハ未曾有ノ重大事
齋戒沐浴シテ意見ヲ開陳ス
萬邦無比ノ國體
神明ノ加護

目今、外夷御所置の御義は、實に古今未曾有の重事、國家の御大義にして、中々草莽微賤の臣等、齒牙に可懸所には無御座候へ共、御趣向に依候ては、　皇朝の御巨患、幕府の御恥辱とも可相成奉存候に付、蹤分出位、奉絕言語候得共、責て露斗にても、奉報　國家之深恩厚澤度に付、萬死之罪を犯、齋戒沐浴して謹で鄙意を拜陳仕候、

一、皇國尊さ萬國無比は、

主上天日嗣に被爲在、臣子も亦諸神の胤を辱するは勿論、風俗淳美士大夫忠義に厚、廉恥を尙、農商質實、尊　上守法、下に不軌を謀法憲に觸るの民鮮く、　上に捨軀守節の人多よりして、政令法度、寬大嚴肅にして、各其職を務、其業に安じ、且、土地の膏腴萬邦に卓越して、物產饒多金石草木より魚貝禽獸に至る迄、給足せざるものなくして、今日まで衣食飽暖に暮來候は、實に

皇國に生れずんば不叶義にて、此等盡く

天恩に關係仕候事と難有奉存候、

一、偖、此迄外寇無之義は、固

天神地祇、冥々の中に御加護被爲在候義は申迄もなく、夫、弘安の度、北條時宗元兵二十萬（通例十萬と申唱候へども、實は兵數二十萬のよし、十萬と申は、元人諱大敗の言に可有御座候、）を鏖し、文祿の度、豐臣秀吉朝鮮八道を蹂躙仕候

皇國ノ形勢

西洋諸國ノ國風

義、異國迄も傳聞仕、格別の武威贊稱仕居候樣子も相聞、此二擧は頗る皇國尙武の御稜威を耀すに足事に御坐候得共、今日迄外患なきは全く此に限候樣に心得候は固陋の偏見と奉存候、元來

皇國の形勢は、四方大海を以て際とし、所謂天嶮の國にて、彼秦始、漢武の勇驁黷武の者あり候ても、曾て毫髮も手指不相成位の事に御坐候、然る處、近來西洋の諸蠻風習藝術日新を勤候より、奇器を制、巧術を創、且日日干戈を動、隣國の攻擊仕候得共、（マヽ）——の頃一統同盟仕、歐羅巴丈の亂は過半鎭靖仕候、彼の國風

皇國並に漢土抔とは大に相違仕、元來、我一國にて事給物足と申譯には不參、鑛山多き國は專ら採堀を事とし、之を各器什に製作して、諸方へ鬻ぎ、材木に富ば木器、毛獸に富ば織工、平原・曠野は植藝を務、沿海・島嶼は漁獵を業として、皆各相互に交換貿易して生涯を送り候樣に相見へ申候、依之、自國の物を自國にて賣候へば、利益も不夥、且右樣の國柄故、自ら有餘不足の者も御坐候に付、遂に他邦他洲へ齎鬻候事とは相成申候、然る處、何れの國にても無故して、不圖、外國人來候て、商賣を乞候とも、速に許可不致に依て、先　堅艦に乘じ、國信を持し、所欲の國々へ罷越、各國人民の爲、有無相通度事申込候事、恰も、先年、墨使浦賀にて渡來仕候如くにして、種々利害を論じ、慇懃を示し、天

西洋諸國ノ通商和親ヲ請フハ好計アルニ非ズ

叡慮ハ通商ヲ好マセラレズ

皇國ノ安危コノ時ニアルヲ以テ萬死ヲ冒シ意見ヲ上陳ス

地公共の譯を諭し、之を說倒仕、其國未だ蒙昧に候へば、彼の奇器巧術を敎て其民を誘、物產を起さしめ、其國の物を我に引受他國へ賣付候事、西洋一體の通習にて、唯、交易を乞、和親を結候に付て、强て奸計惡謀有之と申事も無御坐候、今日、道路にて承及候へば、長崎・箱館兩所の外開港不相成、下田の義は彼より不便を申立候事に候へば、幸の儀故閉港可致旨、

廷議御決に相成候趣、元來私共竊に傳承罷在候には、御役人樣方には色々御存に御坐候へ共、

叡慮は初より通商御好不被遊事、御堅確に被爲在候由、然る處、果して十分の御英斷、實以

皇統之御基礎、萬古不動の御義に可有御坐、草莽同樣の賤臣に於ても、感泣仕難有奉拜承候、右樣

御英斷御坐候に付ては、不容易御事柄も出來仕、

皇國御安危の界とも可相成奉存候一件、兼て心配仕居候に付、出位踰分の罪奉恐入候へども、萬死を冒し奉言上候、右前文の通、開港御斷にては、西洋諸夷も自然と、

皇威に屈し、以後事故萬端御指揮に可奉從は勿論に御坐候へども、夷狄の國、固利を獲

安政五年二月九日

通商ヲ拒絶セバ外夷ワレヲ威嚇セン

國内ノ不取締ニヨリ擾亂ヲ生ゼンコトヲ恐ル

豫メ手配ヲ要ス

に汲々仕候風習にて、近來は萬國を仝盟に致し、盛に通商仕度見込の趣に相見候旨、夫英夷抔は悍暴輕慓の氣、甚者に有之、殊更、墨夷と表裡を爲居候者に御坐候へば、彼等其所望を失候より、萬一驕慢不遜の擧動抔仕、巨艦蒙童（艨艟）夥敷指上せ、關東近海は不申及、大坂並北海邊迄へも停舶罷在、所々にて發砲或は備なき處を窺、上陸抔相催事急遽に出候はゞ、數百年大平にて暖飽に安じ、專ら遊戲のみに耽居候萬民、一時に騷擾散亂仕、農商各其業を安兼候樣にも成行可申、其中には窮民貪丁衣食を獲飢渴を免れんと欲し候より、或は偸竊豪奪仕り、寡婦少丁は不及申、尋常の良民爲之、其鄕土に安處仕兼可申、諸大名に於ては自國沿海の警衞は勿論、且　皇居の守護、幕府への援軍等にて　在國の兵員等減少仕、一國の締方自然今日の如く行屆兼候義も出來可仕、別して無賴奸惡の亡命者等、黨を結、群を成、山野に横行仕候樣の事御坐候はゞ、强勢外寇は爲差義無御坐共、忽皇國一國の動搖紛擾と相成可申歟に奉存候、其等の間に乘じ夷狄附入候はゞ、自然皇國の御恩を忘却仕、內應等仕候樣の不屆者出來可仕を難計、左候へば以ての外の御大事に御坐候間、何卒今日より豫め其邊の御手配被爲在候樣奉希上度候、固、是等の義は必ず絕無の事柄に可有之候得共、事變は兎角倉卒不測の際に發し候者に御坐候へば、天下の政務を被議候御方樣に被爲在候ては、兼て此邊迄も御遠謀可有御坐御義と奉愚考

西洋諸國精兵利器ヲ有ス蔑視セバ恥辱ヲ得ン

沿海警備ノ嚴整ヲ諸侯ニ命ズベシ

候、偖又、右は至極の過慮に御坐候て、我皇國の御儀は、治教淸明整肅、庶民親其上、死其長之道を忘れず、士大夫節を勵、廉恥を重じ候義に御坐候へば、必定上下一致力戰仕、外夷擊退の功可奏事と奉存候へ共、近來、西洋諸夷、戰爭に慣れ、兵卒精練を勤め、規律嚴整に相成、殊に利器を製し、英墨など五大洲に於て頗る强兵の名も有之者共に御坐候へば、唯一概に蔑視仕候ては却て莫大の御恥辱を惹起し候義も可有御坐、固より徒に我所長を賴み、彼の伎倆不慮は兵道に疎なる義に御坐候へば、此等の義は兼て御熟慮被遊、沿海警備等の策分明御評決被爲在、且今の內に諸大名へ逐一嚴重に御申渡御坐候樣の儀奉願上度、無左しては實以安心不仕次第に御坐候、

一、是非右等の處迄御見込も被爲付、　御降命御坐候共、兎角太平の習にて優柔平弱に相流れ、緩急の御用に相叶申間敷哉と心痛仕候、其譯は近年幕府より追々兵備の筋　被仰出も御坐候へ共、諸大名の內未だ十分行屆候國々は澤山にも承及不申候、今度は實に千歲の一時に御坐候へば、沿海の礮臺並に兵備を始、糧食・器械・陣營等に至る迄　夫々速に相調、假令一旦緩急御坐候とも其節不指支樣心掛可申旨、列侯へ緊しく被仰出無御坐候て、當今の儘にて夷狄を防禦仕候は、恰も徒手空拳にて數頭の狂犬を擊殺仕候同樣に

兵備ノコト英斷ヲ要ス

詭言ヲ以テ縉紳ヲ瞞着スルハ不可

て、恐くは可惜士命を夷狄に爲取候様に可相成哉と、深く慨嘆罷在候、

一、右兵備の事斷然　御英斷にて被仰出候はゞ、忽天下怠惰の士氣迄も一振起仕、隨分戰爭の御用も相立可申候得共、此等の事、其號を發し令を下すの將迄勇邁英果に非れば、又乍廢格仕、再三に及ひ候ては上の被遊候處に下不應様に相運、乍恐　御威光にも拘り候様可相成哉に過慮仕居申候、殊に戰鬪は銘々無二の身命をも棄擲仕、親慕の父母愛昵の妻子さへも不顧くらいの儀に御坐候へば、在上の將仁勇を不具して敵を滅すべからざるは勿論、迚も味方の駕馭も六か敷可有之奉存候、此邊兼て主人（松平慶永）にも深心配仕居候故、近來痛く盡力仕候向き御坐候へ共、天未だ其誠を察し給ず、殊に世上の迷惑動搖を幸として、心にもなき詭言諂辭を以て、縉紳の御方様を奉瞞候義、實に言語同斷の次第、上奉對

皇朝、次は德川家へ被對、實に不忠不義の事共と、微臣に於ても憤激罷在候、主人義、固庸劣怯懦、中々不足論者には御坐候へども、報國の赤心は誓神明、確定仕居、從來、深皇國の御爲と奉存、於關東天下の大計長策肝胆を吐、陳述周旋等罷在候、依此、却て奉對皇朝候ては、今日迄一辭片語の詭諂も不奉獻、只管愚戇に、向幕府皇朝の御爲にも可相成義竭盡仕置候間、此等の義去丑年以來の建言を始、言上の事共幕

松平慶永持論一轉

和議ヲ唱フルモ姦邪ニ非ズ

諸藩ガ幕府ノ隱事ヲ朝廷ニ內訴スルハ不可

府へ御聞糺被下候はゞ、過半御曉解可被遊奉存上候、將又、近來持論一轉仕、私議主張仕候も、深思御坐候儀にて、中々當今の國力形勢戰鬪に因て固守六ヶ敷、且前文の姿にて戰鬪等斷然出來候義に候哉、主人愚昧にて決斷仕兼居候、此等の個條尚又厚御勘考可被成下候、畢竟、戰鬪申立候とて、忠孝の誠に不發時は、後世より申候へば、忠臣とも不奉存、一旦蠖屈の計にて和議を唱候とて、行々皇國を不汚見込候はゝ、是姦邪にも候まじく、且、古より主君へ對し、强斷果爲の策を教置、事起て倉皇狼狽仕、却て割地請和の術を說出し、或は危急の節に臨んで逃去候爲、僞忠臣の例も御坐候間、此等尚又御熟慮被成下候様奉希上候、

一、列藩より逐々手筋を求、

皇朝尊崇の事、或は幕府の隱事など內訴被仕候方も有之候趣、密に傳承仕、此其志爲

皇朝候哉如何、畢竟三百年太平にて列藩無難に暮居候は、

御代々様御聖明の所致には御坐候へども、東照公の力も亦不少様に奉存候、然處、近來幕府政體陵遲仕候向も御坐候へ共、未だ暴逆苛烈の惡政も無之、所要、諸有司の不得其人に歸候義にて、大樹公には其過咎なき義乍熟知、右様の義申上候は全、南北朝の古昔反覆の國守も同斷の所行、實に可惡の至と奉存候、

諸藩ノ忠邪ヲ辨別セラルベシ

外交問題ニ關スル斡旋其效ヲ奏セズ

繼嗣問題ハ仔細ナシ

皇朝にて此等の輕薄の人を御賴に被遊候ては、後日の御患害にも可相成奉存上候、乍去、列藩の義は、兼て御熟知も無御坐御義に被爲在候へば、其是非忠邪一々御分明にも難被遊筋も可有御坐候哉、萬一左樣の御事も被爲在候はゞ、是迄衆論輿言にて忠と申居候者、正と申居候者を忠正と御定被遊、今度俄に忠正に見掛候者は、今一應篤と御糺し被遊、御的證御坐候上、御信用被成下度候、

〔橋本左内書翰〕○昨夢紀事所載

○二月二十八日中根靱負宛

三月七日、去月廿八日京發、橋本左内ゟ師質へ之内狀如左、隱語之文可推判○昨夢紀事

前略、扨例之金談兎角充分にハ調兼甚心痛仕候、既ニ去ル廿四日發表ニ相成、御地御銘々樣御眞心御問合度と申事ニ候、其後熟談有之相手方納得いたし、早速飛札指出候由ニ御坐候、夫ニ付種々委曲の事も有之、何分一通ニゐは盡兼候間北へも申遣し、飛脚を以得御意可申候、何卒無難調談願は敷奉存候得共、其色々故障有之實ニ因り入申候、貴地にゐハ如何申立候共、此後私ゟ細かに情實申上候迄ハ、一切御手出し無之樣奉祈候、來月七日迄にハ是非錦地へ何かも可申上候、其迄は何とも御申立無之樣奉願候、乍去西ノ字は頓ント仔細無之候、此ノ事ハ如何程被仰立候ゐも宜御座候、外ハ指支候廉ニ御坐候故申上置候事之、是等之處御含迄、早急得御意置申候、不宣、

二月廿八日

左内ニ參邸ヲ求ム

時下御自愛奉祈上候、本文金子之儀甚困り申候、何分調談ニ不相成候ゐハ、誠ニ心配ニ御座候、末之見詰さへ有之候へハ、調不調共貪着無之と存居候へ共、此處甚無覺束奉存模樣ニより、私長谷邊へ直對仕候ゐ、其上ニゐ委細可申哉も不被計候、是等之處も御含迄ニ申上候、以上、

（橋本左内全集）

〔森寺常安書翰〕○春嶽文庫所藏本

以手紙得御意候、春寒之砌、彌御安全珍重奉存候、然者、内府殿（三條實萬）過日御對顏之砌御申落の儀も有之候に付、今一應御對顏被遊度思召候間、乍御苦勞今一應御參殿之儀、御賴被成度候、夜分にても不苦候間、一兩日之内御參殿可被下候、右得御意候樣被仰付、内々如斯御座候、以上、

二月十六日

橋本左内樣

森寺因幡守

御返事拜見致し候、然は、御參殿の儀得御意候處、御細書の趣委細承知仕候、明晩の處何も

參邸ハ今晩ニテモ可

御差支不被爲在候、尤、御都合にて今晩にても御差支は無之候間、御都合次第御心得可被成、右御再答迄、如此御座候、以上、

二月十六日

橋本左内様

森寺因幡守

參邸ヲ求ム

以手紙得御意候、春暖の節彌々御安全奉賀候、然者、今日午刻後より御參殿御坐候様被成度、此段可得御意被　仰付、如此御坐候、以上、

二月廿二日

橋本左内様

御直披

森寺因幡守

森寺ヘノ音物ヲ謝ス

芳墨忝致拝見候、彌御清祥御滞留被成、珍重奉存候、然者、昨日は拝面、折柄御手間取に相成、嘸々御退屈の御儀と奉存候、偖縷々御挨拶の趣、誠に以不行届勝の段、甚痛心仕候、眞平御仁恕可被下候、右に付不存寄別而御心入の御品御恵投被下、不淺幾久敷珍藏可仕、深忝奉存候、右御挨拶紙上に難盡、猶拝顔萬縷御禮謝可申述候、頓首々々、

二月廿三日

橋本左内様

森寺因幡守

二十四日參邸差支ナシ

二白、御端書の趣委曲致承知候、明日巳刻頃御來臨被下候趣、何等の御指支も無之候間、左様御承知可被下候、以上、

菓子獻上ニ對スル挨拶

以手紙得御意候、今日は雨天氣に御座候へとも、彌御安全奉珍重候、然者、此間は見事の御菓子御献上、早速及披露候處、御滿足被　思召候、宜敷御挨拶可申述被　仰付候、委細拝顔可申入、如此御座候、以上、

二月廿六日

橋本左内様

差置

森寺因幡守

猶々、御器物御風呂敷御返却申入候、御落手可被下候、此間より御返しに可相成處、殊之外御用繁、無人に付、延引此段御斷申入候、以上、

〔藤原忠成公年譜〕○宮内省圖書寮所藏本

安政五年二月九日

二月九日、○中略、

松平慶永越前守、福井藩主、ハ、幕府ノ親藩ニシテ賢明ノ稱アリ、其臣橋本左内京師ニ遊ヒ、是日謁ヲ公ニ請フ、公之ヲ許ス、左内公ニ問フニ當今ノ時勢ヲ以テス、公曰ク、余夙ニ越公ノ賢ヲ聞キ交ヲ納レンコヲ願フ、然レ𪜈有土ノ君ナルヲ憚リ、未其志ヲ果サス、高知侯土佐守、山内豐信ハ頗ル有志ノ人ナルヲ以テ、數年以來常ニ晤談セリト雖モ、壯年英果ニ過キ、動モスレハ輒チ害ヲ引カンコヲ恐ル、故ニ每々之ヲ警戒セリ、頃ロ聞ク、同侯ハ亦貴主ノ眷顧ヲ受クト、因テ今日ハ應ニ肝膽ヲ吐テ語ルヘシ、戶外ニ出ツレハ誓テ片辭ヲモ漏泄ス可ラスト、左内謹テ之ヲ諾シ、公ニ問フテ曰ク、海外ノ形勢公能ク之ヲ詳悉スルカ、公答ヘス、左内曰ク、然ラハ則チ請フ臣先ツ之ヲ說カント、是ニ於テ魯英垂涎、墨夷恐喝ノ狀ヲ略敍シ、次テ關東水戶老侯ノ英烈ニシテ失敗セシコト、及ヒ閣老ノ優柔不斷ナルコト、孰レモ英主哲辟ナキノ故ニ由ルヲ述ヘ、最後ニ公ノ主トスル所、攘斥ニ在ル歟、抑和親ニ在ル歟ヲ問フ、公答ヘテ曰ク、是レ宜ク當今ノ事狀ヲ推測シテ後ニ之ヲ決スヘキナリ、左内曰ク、然ラハ公ノ意或ハ和親ニ在ル者ノ如シ、夫レ目前ノ平穩無事ヲ喜フハ俗情ノ常ナレ𪜈、和議ヲ主トスル時ハ益々臨戰ノ備ヲ嚴ニセサル可ラス、戰ニ至テハ則チ廟算先定ヲ主トシ、五事七計其宜キヲ得スシテ、漫然戰ヲ唱フルハ書生ノ迂論ナリ、公曰ク、三家・家門ノ內、自ラ英傑ナキニ非ス、方今ノ恃ム所、特ニ此人ニ在ルノミ、左内、因テ談一橋氏ノ事ニ及フ、公手ヲ抵テ歡笑其人ヲ得タリト稱ス、左内其故ヲ問フ、公微ク西城ノ論ニ移ル、左内、慶永モ亦此議ヲ贊スルノ由ヲ述フ、公曰ク、越公ノ賢ヲ薦ムル誠ニ喜フヘシ、此事ハ　朝廷ニ於テモ亦謀議アリシ所ナリト、是後左内屢々公ニ詣リ、論陳スル所アリト云フ、

三條實萬橋本左内ヲ引見ス

左内內外ノ形勢ヲ說ク

〔橋本左内書翰〕○春嶽文庫所藏本

○二月十二日川路聖謨宛

川司農君

執事

紀拜呈

一書謹啓、未春寒之候に御座候處、先以御旅中益御勇壯御精勤御座候條奉恭賀候、陳者曩日は於東武度々上堂、殊に御懇篤の清誨を奉蒙、于今肺腑に鐫銘仕居候、偖、劣生義弊藩の內用向有之、先日來出坂罷在候處、最早大概用濟には相成候へ共、今少し誂物出來兼候故、不得已、暫間留滯仕候、乍去俗地にて猥雜に堪兼候、其上邸內相識も無御座候に付、右誂物調候迄は此表に宿在、舊知の學生抔相尋、不日復た下坂仕、萬緒取揃候て直樣歸東の積に御座候、執事御用濟の期は承知不仕候へども、何れ劣生の方御先に可相成奉存候まゝ、若や東方へ貴用も被爲在候はゞ、應身の義は何成共無御隔意被仰下候樣奉希候、吳々時中折

安政五年二月九日

將軍建儲問題ニ論及ス

京都滯留ヲ報ズ

角御保愛、不遠御歸府の程奉祈上候、右御安否伺旁得尊意候迄如此に御座候、頓首敬白、

二月十二日

再伸、本文の趣伺仕候、拜陳可申上筈に御座候へども、此都にて承候へば、執事方御上京後は紛々巷說も有之候由、萬一卒爾罷出御用の故障候ては如何と恐懼仕、失敬は乍心得、以書中奉伺候、他鄉にて不計御一所に相成候義にも御座候へば、實は直に拜謁仕候て、御高話拜聽、依舊巨細御垂訓導等相願度は滿腔の事に御座候、此等の愚衷萬々御諒察奉伏願上候、已上、

巷說ヲ恐レ訪問セズ

〔高村俊藏書翰〕○春嶽文庫所藏本

以手紙啓上仕候、然は横山源五殿を以て御差出の御壹封、慥に落手仕、左衞門尉手元へ差出申候、此段可得貴意旨被申付、如此御座候、以上、

二月十二日

川路左衞門尉內

高村俊藏

〔橋本左內書翰〕○春嶽文庫所藏本

○二月下旬川路聖謨宛

謹裁、春暖の候御坐候處、益御勇健御精勤御坐候條奉恭賀候、然者劣生過日呈書仕候後、國元用向に付、故鄉迄罷越、今度復出坂仕候處、道路訛言沸騰一々筆尖難裁仕合に御坐候、且、京師の義も巷說の趣にては、中々不容易御義と、爲國家深奉恐懼候、固より高明御盡力御坐候御事、無御遺策は不及申、無程雲消氷解可仕とは奉愚察候へとも、當今の御義は天下安危の所關に御座候故、乍杞憂々々悶罷在候、右に付、出位踰分の義は奉恐入候得共、極內々得拜謁、鄙懷吐露仕度廉も御座候、乍去嫌疑世界の儀故、此願可相叶哉如何、乍失敬以書中奉伺上候、若愈罷出不苦義に御座候ハヽ、劣生心得方も御座候ハヽ、如何樣にも御指揮次第に可仕候間、一々御垂諭可被成下候、萬一右之義難叶候はゝ、御腹心の者一人、劣生寓居まで御遣し被下候樣奉希候、箇樣呶々申上候も、畢竟、曩時蒙御垂諭候知遇に奉報度故に御座候、此等萬々御諒察被成下候樣奉仰望候、頓首再拜、

川路ニ會見ヲ求ム

又白、時下厚御保愛奉專祈候、本文之趣、乍尊勞奉希上候、此頃は東都にも種々訛言傳播可有之候に付、此邊の爲にも奉願度義に御座候、以上、

○在京中ノ橋本左內ニ對シ、在府ノ中根靱負・石原甚十郎、在藩ノ村田巳三郎ヨリ將軍繼嗣問題、ソノ他藩情ニ關シ、機密ヲ報ジタル書翰アリ。參考ノタメ次ニ收ム。

島津齊彬ヨリ松平慶永ニ來書アリ

慶永松平忠固ヲ訪フ

繼嗣問題ト内勅

〔中根靱負書翰〕〇春嶽文庫所藏本

〇二月十一日橋本左内宛

今朝の飛脚故差急ぎ大亂書、且つ不遑復讀候間、衍脱共宜御推讀可被下候、

水府へ托一筆致啓上候、兎角不勝之氣候候、先以

君上益御機嫌能奉恐悦候、隨而愈御安健御旅行御上着可被成と珍重奉存候、去月廿九日の風雪には嘸々御困り被成候はんと噂申續候事に候、横・溝兩氏（横山猶藏・溝口辰五郎）も健歩候哉如何、宜御致聲可被下候、

一、御上途後異條も無之と申内、廿八日夕薩州君侯より御内書（正月六日ノ條ニ收ム）御到來、右の内に別紙兩通有之候、右に付　尊考被爲在候處、何分京都先入有之儀に候得ば、自然、櫻閣（老中堀田正睦）へ御内勅等も難計候へば、此儀を又一因緣と被成、當月朔日夕、上田閣（老中松平忠固）へ御出有之候、其節の御演說は、薩より別紙の通申越候、御心得にも可相成哉と御披見に入申候、此通りにて尤御爲筋と存込候ての事に候へば仔細も無之候へども、萬一薩說の如く御内勅等に相成候節、備中殿は慥に御踏へ有之哉、自然御未定の事候はゞ、御内評は相聞居候事に候へば、　台慮も御伺取に相成、備中殿迄御申越に相成候ては如何、

内勅之儀は兼て懸念奉存候故、先達而も愚說申試候事に候處、薩書面の趣にては必定とも

側近者ノ台慮ヲ動カサンコトヲ恐ル

老中以下役人ハ一橋黨ナリ

奥向後宮ノ者事情ニ迂ナリ

奉存候間、御心得旁入御内見候と御申にて、書面御示し被成候處、上閣殊の外大悦にて、かく迄　公邊の御爲を被思召候儀は、如何斗か致大慶候との事にて、夫より段々内輪噺も有之候、其次第は御側衆は當時さしたる事無之押付け相濟み候由、唯奥勤御小姓・御小納戸の向き甚御心配の由、是は日夜朝暮御側に罷在頻に寒し候ては、一段御決しに相成懸候台慮も又御動轉可被遊哉、尤唯今と相成候ては、たとひ　台慮たりとも御轉變に相成候ては、諸侯の思ひ入れは勿論、指當り表方御役人の處、更に落付不申候、此處不落合に相成候ては、當然の御用便に差支、拙者共も勤まり申さぬ次第と相成候得ば、何分備中（堀田正睦）歸り次第、早速の御手續きに相成候樣致度人望擧て歸候間、實に不思議の事に御座候、いづれ共備中歸り候上の儀、夫迄は暫く此儀は休みの由御噺被申上候由、〇西城へ被爲入候上にて　御父子の御間柄甚御懸念の由、是も前後左右小人充滿致候故是非離間の策を施し候者抔も可有之、已に　文恭君（將軍家齊）御病氣の節、愼德公（將軍家慶）被爲入候處、　御對顏御出來不被成樣の儀も有之、御實の御間柄にてさへ右の通に候へば、此度抔の義は別て御大切至極の儀と被存との事の由、〇老中は何れも同意にて異存無之、表御役人は猶以頻に申立候位の事、川路左衞門尉抔は恐ろしき激論を致候と御咄有之、〇奥向きの者更に事情を不解、此間もハルリスの死したる噂の事を唐人が落マシタサフナと申上候由、右に准候事共にて、天下の爲めな

慶永久世廣周ヲ訪フ

日本橋ノ出火延燒

ど丶申事は、思ひも不寄と御咄しの由、○後宮も同様の事、本壽院(將軍家定生母脇部美津)様御手前様も御心配の由御咄に付、本立院(本壽院ノ姉)の事御咄被成候處夫は屈竟の御手筋、私申上候と申ては不宜候得共、其筋より御手を廻され候儀願はしき由御咄の由、○西城へ被爲入候ても、四五年の間は御口さし御手出しあつてはならぬとの御咄しも有之由、○薩の一件は、大和守(老中久世廣周)へも御咄置に相成候様致度と御申の由、右等の趣にて愈御治定に相成候御様子も粗明瞭に有之候、川路の盡力も上閣の口氣にてもおもひやられ候、二日關宿(老中久世廣周)へ御逢被仰込候處指支三日に被爲入候、是も薩の儀は大に歡ひ被申候様、其他は當時　御英斷を仰き居候趣被申上、委細は伊賀守(老中松平忠固)より御承知の通り位にて、別段の御噺は無之由、尤薩の義は極密の事にて、薩へ漏泄に相成候ては、最早外藩の密事も相聞へ不申候間、此儀は決て御穩密に相成候様と御申の處、其處は堅く御請合にて閣中限の事と、御契約被成置候由、

昨夕、薩へ參り、薄暮歸り、夜に入り認かゝり、是迄認候處、五時過火事の沙汰、半鐘摺立、折節西北の烈風故、驚き出格子を開け候處、常盤橋見附の後は火災滿天故、早速出勤に及候處、小田原より出火、一時に蔓延、乍併、盤邸は風上故懸念無之、海邸(豐島郡麻布村松平讃岐守中屋敷)風下に付、追々御人數被遣候處、益大火に相成、海邸も御存亡難斗候得共、靈岸島周圍の橋々、多くは燒落、道路難通、何れも痛心罷在候處、夜八ッ半時頃に至り、先つ御別條無之段、慥に相聞

慶永田安慶頼ヲ訪フ

候に付、漸及安堵候、乍併延燒の火勢は強勢に鐵炮洲、築地の方へ燒け行き、東の方は通りへ出たとも申、出ぬとも申位の事、止むべき様子も無之候得共、先つ關係無之方角と相成候故引取候處、何か草臥候て認出來兼、直様就寢、今朝六ッ時過起出候處、黒煙焔々として猶南の方へ燒け行き候最中、新錢座抔危篤と被思候得共、致方も無之、筆を把つて後段を書記いたし候、

閣老の光景は如右、別に相聞候儀も無之候、

一、二十八日御登城の節、土岐丹(頼貞、六月付)・鵜殿民部(長鋭、六月付)へ御達の處、兩人最早術計無之、閣老衆は、御英斷〳〵と斗にて、外に咄は無之由、土は後宮の方御手入願はしく、鵜は田安の方願はしくと申上候由、右に付幸ひ二十九日に田安(田安慶頼)へ被爲入候御日柄故、納言君(田安慶頼)へ御說得可被成御積りにて、猶又同邸の様子水竹(水野忠徳)へ御尋有之、二十八日夜、拙水竹へ參承候處、別に異條も無之、兎角、奥勤の方に有志無之故、色々と致探索居候との事なり、

一、二十九日、安府(田安家)へ被爲入、納言君へ御直談相成候處、隨分御納得にて、何分御家老へ御談し可被成との御儀有之候由、翌朔日、同府御内評有之候處、壹人として御尤と申者無之、御家老へ御相談に相成候處、水竹一人にて强辨に及び、漸く衆議相決候趣相聞へ申候、其

本立院一橋建儲ニ斡旋ヲ諾ス

水野忠徳奥向ノ形勢ヲ報ズ

齊昭京都内訴ノ風評

後種々反覆轉變水竹一人苦心の趣に候得共、楚人而已にて殆當惑の様子にも相聞申候、

一、當月三日本立院どの召、段々近來の御手續き大略被仰聞、猶又右の趣人望倚賴の事候へば、(一橋慶喜)橋君御建儲に相成候様申上候様御申聞の處、本立院も前途見て取り、先達而とは違ひ、左様の御譯合にも候はば、十日過には御沙汰次第登　營仕候間、其節委細に可申上と快く御請申上候、拙よりも尚又及示談候處、是又聞請宜、何分精々可申上との事に相成候、今日迄は登　營の沙汰無之候、

一、當月三日夜、水竹より一封を呈す、右書中奥向の方探索候處、表方より御伺に相成候儀相違無之候得共　台慮動搖、いまだ御決定無之、加之後宮にも衆論紛々、甚大切至極の時態の趣申上候、右に付薩州の方如何有之哉と、四日夕、拙儀西郷(コノ時既ニ吉之助ト改名)吉兵衛方へ罷越相尋候へども、いまだ別段相聞へ候儀無之由、右に付水筑より云々の譯申聞候處、猶又申込候様可致、十日前後には、(鹿兒島藩邸老女)小の島登　城致候間、其節は何と歟相分り可申と咄合居候内、彼何とか申茶道來候由にて、良や暫く引入り、再罷出申聞候は、唯今少々消息相聞申候、乍併西城(徳川家茂)の儀には無之、此頃　幕公と　本壽院様と御密談有之候由、右は專ら異人の一件、且ツ老公より京都へ御内訴にて、林大・(林檉)櫻閣等上京相成候由にて、老公の御評判以ての外の由、西城の事は何も御咄し無之、御臺様へもいまだ何等の御沙汰無之由、御臺様方にては片唾を呑み御待被成候へども、御咄無之故、牝鷄より御開口も被成兼候との趣なり、右の一件文にて申來候文を見て參り候咄しの由、文は外件有之借用は出來不申由なり、右に付吉兵衛とも申談候は、何分西城の御沙汰有無に不拘、老公の惡評甚可恐事共、何と歟此處を融解致度申合候、

齊昭惡説ノ件

堀田ノ上京ハ叡慮御伺ノタメ

一、老公惡説の一件、(松平慶永)上にも甚御懸念被思召候得共、元來御内訴の虚實取留兼候事故、是は監察へ御内調可然との御儀にて、五日夕、鵜民へ拙被指出候て、御聞調べに相成候處、鵜民申候は、夫は決して御懸念に不及、左様の儀は一切無之事に候、世上の浮説色々私共も承及候共、素より不足取事にて、畢竟、林大・櫻閣被指出候は關東の御評議、夫と申も諸侯の建白にも多分

叡慮御伺に相成候様との事有之、且達　叡聞候上に候へば、先以勅許の御姿にて、如何にも御安心の儀故、使節出府登　營、最初應接等の次第一應林大を以被申上、結局の談詰り櫻閣上京の積り初より定策に候、更に他より關係有之儀には無之、且つ則唯今も林大よりの飛脚到來、書狀披見候處にて、林大も舊臘二十九日傳奏衆へ一面會迄にて、其後書取指出候迄にて其後は未だ御逢無之候、

京師も更に關東の事情相聞へ不申様子にて、萬事御不案内の事共、傳奏兩卿は林大の申上

松平忠固ノ態度

鵜殿長鋭ノ人物

平岡圓四郎ト會談ス

を隨分嘉納の趣に有之由、中々此表にて申合候樣成事にては決て無之、何か縉紳家に御寄合は三四度有之候譯は相知れ不申由申越候、右の次第に候得ば　老公云々などは勿論虛說相違無之候間、決而御懸念不被遊樣申上候樣被申聞、且つ西城一件、此間も　上閣へ及嚴達候處、例の御英斷次第と申候故、私申候はたとひ御英斷にて被仰出候儀にても、天下の御爲不可然御儀は、御押返し至當の處へ御決定勿論の儀と奉存候、御英斷なればとて不當の儀を御請は有御坐間敷と申達候處、　閣も苦笑ひて、何分　御英斷次第じやと被申候て、一向私共へは却て機密洩し不被申、よもやとは乍存苦心の至り、此間も申上候通り、猶又安府よりの被仰立願はしく候間、其段申上吳候樣被申聞候、

鵜殿は俗才と相見え候、經歷の功にて取廻候樣子、乍併さすが當時の選にて、少々文字も有之立派なる者、腸は奇麗そふに被考候、唯俗氣難脫候、

右の趣にて　老公御內訴無之處は分明に相成候へども唯御辨解迄にては、後宮の嫌疑氷解は無覺束に付、何そ如何樣と申樣成證跡取留度と、六日朝、水府安島（彌次郎）へ罷越申談候處、何分工夫致し、十日頃までには、可及返答と申聞候、

一、六日夕より夜四つ時迄、石原曹舍（甚十郎）にて平圓（平岡圓四郎、一橋家小性）と一會、不相替雄辨議論如湧候得共、別に及陳啓候件も無之、唯奧勤の向人材乏敷歎息のみ、右に付俄に人材御擧用にても目立候て六

田安一橋兩家家老入替ノ說

齊昭ノ京都內訴ハ事實無根

西鄕吉之助ノ斡旋

が敷可有之、又水竹抔可然人體にて、唯今の內田安と一橋の御家老御入替に被成置、何となく御召連れ直に被召仕候運びに相成候はゞ、穩便にて行屆可申や、俄に田府御家老より御側衆へ御取立に相成候ては、下地五百石の處へ、千石の御加增、千五百石高に相成、夫に二千五百石の御足高にて五千石高に相成候儀、如何にも過分の立身海防掛りの連中も、何となく羨望の念も動き可申、左候得ば御評議も六か敷相成可申、且先年杉浦出雲守奧向經歷無之處より被選擧、天晴の人材に候得共、御參詣先き御式中などに、あたまをうたせ、遂に勤まり不申、引退致候由、右等の先蹤も有之候へば、水竹なれ誰なれ、當時何となく一橋御家老へ被入置候方可然との工夫、如何にも面白く候得共、施術不容易、工風付兼居申候、外にさしたる論も無之候、

一、九日夕、安島來候得共、折節大和守樣御客にて御出に付、不及面會候に付、昨十日朝、安島へ罷越候處、老公御內訴無之證據物、別紙三通相示申候、乍恐　老公の思召御尤至極にて、浮說は全く寃に相違無之に付、昨夕直樣薩へ罷越、吉兵衞（西鄕吉之助）に逢、別紙相示如此次第に相成居候得ば、小の島登　營の節篤と相含罷上り、精々辨解致候樣申談置、吉兵衞今朝〇〇へ參り、例の茶道と申談じ、小の島へ申含候趣に申談置候、今日迄の形勢、右の通に御坐候、

一、昨日安島へ參り候節、安島申は、此間京都知邸より飛脚來り、御藩野村淵藏と申人、知

齊昭ヨリ鷹司太閤ヘノ密書漏洩ス

野村淵藏談話ノ件ニツキ探索ヲ依頼ス

邸吉左衞門悴鵜飼幸吉と申者へ密に相噺候趣は、米利堅一件に付、　老公より鷹司大閤殿下に被仰上候御密書の寫、關東にて手に入候由申聞、甚懸念の由申越候、右は如何成書面に可有之哉、書面の樣子は何も不申越候故、別て懸念罷在候、淵藏は何方より取出候事歟、關東とあれば是非尊藩に可有之、御承知は無之哉との事にて例の苦心の樣子に付、拙者申答候は、左樣の儀と一圓承知不致候へども、淵藏と申者は藩中の者に相違無之、折々探索に使ひ候者に候へば、國元より指出候歟も難斗、夫は引短に拙方より淵藏方へ、御噺の趣申遣し、何方より書面手に入候哉、且書面も指越候樣可申越、左候へば次第相分り可申候、又如何樣の僞作の御書面等世上流布も難斗候間、何分可申遣と申候處、夫は幸の事に候へば一封遣し吳候樣、今日定飛脚差立候故、其節指越、京都御屋敷迄書狀屆け可申との事故幸の事と存、乍序近說及啓上候、淵藏出立致居候儀と被存、御面會の有無は難斗候得共、何分可然御周旋、右安島より賴候一件御探索御申越可被下候、機密の義ども町飛脚にも難指出候處、幸の儀故及密告候、淵藏の儀は難知候はば、水府知邸へ御聞合せに相成候はゞ相分り可申と存候、御返報も錦地水府邸へ御賴みに相成候へば、速に相達候旨に申談置候、御多務何分宜御配慮可被下候、

一、何角御配慮共に致遠想、　上にも彼是御懸念被爲在候御儀にて、如何の光景哉、御心算通りにも相運候哉如何哉、日夜念頭に絕へ不申候、櫻閣始大坂・伊勢路へ廻り候儀、相違無之樣にも相聞え候、左樣候ては遲引にも可相成、如何相成候哉と存居候、

慶永沈思決策ノ狀アリ

一、上の御樣子近來聊か御工夫も被爲附候御樣子も有之候、專ら沈定寡默御思慮深刻の御工夫と存候、餘は期後喜候、折角御自愛御精務所專祈御座候、頓首、

二月十一日、朝五ツ半時認、

景岳老兄　　雪江拜

福井ノ火事

二白、横・溝兩生へ御致聲奉願候、鹽谷甲藏（古筠）も今夕罷出候筈に御座候、火事は今以盛んに燒け行き申候、芝邊と相見へ申候、

一、去る六日・七日・廿七日立飛脚にて、御國元御靜謐、御留守御萬安の由、廿四日下吳服堺屋より出火、北風强く、通り兩側紺屋町迄延燒致候、御留守も大御騷きのよし、乍併、無御別條致祝賀候、○執法轉遷御發表、衆議紛々の由、組も二た組割替に相成候て、是には愕然の由、土屋は存外得意の由、純淵（鍋木主稅）同樣の御取扱と申處、氣に入候樣子、御取扱は同樣にても人は格別なる事には氣付き不申事と相見へ、御し易き人物と致一笑候、早々丙丁〳〵、

〔石原甚十郎書翰〕○橋本左內全集所載

○二月十一日橋本左內宛

繼嗣問題
水野忠央ノ活動
江戸ノ大火

奉恐悦候、随て奉賀候、次に御安意可被下候、此地相替儀無之、正月廿四日、下吳服町堺屋喜左衞門火元、兩側八十軒斗焼失の處、御留守御安堵可被成候、正月廿七日立飛脚着、御留守無御別條御安意可被成候、其外異條無之趣、東地内密(繼嗣問題ヲ指ス)一件、是又異條無之、圓四郎(牟岡)兩度斗見得咄申候、何分櫻歸着迄都て發し不申由にて、後宮本丹(若年寄本郷泰固)の類彼是不伏の由には有之候得共、尤、是と申程の事には無之由、水土(和歌山藩附家老水野忠央)は頻に諸寺諸山にて祈禱賴候と申沙汰に御座候、後宮も夫々御手配有之、藏シマよりも早速上達、夫是何共返事は聞得不申候、何分其表にて天上よりの一聲掛り候はゞ、大丈夫とも被存候、よもや〳〵とは存候得共、手に取不申事而已薄氷の心地に御座候、其表雲色如何々々と御案事申居候、折角御手廻し、櫻初め早々一刻も早く歸着を頻祈居候、折角御手廻肝要に御座候、萩原(金民衛、藩井藩士)イロイロ口明候由に見得、華陽出立の事參政へ申達候所、何か含有之趣にて未だ滯居申候、如何相成候事か、仔細相分り不申候、昨晩五時、安針町より出火、西南風烈敷、島御屋敷所々飛火有之、横前とも一面の火に相成候得共、漸々喰留、今曉安堵致候、奉恐悦候、今五ツ半時過、錬兵洲邊膳所本多邊燒最中、一統疲切申候、此勢にては海手迄拔可申、佃島丸燒、八丁堀邊火口二三に別、大火に相成申候、得貴意度事も有之様に覺居候得共、此大火にて不心大略要用斗、南陽(牟井仲彦)も詰合、宜得貴意度申聞候、雪江より急用有之趣にて、伴圭迄乍此中京都行書狀差出度申聞候

「ハリス」ト病ノ風説
左内ノ登坂ヲ喜ブ

に付、譯は不知、急々詰合中立たり居たりにて認申候、ハルリス下田にて大病と申事、最早事濟抔、種々風説有之取留不申事而已、是亦案事申事に御座候、得貴意候事海岳御座候得共大混亂中早々如此御座候、恐惶謹言、

二月十一日

左内様

愛軒

尚々、折角御自愛專要奉存候、御痛如何、御按事申上候、飛脚にて御噂にては、山にて一日位、御滯留相成候事歟と、御案事申上候、吳々櫻初早々歸着、朝暮相待事に御座候、爲其早々、以上、

〔村田巳三郎書翰〕(春嶽文庫所藏本)

○二月九日橋本左内宛

一筆啓上仕候、今以春寒退兼候處、先以奉恐悦候、隨て奉拜賀候、然ば兼て御心痛御座候て既に御建議に相成候御一件、御心願通相叶、無程、御發表可相成旨、如仰上　天下地至歡無比奉恐悦候、是全君相御贊成且御盡力に依候事、古今の御盛事、後來の御龜鑑と奉存候、偖又、今度貴兄俄頃御登坂可被成の御受命に付、廿六日御出立の由、右御事柄如何にも御秘蘊の趣、左も可有之、來書拜展の折柄、

使命ノ達成ヲ期スベシ

所謂正論家ノ迂濶偏固說

宸襟ヲ惱マシタマフ

公武間圓滑ナラズ

御登坂云々に付不覺も拍手申候、實に英略迅速の至、乍例、感佩奉存候、然し去冬來の貴恙中、千里重命御負擔にて御獨行の御事、千萬御辛苦の次第奉存候、何卒、御使命の儀は充分御果し被成、種々秘策御奉行、事成就を期し、君相共益々御盛德御盛擧の程、海內の有志奉仰候樣、此邊實に爲天下、至願の至に奉存候、今日の事、甲決乙起、事機の來、誠に以無極、瞬息の間も油斷成難き事に奉存候、偖、京師の事、久我家專ら正論を唱(眞正の正論にては有之間敷、近來一種迂濶偏固の說を指て、世人正論家と申候也、)候由、定知春日讃州(潛庵、久我家諸大夫)の列主張候事と奉存候、其他星巖(梁川)なども今以交易を嫌ひ打拂の說に可有之、其他斗筲の人、一種偏固の說を唱、元來縉紳家迂濶固陋の人多き事故、種々外聞の說に投抒の惑も可有之奉存候、夫が爲に却て　宸襟不容易御惱慮被遊候乎、嗚呼、如何せん、尤、近年來　覇府の御處置振一々不備の上、今度官吏應對一件に付ては、益公武の間障塞鬱結を生じ候事と奉存候、今日の勢、極々重病の上、又一大奇症を起候同然、何卒、此患害致救濟防遏、叡慮及德川家の天下を奉安度、是臣子の願と奉存候、偖又、昨冬の御建白、京地に於ては常節に迎合被成候被仰方抔の說も有之由、偖々笑止の至、夫が爲に有司輩も解體可致哉と、野淵(野村淵藏)なども是に惑居樣子、嗚呼、人以爲諂、尼父猶然、只天下之英雄にして英雄を知る、不足怪事、

幕府ニ於テ非常變革ノ策アルベシ

堀田ヲシテ定策ノ遂行ニ努メシムベシ

左內ノ周旋ニ期待ス

偖今般の事、所歸患害を防ぎ、宸襟及德川家を奉安に有之、就ては兼々御定策の通、非常の御變革追々征夷府に於て御施行に運不申候ては、決して寸功も難立のみならず、今日の事最早是切と奉存候、左候へば此機會に乘じ、此度は堀閣も兼々御定策邊「建儲、俊傑を擧、輔相を置、列侯を振勵し、儉節を尙び、兵制を革め、蝦夷を開墾し、航海を創め、外國に通商し、小を合、弱を兼、皇道を張、悠久を保つ、」の事件は、實に覺悟御受合申候樣相成、於此叡慮も御納得の御場合に相運候樣、鄕野葵藿の愚心、實に大願至望に奉存候、此邊に就ては春日列も充分御說破に相成、彼等了得、久我家邊も今日後來共力を被盡候樣相成、一良佐とも被相成候樣願は敷義に奉存候、右等一として不容易事、其邊に運候迄に許多の至難磐結錯雜致し居事、眞に所謂英雄の手段に非ずして、決して難濟得所に奉存候、吳々今日後來の爲、充分御負擔御盡力の程、萬願の至に奉存候、御面會御委托の義は釣谷拙子兩人罷在候、少も御懸念に及不申候、ア、、天下無上重大之命を負擔奉行する人、世に幾許人かある、嗚呼、壯成哉、此に閣筆、頓首、

二月九日　　邨　戇　堂

端　景　岳　老　兄

安政五年二月九日

尙以、時令折角御厭御愛護、爲天下奉專祈候、今書鈞谷義は別に呈出不仕筈、左樣御承知可被下候、猶、京地の光景近々拜聞仕度願申候、以上、

〔村田巳三郎書翰〕○春嶽文庫所藏本

京都ノ迂濶病

近藤了介ヲ京都ニ差遣ス

○二月廿四日橋本左內宛

本月十九日曉御認の御翰、廿一日相達拜謝仕候、先以上々樣、益々御機嫌克被遊　御座奉恐悅候、隨て愈御勇健、西上御道中無御滯千萬大賀の至、御留守萱堂君御始愈御安全御入被成重疊目出度御義、御安慮可被成候、今便御健達の趣は御傳言早々御留守へ申上候、御同伴橫溝兩生、幷良僕幸吉義、何れも健飯健足と奉存候、橫生別て感激忠憤、此鴻來書中、縷々展布感心不少義に被存候、偖、延曆都の光景、固陋迂濶の病、甚以痛心嘆息の至、天下の事兎角恰好成事を難得、可勝嘆事に御坐候、畢竟、第一等の見識力量に事缺候故と奉存候、此節種々御運籌次第御趣向も附可申義と、千萬想像の至に御坐候、且又、來翰の趣も有之に付、小監察近藤了介指出申候、此者歛肅相應氣象も有之と見込居候に付、此間試候所、果して不違、依之同役共申談、舊例に不拘新役壹人に都下時情探索調方申付候、右調中邸內に止宿候ても可然旨、口授仕候へとも、調方の義一切御托申上候間、御世話の至に御坐候へども、夫々御指麾被下候樣奉賴候、偖、是は別段の事に御坐候へ共、御承知の通、小監察府の舊弊許多、此邊一整頓に付ても、兩三輩は是非役義精研の事無御座候ては不相成、依て今行了介一工夫驗を立させ度心底に御坐候、這邊も配慮、士氣致振起候樣、吳々右の件々宜奉願候、

福井蕃銃隊教練ヲ行フ

一、昨日東便有之候、先異條も無御坐候、去十日大火に候所靈邸は炎帝消滅、恐悅の事に御坐候、西上の御一義は少も惡風吹不申候趣、件々承候得共、是は定て中參政より委曲御地へ便可有之に付、略書仕候、

人材養成ニ努メツヽアリ

當境、文武兩館を始、先相變事無御坐、考課試業等例の通當月中有之候、且今度武藝所へ被仰出、砲術所等も追々趣向相立申候、銃隊教練も春來整齊仕揚げ相始め候所、一埒付き申候、礮隊の義も稍稽古等の義趣向付候へ共、是は格別見込も無之候、唯、諸件共實論薄くして虛名に相成可申樣、此邊の事甚以痛心の至に御坐候、賴む所は諸官儉焉の所に御坐候、却說、只管繁劇奔走のみに流れ候ては、人材成育の道如何可有之候や、別て定藩外已上邊は講學の道一際勵精の樣相成度種々御評議中に御坐候、

當春は春課後、生徒の分を量り當秋迄半歲の業をあてがい申候、依之、一際爲勵候樣、以來は半歲の業をあてがい候て、夫を春秋に考課候筈に御坐候、是等も趣向は隨分宜布方、畢竟する所、成材の道不容易事、敎官列何角致心配申候、

砲術所

頭取の面々御承知の手合故、砲術所折々不都合を生じ、込入申候、一から十迄世話候ても、夫がまだ間違多く、何とか役人配り方可有之と工夫仕居事に御坐候、此頃より詰番組稽古仕方、大に條理相立候に付、近々打手も出來可申、樂しみに御坐候、

武藝所

當春、武藝所一日稽古野仕合等盛に御坐候、只固陋の病は難解散、近々療治の積りに御坐候、肝煎師役の内、毎々說破候所、世識(職カ)の手合故手廣く致候事は、殊之外恐れ候、笑止の至、可愧事に御坐候、前紙被仰出、入御披見申候、外に申上度事も御坐候へども、要用のみ申留候、謹言、

二月廿四日　　戇堂拜

端亮高兄

尙々寒溫不順の候、折角御愛護、別て此間少々御容體御伏枕の御樣子に承申候、尙更、爲天下御自重御加養專一に奉存候、長谷は十八日より島丈恕介(矢島)同道にて、山中入湯出掛申候、三廻りは保養の筈に御坐候、何卒適宜祈申候、同僚長官始大に勢宜方、土は甚失望の樣子に有之候處、此比追々仕事出來、精勵の趣に相成申候、何も御案事被下間敷候、先右等の趣、相變候義も無御坐、此に擱筆仕候、頓首、

繼嗣問題ニ盡力スルヲ喜ブ

〔中泉代官林伊太郎書翰〕○橋本左内全集所載

○安政五年春橋本左内宛

春禧萬福、愈御淸祥珍重奉存候、偖、其後大御無沙汰御海容可被下候、兎角種々不面白事のみ承り、氣色もわるく、諸君子とも御文通の力無之、自然御不沙汰相成候條、失敬御用捨吳々相願候、偖、杞憂にて徒死もつまり不申、餘力讀書作文なと相始め申候、御一笑可被下候、偖、夫には引替へ、貴兄は明君英主の御側近く御奉仕の事、必定御良策御盡力被成候儀と遠察仕候、不苦候はゞ當節の時勢御內諭相願度、乍去、御迷惑に候はゞ强ては相願間敷候、甚憚入候事には候得共、君公には深御痛心奉恐察候、當三月御登りは定て御延引にも可被爲入、夫是の含も相伺度奉存候、

貴兄は如何、是又相伺度奉存候、

逸强(一橋公)高云々々々、定て吳仁力(御盡力)の御儀可有御坐、實に此節に至り極々肝要の事、御如才は有之間敷候得共、一片婆心如此御一笑可被下候、急ぎ匆々拜首、

橋本樣　　春沖(林伊太郎、長建、鶴梁)旨

士たるもの盡力實に此時にあると勿論に候得共、其時を得ぬ人は無據束手の外無之、貴兄

は難得の人主に遭逢の御事故、決而御必死の御盡力と遠察仕候、爲國可賀々々、御洩しにて宜敷丈けは急ぎ相伺度候也、呵々、

○附　錄

〔村田巳三郎書翰〕（橋本左内全集所載）

○二月二十四日横山猶藏宛

乍端書御留守にても御安健の旨、且又貴樣御健勝御登坂の趣、以手紙御留守へ得御意申候、御案事被成間敷候、以上、

乍憚幸吉より先日油元ゆひ廻し奥辱存候旨御申聞可被下候、且又在所親儀も至つて老健の旨、此又御申聞可被下候、以上、

御翰拜達辱致拜見候、先以

上々樣益御機嫌克御座被遊奉恐悦候、隨て愈御安健今般西上無御滯珍重の至奉存候、偖御地の光景夫々縷々被仰下、別而辱奉存候、有名の手合御而會の所多分固陋の習難免、云々、御示諭の通、時務通曉の士、天下擧て其類稀に候處、別て其御地一種陋習有之儒生皆迂濶、依て一事をも濟得候手段無覺束候、（頴井藩士野村酒藏）野淵輩も右等の陋見に被引動候と相見へ、近來吾藩の御處置振を致慨嘆居候樣子、是こそ眞に可嘆可笑、先達て拙子へ書面遣し平生は人心を結び、事に當つては後れを取らずと此二件を申遣候、其言は可思、然し俗情に假合するは人心を結ぶと云ふべからず、又稍縉紳家儒生の說を聞て、夫を以て事務に通し事に後れざるの手段あると思ふは尤も可笑、此節切々御出合候はゞ、舊來の陋見一洗致候樣折角御說破可被成候、

今度近了（近藤了介）上京の次第、委細は桃亮（橋本左内）へ申入候、此人隨分氣象有之候へども、近來朋友中切磋に乏敷、吏務に執掌致居事故、義理智覺今一層相開け不申、依て追々士氣振起工夫及一變候樣致度存候、就ては御問合も有之候はゞ、折角御切磋被下候樣偏に御願申上候、

（吉田松陰）東篁翁の事細々御紙面の趣承知、此義は拙子へ御任せ置可被成候、扨、今行の事に付ては桃亮にも不可讓、事務擔負御周旋の御覺悟の由、御志概の程感心不尠次第に御座候、愈益御盡力無殘所樣是又祈所に御座候、榊原・安部輩何れも甚致工夫居申候、先は官務寸暇中、草々要用及御答申候、頓首、

二月廿四日　　衡山直兄　　邨巒堂

要用答

尙々、不順の氣候折角御厭ひ御自愛可被成、野淵に御出合被成候はゞ宜敷御傳、且又、前書の通迂濶の見一洗致候樣御申聞可被下候、以上、

十日丙辰　江戸日本橋小田原町火アリ。霊岸島・佃島ニ延焼ス。

〔代官竹垣直道日記〕（維新史料編纂會所藏本）

二月十日、晴、風、○中略、

一、夜五時比、小田原町ゟ出火、西北風ニる佃嶋迄延焼、翌朝五半時比鎭火、

同十六日、晴、

一、朝五半時過、出宅、○中略、今般江戸火災ニ付、在方木材賣出方直段上等不致樣取締向之義、（若中久世廣周）大和守殿御沙汰之旨、奉行衆御達之趣、菊地大助申達、小林・自分・林部・增田・河奈・篠本・

左内ヲ助ケ活動センコトヲ望ム

小田原町ヨリ出火佃島ニ延焼ス

木材ノ値上ヲ禁ズ

西上ヲ喜ブ

京地儒生ノ迂濶論

山内・佐々木一同受書出ス、

〔松宇日記〕○水戸藩士西野宣明日記子爵澁澤榮一所藏本

二月十日、天晴、例刻出仕、○中略、

入夜五時日本橋邊小田原丁二丁目云云、出火、西北烈風及大火、本町通迄類燒、南ハ鐵炮洲・八丁堀邊・大小名第宅悉皆類燒、佃島にて鎭火、東北之方日本橋・江戸橋邊・海盜(蛾カ)橋邊・茅場丁・新川・四日市干物店・靑物丁・万丁・クレ正丁・音羽丁・佐内丁・卅間堀・北八丁堀・五丁目・南八丁堀諸屋敷・阿州等迄、稻荷神社不燒、又東ノ方ハ靈岸橋・湊丁・川口丁・中ノ橋・松平長門守殿・細川能州等燒、松本丁ゟ佃島へ飛火、獵師丁・石川島等燒失之由、終宵如白晝火熾也、

十一日、天晴、嚴寒、早朝被爲　召、五半時過出宅、於本郷遠望、烟火如白雲凝天、西北烈風、往來人皆云、卽今佃島燒云云、(於本郷六丁目望之、直折右出丸山臺也、)

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

二月十日、

一、今夜五時頃、日本橋安針町ゟ出火、靈巖嶋・佃嶋迄燒、翌十一日朝五時頃、鎭火、

〔石川成章日記〕○維新史料編纂會所藏本

二月十日、非番、○中略、

一、五時過ゟ安針町邊ゟ出火ニ而燃募り候間、太右衞門、築地へ見舞ニ差出候、

〔安政日曆〕○維新史料編纂會所藏本

二月十日、江戸大災、

夜五時過西風烈敷、日本橋小田原丁鷲長屋邊ゟ出火、飛火數口ゟ相成、長濱丁・安まん丁・本船丁・魚河岸納屋・室丁一丁目・貳丁目・瀨戸物丁片側、伊勢丁半丁、日本橋四日市・富倉稻荷社・茶店・蜜柑店・鹽物店・翁稻荷社・萬丁・靑物丁・音羽丁・左内丁・小松丁・木原店・平右衞門丁南側、川瀨石丁・式部小路・南油丁・新右衞門丁・槇丁・福嶋丁・材木丁壹丁目・貳丁目・三丁目・八丁堀・坂本丁壹丁目・貳丁目・海賊橋・藥師地內山王御旅所・裏表茅場丁・代官屋敷・竹嶋丁・龜島丁・矢場邊組屋敷・紅梅新道・與作屋敷・竹丁・水谷丁・小嶋丁・灯燈掛横丁・神保小路・鍛冶丁・七間丁・新銀丁代地・漆屋丁代地・松下町・九鬼中務少輔裏長屋少々、片與力丁・水谷丁立跡、紺屋丁・金六丁・永嶋丁・日比谷丁・幸丁・長澤丁・岡崎丁上下大通り、玉圓寺・龜屋屋敷・焚出横丁・玉屋新道・屋根屋丁・南八丁堀五丁目代地・辨天下横丁・松屋丁續キ上納地・磯邊太神宮社・高輪南丁代地・本八丁堀二丁目・三丁目・四丁目・五丁目・靈岸嶋川口丁・靈岸嶋丁・富島丁一丁目・貳丁目・長崎丁・白銀丁一丁目・

日本橋大火燒失戸數

貳丁目・三丁目・南新川半分、向井將監船手役所・本湊丁・船松丁一丁目・二丁目・小橋上下、細川能登守屋敷・松平淡路守長屋少々、十間丁半丁、佃島獵師町・石川島邊迄燒亡、翌十一日、巳中刻風靜り致鎭火候、燒亡之總計里數三里十丁、町數百拾八ヶ町、家數拾貳万四千五百四十竈余、怪我人九十七人、橋四ヶ所、寺三軒、穴藏九十七ヶ所、土藏百三十四戸前、云々、

〔見聞雜錄〕○維新史料編纂會所藏本

頃ハ安政五戊午年二月十日夜五ツ時過、西北風ハケシク、日本橋小田原丁鷲長屋邊ヨリ出火イタシ、長濱丁・安針丁・本船丁・魚河岸納屋殘ラス燒ル、此邊土藏穴グラ多ク燒落ル、釘店角六番・八番組消止ル、室町東カワ壹丁目殘ラス、貳丁目中程壹番・八番・十番組消止ル、夫ヨリ瀨戸物丁片カワ中通リ角本所組消止ル、伊勢丁半丁計角八番・十番中組消止ル、凡此邊跡火ニテ御座候間、土藏穴藏燒失ノ由ニ御座候、

日本橋北之方
燒失土藏數
五十七戸前
穴藏

四十壹ヶ所

怪我人
凡六十七八人程

家數
壹万貳千八十竈ヨ

日本橋元四日市一圓藏屋敷邊殘ラス、富倉稻荷ノ社店(床カ)見世殘ラス、ミカン店翁稻荷社燒ル、鹽物店四日市上角五番八番本所組消止ル、川岸通リ五六軒殘ル、夫ヨリ通リ壹丁目木戸際五番組消止ル、萬丁・靑物丁・音羽町・佐內丁・小松丁ヤケル、木ワラ店平右衞門丁兩側、酒井左衞門尉樣御人數、幷本所組消止ル、同所ウラ通白木屋手勢ヲ以テ消止ル、川瀨石丁・式部小路・南油丁・新右衞門丁、五番組消止ル、樽正丁中程三番組消止ル、フク島丁壹番組消止ル、夫ヨリ材木町通壹丁目・貳丁目・三丁目迄殘ラス燒ル、

此邊燒失土藏
二十二戸前
穴藏
二十六ヶ所

又一口ハ八丁堀・坂本丁エ飛火シテ、壹丁目・貳丁目裏表不殘燒ル、牧野河内守様殘ル、海ゾク橋落ル、夫ヨリ彌ホノホ盛ニシテ八方ニ飛チリ、火先七八口ニ成、藥師地内山王御旅所不殘、ウラ表茅場丁靈ガン橋手前、壹番貳バン深川組消止ル、代官屋敷・竹島町・龜島丁・矢場邊御組殘ラス（脱カ）、紅梅シン道・與作屋敷・竹丁・水谷町・北島丁・テウチン掛横丁・ジンボウ小路・カジ丁・七間丁・新銀丁代地燒ル、ヌシ丁代地・松下丁代地火之中ニテ殘ル、九鬼様ウラ御長屋少々、細川越中守様御中屋敷・松平越中守様御上屋敷、四方火ノ中ニテ殘ル、中與力町二番組消止ル、片與力町・水谷丁立跡・コンヤ丁・金六丁・永島丁・目比谷丁・幸丁・長澤丁・岡崎丁上下大通リ・玉圓寺燒ル、龜ヤ屋敷・焚出シ横丁、此邊一エンニシリ火ツヨク、玉子ヤ新道・家根ヤ丁・南八丁堀五丁目代地・辨天ヨコ丁・松屋丁續上納地・磯部太神宮社燒ル、高輪南町代地北角壹番・貳番・八番・十番組消札カヽリ、四軒程殘ル、本八丁堀壹丁目・彈正橋際二番組消止ル、二丁目・三丁目・四丁目・五丁目殘ラス燒ル、明細書、

怪我人　凡三十人程

家數　三万六千七百十竈ヨ

燒失土藏　二十七戸前

穴藏　三十壹ヶ所

人　無事

家數　七万六千二十竈

夫ヨリ飛火シテ、靈巖島川口丁・靈巖島丁・トミ島丁一丁目・二丁目・長崎丁角・本所深川組消止ル、白銀丁壹丁目・貳丁目・三丁目少々殘ル、南新川半分程殘ル、松平越前守様御中屋敷殘ル、向井將監様御組御舟手役所燒ル、東湊丁壹丁目・エンカク寺燒ル、同貳丁目ヤケル、川岸納屋殘ル、川口丁自身番・ナヤ兩所共、火之中ニテ殘ル、此分如斯、

燒失土藏　七戸前

穴藏

夫ヨリ南八丁堀ニ飛火シテ、二丁目中程三番・八番組消止ル、三丁目・五丁目・中之橋焼落ル、堀長門守様・井伊様殘ル、松平阿波守様御中屋鋪・御新屋敷共焼ル、堀田土佐守様少々焼ル、表長屋無事、松平内匠頭様・松平遠江守様・中川修理太夫様殘ル、鐵炮洲稲荷社脇自身番屋共火ノ中ニテ殘ル、本湊丁炭問屋不殘焼ル、舟松丁壹丁目・二丁目小橋上下共焼落ル、細川能登守様御上屋敷焼ル、松平淡路守様表御長屋少々焼ル、十間丁半丁計焼ル、明細書、

焼失土藏	十一ヶ所	
穴藏	五ヶ所	
怪我人	十四ヶ所	
	四人程	
家數	一万二千百三十余	

夫ヨリ佃島ヘ飛火シテ獵師町殘ル、スミヨシ社ツ、ガナシ、石川島近邊焼ル、翌十一日巳中刻風シヅマリ鎮火致シ候、

怪我人	七人程	
家數	七千六百三十竈ヨ	
惣〆焼失土藏數	百三拾四ヶ所	
穴藏	九拾七ヶ所	
寺	三ヶ寺	
橋	四ヶ所	
怪我人		

日本橋ノ大火

〔世間物語〕○維新史料編纂會所藏本

二月十日、天氣、四谷通出火、又夜五半時ゟ日本橋あんじん町、湯やのうらゟ出火して、翌十一日午ノ刻までやける、

二月十八日、快晴、長閑、去ル十日火事場付、夜西北風たけしく、折ゟら五ッ時、日本橋小田原町へんゟ出火して、同壹丁目・二丁め・安じん丁・長もま丁・いせ丁・瀬戸物丁片ゟ〻焼、室丁壹丁目・貳丁目片ゟ〻少々殘る、魚がしゟ四日市へ飛火、土手藏・翁いなり焼、ゑほ物店不殘、万丁・青物丁・音羽丁・木原店・平松丁・左内丁・まんざ魚ゟし・小松丁・式部小路此邊ハ不殘、らいぞくもしおちる、川瀬石丁・南油丁・新右衛門丁・くれ正丁片ゟ〻、本材木丁四丁目中ゑとまて焼る、坂本丁・植木店此邊のこらほ、かやぢ丁藥師表うら、かやと丁不

九拾七人程

家數

拾貳万四千五百四十竈ヨ

町數

百拾八ヶ所

里數合セテ三里拾丁

殘、千川屋敷・代官屋敷・九鬼様・細川様・越中様のこる、與力町のこる、北嶋丁・竹嶋丁・龜嶋丁・地藏ざし邊一めん、かち丁・七々ん丁・横ざり・水谷町・こんや丁・金六丁・與作屋敷・靈ゟん嶋飛火、川口丁・富嶋丁・長崎丁三丁共、白金丁四丁共のこらほ、南新川焼北新川のまる、越前様中屋敷少々やけ、東湊町ゟ御船手やしき海手迄、又一ト口ゟ八丁堀大通・岡崎丁・やねや丁・松屋丁・いそべ大神宮焼落、高ない代地のこらほ、本八丁堀うら表五丁共不殘、中の橋おちる、南八丁堀三丁目ゟ五丁目迄、西尾おきの守様・堀田土佐守様半焼、阿波守様中屋敷・鐵ネうづいなりのこる、本ごなと丁小橋おちる、船松丁壹丁目・貳丁目・細川のと守様・松平あわぢの守様ニて留、十々ん丁中程ニて焼留り、つく田嶋へ飛火ニて焼る、翌十一日、五半時火ぢづまり、人々安堵、

〔武江年表〕

二月十日、彼岸の終り、初午の二日前なり、朝より北風烈しかりしが、日暮てより少しく鎮りぬ、然るに戌刻、安針町・長濱町二丁目の境、魚店の納屋より火出て、一時ふ燒廣ごり、瀬戸物町・伊勢町・本小田原町・長濱町・本船町・室町裏通へ燒込、江戸橋を越て四日市町・青物町・萬町通一丁目・二丁目裏手・音羽町・佐内町・小松町・川瀬石町・本材木町四丁目迄、新右衛門町・樽正町・平松町・南油町中通、又海賊橋向牧野矦屋敷へ少しく火移り、坂本町・南茅場町・山王旅所

江戸ノ大火ヲ報ズ

門前・其餘八丁堀邊、一圓燒亡す、松平越州侯・九鬼侯ハ殘る、北紺屋町・金六町・岡崎町・松屋町・中與力町火中ホして殘る、
日比谷町・永島町・幸町・長澤町・本八丁堀・高繩代地・北島町・竹島町・南八丁堀へ移る、橋際稻荷
社は危く殘る、又蒟蒻島も殘る、靈巖島川口町・長崎町・銀町・圓覺寺・富島町・東湊町に至り、佃島へ飛で住吉
社も燒たり、夫より本湊町・船松町・十軒町へ燒込、武家にハ阿州侯中屋鋪・細川侯燒失、松(池田淸貫、鳥取支藩)
平淡州侯屋鋪少し燒込、此所にて止る、翌十一日巳半刻に鎭る、町數八十五町、長延十八町
餘、幅平均して四町程なり、此時土藏の多く燒たるハ、卯年の地震後修復の麁略なるがゆゑ燒たるが多しとぞ、市中初午稻荷祭火事ホより大方二午ホ延す多し、

〔嘉永明治年間錄〕

十日夜、江戸本小田原町火延テ百十八箇町ヲ燒ク、

二月十日夜五時頃、本小田原町出火、西北風烈敷、翌十一日巳の中刻鎭火、町數百十八箇
町、竈數十二万四千五百四十軒類燒すと云、

〔土岐朝昌等書翰〕○宮內省圖書寮所藏本　川路聖謨京都表御用留所載

以書狀致啓上候、然ゝ昨十日夜五半時頃、小田原町邊ゟ之出火ニゐ、江戸橋前後・材木町通
り・八町堀・鐵炮洲・佃嶋一圓燒失、其外通り町邊も所々類燒、木挽町・築地邊にも燒込、今
朝四時過頃同所ニゐ鎭火、尤濱御庭・金銀座・講武所・越中島・新錢座・鐵炮洲嶋々會所、且
佃島共燒失いゐ候得共、御船製造場、幷人足寄場等ゑ御別條無之、岩瀨肥州(忠震、目付)留守宅ゑ別

靈巖島福井藩邸燒ケズ

條無之候、前文之趣遠境御心配も可有之儀ニ付、此段爲御心得、不取敢可得御意如斯御座
候、以上、

二月十一日

永井玄蕃頭(尙志、勘定奉行)　印
土岐攝津守(朝昌、勘定奉行)　印

川路左衞門尉(聖謨、勘定奉行)　樣

〔福井藩士中根靱負書翰〕○橋本左內全集所載

猶以、差向市中之ゑの御救取計候、外御心配之ヶ所も無之、御同慶奉存候、以上、

○二月十一日橋本左內宛

○上(二月十日夜)略、昨夕、薩へ參り、薄暮歸り、夜に入り○中略、五時過火事の沙汰、半鐘摺立、折節西北の烈風
故、驚き出格子を開け候處、常盤橋見附の後は火災滿天故、早速出勤に及候處、小田原より
出火、一時に蔓延、乍併、盤邸は風上故懸念無之、海邸風下に付、追々御人數被遣候處、益大
火に相成、海邸も御存亡難斗候得共、靈岸島周圍の橋々、多くは燒落、道路難通、何れも痛
心罷在候處、夜八ツ半時頃に至り、先つ御別條無之段、慥に相聞候に付、漸及安堵候、乍併
延燒の火勢は强勢に鐵炮洲、築地の方へ燒け行き、東の方は通りへ出たとも申、出ぬとも
申位の事、止むべき樣子も無之候得共、先つ關係無之方角と相成候故引取候、○中略、今朝六ツ

時過起出候處、黑煙焰々として猶南の方へ燒け行き候最中、新錢座抔危篤と被思候、○下略、

〔福井藩士石原甚十郎書翰〕○橋本左内全集所載

○二月十一日橋本左内宛

○上略、昨晩五時、（二月十日夜）安針町より出火、西南風烈敷、島御屋敷（靈岐島福井藩邸）所々飛火有之、横前とも一面の火に相成候得共、漸々喰留、今曉安堵致候、奉恐悅候、今五ツ半時過、銕炮洲邊・膳所本多邊燒最中、一統疲切申候、此勢にては海手迄拔可申、佃島丸燒、八丁堀邊火口二三に別、大火に相成申候、○下略、

〔鹿兒島藩士鎌田正純日記〕○鎌田正夫所藏本

二月十一日、晴天、巳、○中略、

一昨夜五ツ半頃ゟ日本橋小田原丁邊ゟ出火、四日市南北八丁堀迄燒通、今朝五ツ半過こそ、築地御支配屋敷迄火之由こゐ、筑後殿（川上久封、鹿兒島藩家老）こそ出馬相成候へ共、拙者こそ　御代參故、右相勤罷歸候節そ鎭火相成、消打候付出馬ニ不及候事、

〔盛岡藩士山崎忠吉江府詰合私錄〕○維新史料編纂會所藏本

二月十一日、晴、風有、○中略、大守様（南部利剛、盛岡藩主）、今日九ツ時蒲田邊に御遠馬被遊候筈之處、昨夜日本橋邊出火有、大火ニ相成、今日迄燒續ニ付、御延引ニ相成、

鐵炮洲ノ鳥取支藩々邸類燒

同廿八日、晴、○中略、鐵炮洲に懸り、當月十日失火跡見物、七ツ半過歸宅、

〔鳥取藩江戸日記〕○侯爵池田仲博所藏本

二月十一日、○中略、

一淡路守様ゟ（池田清直、鳥取支藩主）今日御用番様に、左之御屆書御留守居を以被成御差出候段、御附人をり申越、及返答、

昨夜亥刻頃、日本橋邊ゟ出火仕、鐵炮洲拾軒町私居屋敷、左之通類燒仕候、

一表長屋北ゟ南ニ貳拾六間壹尺

一北側内長屋三拾九間

一中長屋拾五間半

右之通御座候、此段御屆申上候、以上、

二月十一日　御（松平淡路守）名

一○中略、鐵炮洲様御長屋向御類燒ニ付、爲御見廻御近習御使者を以、左之通被進候事、委細御使者扣ニ記之、

但し、右御見廻品被進之儀、安永九年、三田様御屋敷御自火こゐ御部屋御燒失、弘化三年鐵炮洲様御長屋御塀覆御類燒之節共、被進品相見不申處、寛政九年二月、鐵炮洲様

御屋敷御類焼之節、文化三年三月、三田様御屋敷御長屋御類焼之節共、松板被進有之、並去ル卯年地震之節、一昨辰年八月、大風之節にも、松板五拾間宛被進居申、其上此度表御長屋向も御類焼ニ相成、尤板敷多分五拾間之被進ニ候得共、此度も格列之御類焼ニも無之候付、考合之上、三拾間之被進ニ取計、且、右御見廻被進之儀も、御承知被遊候上、被進候當りニも候得共、余程日數相懸り候儀ニ付、式部殿（池田武部、鳥取藩家老）共談合之上、本文之通被進取計候事、且又今日表向御方御日柄ニ候得共、臨時之儀ニ付、七時過被進候事、委細當月十四日御用禮扣ニ有之、

一松板三拾間

御目錄

淡路守様ニ

一鐵炮洲様昨夜之大火ニ付、御屋敷風下追々御近火ニ相成、御住居難被成ニ付、當御廣式ニ左之御方々様御立退被成候付、萬々宜取計候様、觸出ス向々ニ可申渡旨、式部殿被申聞候事、

貞脩院様
法月院様
於種様

於長様

〔鳥取藩江戸御用札控〕（○侯爵池田仲博所藏本）

二月十四日、○中略、

西内半切、

一筆致啓上候、愈御堅固御供無御障被成御旅行、伏見ニ可被成御上着ヲ、目出度存候、右御歡爲可得御意、如斯御座候、恐惶謹言、

洞

白井ニ

一追ゟ申入候、去ル十日夜五時頃、日本橋邊ゟ出火之處、西北風強く追々大火ヲ相成、靈巖島・八丁堀・鐵炮洲邊迄も燒出、右ニ付淡路守様ニ火消御人數被進候處、右御屋敷表御長屋、北ゟ南ニ貳拾六間餘、北側内長屋三拾九間、中御長屋拾五間半御類燒ニゟ、其外御殿向等無御別條、翌十一日四半時頃致鎭火候、右ニ付、左之御方々様、此御廣式ニ被成御立除、翌十二日夕被成御歸候、此段

貞脩院様
法月院様

猶以、右御方々様之内於種様ゟ、未タ其儘被成御逗留居申候、此段も御心得ニ申越候、
以上、

一追ゟ申入候、別紙申越候通被成御類焼候付、淡路守様ニ去ル十一日、爲御見廻御近習御
使者を以、左之通被進取計相濟候間、此段宜被成御申上候、此段

松板三拾間　　於種様
御目錄　　於長様
右之通、

自筆立、

一以別紙得御意候、然ゟ別紙申越候通、淡路守様御屋敷御長屋向御類焼ニ付、御見廻品被
進之儀取調させ候處、安永九年三田御屋敷御地(ヨ)火ニゟ御長屋御焼失之節、
殿様御在國中ニゟ被進品相見不申、文化三年右御屋敷御長屋御類焼之節も、
御在府中ニゟ松板被進居申、弘化三年鐵炮洲様御屋敷御塀覆御類焼之節も、
御在府中ニ候得共何ゟ被進無御座處、去ル卯年地震並一昨年大風之節共、松板五拾間宛

被進居申、其上此度ハ表御長屋向も御類焼被成、文化三年三田様ニ被進居申御例も御座
候付、別紙申越候通被進取計申候、尤被進之板數多分五拾間之被進ニ候得共、此度ゟ格
別之御類焼ニも無之ニ付、考合三拾間之被進ニ取計申候、且又御見廻被進之儀ゟ、
御承知被遊候上被進候當りニゟ相考候得共、左ニゟ御日合も相懸り御不都合之様相
考候付、其段式部ニ談合候上、兼ゟ被　仰付候趣を以被進取計相濟候間、此段御含宜被
成御申上候、此段申越候、以上、

猶以、去十一日ゟ向御方、御日柄ニ候得共、臨時之儀ニ付、七時過ニ被進候儀ニ御座候、
此段も御心得ニ申越候、以上、

〔聞集錄〕（○東京帝國大學所藏本）

安政五戊午年二月、江戸大火、

當十日戌刻、日本橋長濱町より出火、北風強、本船町・安針町不殘、尻火ニて、小田原町・瀨
戸物町南側、伊勢町川岸通、室町壹町・二丁目東側不殘、向川岸四日市ニ飛火、萬町・青物町
中通福嶋町迄燒、本材木町四町目迄、茅場町不殘、新川・八丁堀不殘、牧野様・九鬼様・細川
様・桑名様、靈岸嶋富嶋町二丁目迄、南新川貳丁目迄、北新川殘り、鐵炮洲湊町・本八丁堀阿
波様御屋敷燒、同船松丁貳丁目燒、夫より佃嶋ニ飛火、同所不殘、八丁堀松屋橋高輪代地よ

り南八丁堀へ燒込、十一日、午下刻、火鎭り申候、以上、

江戸飛脚や

二月十五日

〔川路聖謨都日記〕○宮内省圖書寮所藏本

○本書ノ句讀點其ノ他ハ總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

十五日（二月）　晴　○中略、江戸表大火ニ候。築地其外不殘八丁堀邊も燒失之由。今朝飛脚屋ゟ申來る。大ゟ驚申候。乍去先ツ小源之宿之外ゟ。氣遣ひも無之候。遠國之書狀ゟ。ころもいやゝさるハ心懸りゟ。

廿四日　雨　○中略、宅狀來る。近火之躰。委細ゟ相分る。飛火ゟそもゝたちたる所あるよー。或ゟ長屋乃窓荻破りゟ。家財荻家來共出ーたるゟーき等。其危急おもふへーー。一旦立のき。池魚ゟ災不及ーゟ。怪我もおく歸ゐたる上ハ。十二分ゟとゟ。凡三千兩之助ゐあるへーー。大ゟよろーー。さてのくおもへハ。又瓦をふゟ破ゐ。諸道具荻損さーー。書齋之書たお荻傷ひーのいのまおと。段々と思ふゟ。こゐこお人欲之長する所ゟ。幸三郎宅燒失之由。以前兩家御手傳普請こる出來候。間もおく如此。さゐとわり家乃このむゐと。おもへハよーー。幸三郎ゟ遠國留守中別る幸ゟ。

十一日丁巳　丁祭。

江戸大火ノ報至ル

小御所ニ出御論義ヲ御聽聞アラセラル

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

二月十一日、丁巳、晴、當番議　奏坊城中納言殿（俊克）、傳奏兩卿參侍、

一中丁也、紀傳・明經兩流、剋限參集、未半二剋過、

出御于小御所、御攝釋（攝）有之、先是御殿御攝殿奉行衆沙汰也、圓座敷設、議奏衆・近習衆等員數番頭相尋、猿杉戸際江寄出之、但、諸禮之人、通行道不狹樣点檢可有之事、

〔非藏人日記坤〕○東京帝國大學所藏本

二月十一日、丁巳、晴、當番議奏坊城中納言殿、宿替裏松大藏卿（恭光）殿、傳奏參侍、

一中丁也、紀傳・明經兩流、剋限參侍、未半二剋過、　出御于小御所、　聞食論義、申剋　入御、先是御殿御攝殿奉行衆沙汰也、御塞設、鶴・鷺・猿等杉戸鎖切、梅椙戸立寄、御火鉢二面被出之、

一御見臺不被出之、

一燈臺二基、菊燈臺小一基、打敷・菊盆・金器等雖設、不及其儀、但、五位職事・六位侍中等被役也、中金燭一基、南廂江可出之處、是亦不及其儀、

一御人數江框菓子被出、如例、

〔德大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

安政五年二月十一日

清岡長熙丁祭論義講師ヲ勤ム

二月十一日、晴、

一仲丁也、菅・清、近習・殿上人無人ニ付、太閤殿依伺定、元近習ヲ被任了、舟橋・東坊城等被勤仕了、

〔高辻以長日記〕○子爵高辻宮齋所藏本

二月六日、晴、朝曇、

一詣于鎮守、以下如毎朝、

一清岡式部權大輔（長熙）今午後早々、

口演

今度、丁祭論義講師相勤候ニ付、毛詩辨書幷問答之詞書、別紙入高覽候、乍御面倒賢慮之程、無御隔意御示教願度存候、自然賢慮も不被爲有候上、問者御方々へ更ニ可申上候得共、何歟繁多不能其儀候条、宜御傳願度存候、吳々乍御面倒、總る御心添之儀願度存候、別々ニ思召可相伺本候へ共、彼是可及遲々候条、乍畧儀御連名仕置候、御廻覽も候得と深畏入存候、右願度早々如此候也、

二月六日　　長熙

高辻（以長）殿承候、何之所意無之、修長へ傳候也、

追る東坊城殿・五條殿等へ別ニ申入候也、

桑原（爲政、文章博士）殿　　唐橋（在光、文章博士）殿

論義文、別ニ寫、

一右桑原へ達處、落手之、

十一日、晴、

一修長退下辰前先入湯、次入湯以長、

一詣于鎮守、以下如毎朝、

一當家聖像、且昨年歟表粧、孔子七十余、弟子二軸、如例祭、修理役之、

此切紙、早差出、

口述

今日中丁御用、依所勞令不參候、宜預御沙汰候也、

以長

二月十一日

議奏御參御中

右、辰比差出処、坊城中納言落手之、

一今日中丁、巳前修長衣冠差貫、笏ニ問ノ文ヲ張リ付、懷紙等持參、○記事ノ貼紙アリ。剝落セシモノ如シ。

修長供、歸ニ參　內之節、東坊城（聰長、武家傳奏）前大納言ニ廊下ニ而逢候処、今日御不參之切紙、東坊城へ今日ハ差出不申哉尋、後剋可差出と、修長答置候間、以長切紙　禁中へ可差出、修長ゟ

書中ニ而告來、

一修長退出申半比之、菓子例之品持歸、

口述

今日中丁御用、依所勞令不參候、宜預御沙汰候也、

二月十一日　以　長

前　菅大納言殿（東坊城聰長）

右、早々已過、禁中へ差出処、舟橋落手（在賢）トス、東坊前亞相ハ、御用ニ而附武家へ被行歟ニ付而之、右舟橋二位、今日又近習ニ被加歟、落手之、

一愛宕三位（通祐）未過、庭前ゟ一寸被來、

一今日中丁不參、五條前中納言（爲定）・伏原二位（宣諭）同三位ハ蟄居、伏原大夫（宣足）・清岡大學頭（長説）近習、以長等之、

一聰長卿ハ傳奏御用ニ而一寸被參、直ニ退出、依右聖像御祭撤却等、舟橋二位（當時内々番所、同上、此人も元）・東坊城少納言等（近習（夏長））ノ由、

仲春丁祭聽講毛詩同賦春日遲々詩

正五位下　菅原　修　長

春色蒼然四面通、　遲遲晝景暖東風、

丁祭賦詩

請看恩澤遍山野、　百姓謳歌賀歲豐、

仲春……

式部大輔　菅原　以　長

微暄漸放淑光融、　日脚遲々淡蕩風、

卉木皆榮霑聖澤、　春耕到處祝年豐、

以長不參候へ共試作、

〔菅葉〕○五條爲定日記宮内省圖書寮所藏本

二月十一日、丁巳、晴、爲榮（五條）中丁御用且當番三十番詰宿等參仕、爲後日記懷、

仲春丁祭聽講毛詩同賦春日遲々一首

從五位上　菅原　爲榮

四海昇平施聖恩、　仁風廣被布春喧、

微臣最喜逢遲日、　聽講毛詩侍　至尊、

今日論義、毛詩文王と什文王章也、講師式部權大輔（清岡）長熙、讀師新菅三位（唐橋）在光、題者亦新菅三位也、予依所勞不參、

〔中山績子日記〕

講師讀師題者

二月十一日、

聖像御拜

御き嫌御よし〳〵、中てゐ御かく門(問)所上段聖そう御拜、御引直衣めさるゝ、其後御する〻御はかまて成、

傳奏議奏堀田正睦ノ旅館ニ赴ク

武家傳奏廣橋光成前權大納言・同東坊城聰長前權大納言・議奏久我建通權大納言・同德大寺公純權大納言・同萬里小路正房權大納言 老中堀田正睦備中守 ノ旅館本能寺ニ詣ル。正睦、京都所司代本多忠民美濃守・勘定奉行川路聖謨左衞門尉・目付岩瀨忠震肥後守 等ト俱ニ、宇內ノ形勢ヲ詳說シ、日米條約草案ヲ示シテ朝旨ヲ請フ。

〔德大寺公純日記〕○臨時帶案編修局所藏本

二月十日、晴、○中略、

一明日明後日內、堀田備中守役宅、兩人・萬里小路殿等可行向、尤武傳同伴之事被示、日限治定有之候ハヽ、可被示之、万殿・久我ゟ被申入、

十一日、晴、○中略、

一堀田備中守旅宅(本能寺)行向、武傳兩卿・久我・予・万里小路等也、先万里小路參集、案內之後同伴行向、申半許退散、兩公亭へ行向訖、三人同伴也、

〔老中堀田正睦通達〕○伯爵橋本實梁所藏本 外國處置雜誌所載

堀田上京ノ趣旨

○二月十一日武家傳奏へ

安政五年年二月十一日、堀田備中守ゟ差出候書取、○上野氏記錄

堀田備中守ヨリ差出し候書取寫、○外國處置雜誌

(イ亞國使節申立之趣意)

亞墨利加國之使者申立之趣、不容易儀ニ付、於關東衆議を盡し候上、申立之條々、精々及論談、彼方より差出候條約案文之每條、夫々取縮及談判候ニ付、今般(イ私ノ下共)私被差登、委細之事情可申上旨、被仰付候事、

(上野氏記錄)

〔佐倉藩戊午年集〕○伯爵堀田正恒所藏本

二月十一日、晴、

一卯中剋前、 御目覺、

一四時過、繼御上下被爲 召、於御書院、傳奏衆廣橋前大納言樣・東坊城大納言樣、議奏前久我大納言樣・德大寺大納言樣・萬里小路大納言樣、本多美濃守樣ニ御逢有之、御茶・多葉粉盆・御火鉢・御菓子・御燒飯・御煮染差上之、七時過、御歸被遊候、御出御歸共、御書院三之間迄、御送迎有之、

一九時過、黑羽二重御自紋御小袖・麻御上下被爲 召、於御書院、傳奏衆廣橋前大納言樣・東坊城大納言樣、議奏前久我大納言樣・德大寺大納言樣・萬里小路大納言樣、本多美濃守樣ニ御逢有之、御茶・多葉粉盆・御火鉢・御菓子・御燒飯・御煮染差上之、七時過、御歸被遊候、御出御歸共、御書院三之間迄、御送迎有之、

一七時過、又候、川路左衛門尉様初、御役人様方に御逢有之、

〔川路聖謨都日記〕○宮内省圖書寮所藏本

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

十一日（二月）　晴　傳　奏廣橋前大納言東坊城前大納言議　奏久我大納言万里小路大納言徳大寺大納言備中守殿に被參候間。罷越申候。右之人々所司代本多美濃守殿幷備中守殿列坐之御席へ。左衛門尉幷御目付岩瀬肥後守罷出候る。西洋之様子等委細よ。詳よ申上る○昨日井上信州（清直、下田奉行）ゟ御用狀幷日記來る。江戸表相替候義無之旨承候る安心。○亞墨官吏腐敗熱ニ付相用候。カストリニムといふ藥。一兩目百兩位之由。驚申候。曾るきく。カストリニムと。海獸よそ。其藥效と麝香よ同一きものよそ。熱病之大妙藥のよー。ニムとへ花とう。あふらとのいふとよハあらぬ○わを　公方様之　御前へ。御三代共よ罷出。度々御用相勤。宮門跡公家衆御三家御三卿國持大名と。御用談をいさー。其上阿蘭魯西亞アメリカ等迄と談一事いさー申候。此上と

禁裡様ニ　御直話おきのミ。

〔中山忠能手記〕○宮内省圖書寮所藏本　中山忠能履歷資料所藏

二月十一日、兩役、堀田旅亭へ行向、一件（米國條約）被談合、事々於關東決着、必竟屆之次第之旨、公純

兩役堀田ノ旅館ニ赴ク

川路聖謨堀田ノ旅館ニ赴ク

卿內話也、（川路・津田ナト頗演舌、各昨日、自午半酉前ニ至、談合、主人向ヘハ、切飯煮メ差出旨也、信醉無術體也ト云々、恭光卿、依當番、不行向云々、）

二月十一日、行向兩卿、建通・公純・正房等卿、

〔森泰次郎書翰〕○昨夢紀事所載

○上略、十一日、備中守殿御旅館本能寺へ兩傳奏衆被參候ニ付、上京役々御附衆とも被相詰、八つ半時比、議奏衆久我殿・徳大寺殿・萬里小路殿被相越、此日は少々論談御坐候哉、參議已上之見込書類も、傳奏ゟ被差廻候旨、何れも強き見込之趣、此日は左衛門尉殿・肥後守殿御兩人は御席へ罷出、御尋之儀御答御座候由、○中略、

二月十三日

小石川様

尊下

森　泰次郎拜復

川路岩瀬兩人傳奏議奏ノ質問ニ答辯ス

〔徳島藩主蜂須賀齊裕建議書〕○維新史料編纂會所藏本　上野氏記錄所載

徳島藩主蜂須賀齊裕（阿波守）京都旁近ノ開港ヲ憂ヘ、率先シテ禁裏守護ノ任ニ當ランコトヲ、前關白鷹司政通ニ上書ス。

午恐內密奉申上候、今般林大學頭・津田半三郎引續堀田備中守上京、亞國條約之個條、其餘

之事共、具ニ入

叡聞候事と奉存候、近來不容易之時勢ニ推移、方今別ゐ不穩、既ニ今般之次第ニ相至り候、乍恐被爲惱

宸襟

叡慮之御程、如何可被爲　在候哉ゑ、誠ニ以奉恐入候、實ニ今般之件々不容易御大事ゑ奉存候、此儘ニゐゑ往々日本之御爲如何御座候哉と奉懸念候、屢外夷之變化形勢熟慮愚考仕居候ゐ、只今迄斯共不申上候得とも、就中、方今臨深履薄氷之世態ニ相及ひ、諸夷皇居近ゎ海岸を望候事情ニ相至、誠ニ以御大事、無此上危急之場ニ相迫り、乍恐　御案思奉申上、日夜寢食不安苦慮痛心仕罷在、万一非常之節と、爲警固軍勢爲差登、愈及騷亂候得と上京仕、

禁裏奉守護、列侯ニ先立、粉骨碎身（イナシ）之微忠相盡候心底ニ罷在候、誠恐多事ニゑ候得とも、聊ニゐゑ

宸襟御安堵之場ニ被爲　成候樣奉專念候、依ゐ赤心報國之存慮（イ慕）極密奉申上候、誠恐頓首謹言、

午二月十一日

松平阿波守齊裕

薄氷ヲ履ムノ世態

非常ノ節ハ兵ヲ出シテ京都ノ防衛ニ當ラン

鷹　太　閤樣

別紙、内密奉申上候如本書、今般之件々、殿下嘸々不一方御配慮被爲成候御義ト奉察候、將又私義度々幕府ニ上書仕、閣老にも存寄申上候得共、更ニ御採用無之、最早諫爭之道絕果歎息仕罷在候、且是迄ゑ、不容易之事ニ付、存慮奉申上候義無御座候得共、差扣居候場合ニ無御座、乍恐天下之御安危、此一擧ニ在（イ有）之御事ニ奉存候間、此義殿下ニ申上、寶祚長久、四民（イ兆）安寧、外夷威服之　御所置被　仰出候樣奉希望候、此段極密奉申上候、頓首謹言、

午二月十一日

松平阿波守齊裕

鷹　太　閤樣

幕閣ニ上書スレドモ用ヒラレズ

幕府ヲ措テ直ニ天朝ニ忠ヲ盡サントス

〔邊彊雜纂〕（安政四年十二月二十七日ノ條參照）○公爵鍋川圀順所藏本

一阿波侯、昨年幕府へ之呈書ハ、貿易等之事もあり、然ルニ、當二月十一日、鷹司公へ之呈書を見るニハ、是迄　幕府へ色々申立ゐれ共、更ニ採用も無之候故、是迄默止居候へ共、此度堀田等罷登、如何之事を申上候や、實ニ不堪痛心、此上有事之時ハ、直ニ警固人數指出可申、出馬も可仕との文意ニて、　幕府を置て、直ニ　天朝ニ忠を盡之意氣組ニて、本末を失へりと、或人語りき、

（伏見宮侍御牧家諸留　王政維新紀聞　橋本左内全集）

十三日己未　武家傳奏廣橋光成（前權大納言）・同東坊城聰長（前權大納言）・議奏萬里小路正房（權大

堀田正睦傳奏議奏ト會談ス

納言再ビ老中堀田正睦（備中守）ノ旅館ニ赴キ、外交事情ニ就キ質疑應答ス。

〔徳大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

二月十二日、晴、○中略、

一明日、午後早々、老中旅宅、今一應行向、言上面會致旨備中守申越由、附武士、武傳へ申旨被示、万里小路亭集會申合了、

十三日、晴、

一行向、臨期依所勞不參訖、万里小路一人被行向訖、

〔佐倉藩戊午年集〕○伯爵堀田正恒所藏本

二月十三日、雨、

一例剋　御目覺、

一四時過、繼御上下被爲　召、於御書院、御掛り御役人様方に御逢有之、

一九時過、黑羽二重御自紋御小袖・麻御上下被爲　召、本多美濃守様に御逢有之、引續傳奏衆廣橋前大納言様・東坊城大納言様、議奏衆萬里小路大納言様に御逢有之、御茶・煙草粉盆・御火鉢・御菓子・御燒飯・御煮染差上之、七時過、御歸被遊候、御送迎例之通、

一引續御掛り御役人様方へ、御逢有之、

傳奏議奏ノ質疑ニ應答ス

老中以下ノ京都淹留ハ不可

〔川路聖謨都日記〕○宮内省圖書寮所藏本

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

（二月）十三日　雨　傳　奏議　奏に。懸御目度義有之。備中守殿御旅亭に罷出候る。面謁。東坊城前大納言殿廣嶋（橋ノ誤）大納言殿德大寺大納言殿被參候。德大寺ゟ尋之品有之候る。夫々及辯論候○中略、

十五日　晴　例刻ゟ備中守殿御旅亭に罷出候。御用向いまさいつまらも。相決不申候。此節初る公事人共ゟ。長く留置候事之よるらぬわけ。相分ま申候。一日百日乃まとー。何も大切之御用まそ。歸情之切なるまハあらほ。いろ〳〵とおもひ候る。夫ゟそうまハ之○下略、

〔中山忠能手記〕○宮内省圖書寮所藏本　中山忠能履歷資料所載

二月十三日、又兩役行向本能寺云々、

同日、予不堪愁憂、送内書（下ニ載ス）於公純卿、

二月十三日、兩卿・正房卿、建通公純等臨期不參、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記　宮内省圖書寮所藏本

二月十三日、降雨、

使ヲ堀田ノ旅館ニ遣シ物ヲ贈ル

外國事情ノ大略

安政五年二月十三日

一老中堀田備中守就御用談上京逗留中、爲安否尋問、旅館寺町本能寺江小林右馬允使者麻上下云々、

干鯛　一箱　末廣妻紅　一本箱入（緒眞田紐萠木）

竪目六添、自當家一同遣、目六名當ナシ云々、

代々彼家々臣、當家門弟、去九日、參内之節門弟衣紋奉仕云々、家僕左番長爲檢知、施藥院江行向、件由緒ニ付、去十一日、紗綾三卷、干鯛五枚一臺、自先方贈、旁家公遣給云々、是當家依先例之、他大名城使等上京之節家來ニ有門弟如之云々、○中略、

傳聞、今日、武傳幷議奏三人、久我・德大寺・万里小路等云々、老中旅館江、依御用談行向云々、

〔老中堀田正睦覺書〕○伯爵橋本實潁所藏本外國處置雜誌所載

○二月十三日武家傳奏へ

安政五年二月十三日、書取、

（表紙）「去十一日兩役行向于堀田備中守

旅館之節備中守川路左衞門尉岩

瀨肥後守演舌之書取」（イ趣）

近時（イ年）外國追々相開き、器械軍器等ニ至ル迄、追年精密發明致候段ゝ、一昨（イ一昨日）十一日、荒增申上候通之次第ニ候得共、右ゝ緊要之儀ニも無之候ニ付、文略仕、當今外國事情の大略の

世界各國和親通商漸ク盛ナリ

日本ハ米國ヨリ支那歐洲ヘノ通路ニ當ル

天保十四年ノ和蘭風說書

ミ左ニ相認候、

一三四十年前より、歐羅巴諸州の亂追々治り、諸民治平の業を營み候趣意にて、交易太盛ニ相成、五大州悉く交易和親の盟約をなし候勢に相成、是迄廣く夷人ニ（イと）交不申漢土ニゐ及、諸國と條約等相定、琉球國も、佛良西・英咭利・亞墨利加等の國々ゝ、條約取結候事、

一亞墨利加新世界開き、先年英咭利と戰ひ、自立仕候已來、日本の海、亞米利加より歐羅巴諸國漢土等へ之通路と（イニ）相成候事、

一天保十四卯年、和蘭陀國王（イ王ナシ）より、長崎表に使節差越し、書翰を捧き、品々御國之御爲を御忠告仕候趣申出、其節書翰中之大意、

和蘭陀ゝ、國初已來格別之御恩遇を蒙り候ニ付、御國ニ對候ゐ、甚愛情深く（イ厚）、御國ニ安寧ならん事を忠告奉り候義、御用有之候樣との趣、

支那帝無益之防戰をなし、遂ニ和親を行ふに及て、大ニ政法を改め、港を開候趣、

英咭利人交易を求る情甚切（イ切也）、夫より爭戰ニも及候事ニ有之、支那國則右より起り候戰爭之趣、

御國この禍近く及可申、依之御國之爲に、此禍を除申度至願仕候ゝ、貳百年來之御恩（イ惠）ニ報候爲之趣、

安政五年二月十三日

蘭國甲比丹「クルチウス」渡來

露人「ロタノスケ」等ノ唐太居住

露使「プチヤーチン」ノ來航

米使「ペリー」ノ渡來

孤立して他ニ交らさる國ニ、仇を万國ニ結ひ候趣、

異國人ニ對するの御法(イ御國法)を寛ニ被成、兵亂之荒敗無之樣、誠意御そゝめ申上候趣(イ候との趣)、

一其後嘉永五子年、尚又咬嚠吧都督(イ提)より書翰差出、通商御許、外國御扱振御變革無之候ゐ
ニ、御國之御爲ニ不相成候段申立、若御變革も被成候ハヽ、御相談出來候人物相撰さし
越候旨ニて、ドンクル・キユルシユスと申、甲比丹差渡し候事、

一同六丑年、魯西亞人ボツサイ・ロタノスケ外三十人餘、北蝦夷地唐太島クシユンコタン
へ(イニ於ニ)、假砦取建住居仕候事、

此者共、翌寅年五月中、引拂候事、

一同年、魯西亞國の使節プーチヤーチン長崎ニ渡來、書翰差出、右書中之大意ニ、向後魯西
亞与日本与爭ひを生し、怨みを結ひ候等之義無之爲、兩國和睦安穩の基を定め申度、就
ゐニ、北地の界を定め、且以後魯西亞人御國の港ニ來、所用を辨し候義、幷當時世界色々
變化致候ニ付、御國之御形勢も如何可有之哉、此末甚案事申上候趣申出、

一同年、亞墨利加使節ペルリ浦賀ニ渡來、大統領之書翰差出、右書翰之大意、御國と交を通
し候を相望、且世界之情態、萬國之政事、追々古例致改革、新法ニ換(イリ)へ候時節、御國ニゐ
も、交易御開肝要之旨申上候事、

宇内ノ形勢ハ鎖國ヲ許サズ

「ペリー」再度ノ來航

英人「ステルリング」トノ條約締結

「プチヤーチン」下田ニ來ル

一其節ペルリよ〻差出候書翰之中、鎖國之御法、古へハ可然御良法ニ可有之候得共、只今
ニ相成候ゐニ、世界形勢改り候事故、古例之御掟、今より決ゐ御固守被成候義ニ難立行(イ被)、
且此度申立候(イ之)趣、御國御大切之義ニ付、御役人中、國家長久之御評議、御手落ゐく(イ無之)樣可有
之、來三月、御答可承旨ニて、退帆仕候事、

一蘭人持越候レイソン・ヤツパンの中ニ、右ペルリ日本渡來已前、是非とも相開き候趣(イ樣)之
檄文、諸國へ兼ゐ觸有之候由、幷ニ亞墨利加より手を下し、日本も追々開き可申趣等認
有之候事、

一翌寅年、ペルリ數艘之軍艦・蒸氣船相率候ゐ、神奈川へ渡來、忽ち戰爭ニも可及樣子も有
之候處、追々之應接ニて、事情も相通し、横濱・下田ニ於て、條約取結ニ相成候事、

ペルリ歸帆之節、言葉を殘し、此度ニ此通りニて調ひ候得共、此御取扱ニてハ、永續仕
難き趣申聞、且書面をも差置候事、

一同年、於長崎、英咭利ステルリンク條約爲取替候事、

此條約、同國政府ニ於て不承知之趣、其後蘭人風聞申聞、その後同所へ渡來之英咭利
船の船將も、不承知申居、佛郎西ニても、不服之由ニ有之候事、

一同年、プーチヤーチン大阪ニ入津、夫より下田ニ渡來、條約取結ひ候事、

米人「アダムス」下田ニ來ル

下田ハ外船ノ碇泊ニ不可

米人「ロッテール」下田ニ來ル

獨逸人佛蘭西人下田ニ來ル

和蘭領事ノ忠告書

一同年、亞墨利加人アーダムス、條約本書爲取替のため、下田ゟ渡來致し候事、

一安政二卯年より、亞米利加人時々下田ゟ滯留致し、且又下田・箱舘へ渡來之亞墨利加・魯西亞・和蘭陀人とも、同港ゟ波當り強く、滯船等ゟ不宜場所之趣、何レも申居候事、

一亞墨利加測量船提督ジョン・ロッテール下田ニ渡來、品々夷人御扱振之儀、此姿にてハ、御國之爲不相成段申出、メキシコの事等申出、書面兩度迄差出候事、

一ドイツ人にて、亞墨利加人別ニ入り參候リットルフより、下田にて差出、一ツハ、箱舘渡來佛良西人孟海雷と申者、下田ニ渡來仕候事、

一英咭利に

神祖より、交易

御許之御朱印寫、銅板ニ致し持渡候事、

右ゟ、大小貳通り有之、一ツハ、前書リットルフより

之英咭利船より差出候事、

一和蘭領事官より、猶又御忠告申上候書面中之大意、

和蘭陀國にゐも、時勢の變を見透し、其模樣ニ應し、御國法御改革之義、度々實意を以、御勸申上候事、

外國ノ希望ニ應ジ通商ヲ許スベシ

通商ヲ拒マバ戰起ラン

米使「ハリス」下田ニ渡來

蘭人「フアビユス」長崎ニ渡來

外國より和親の條約望ゟの者へハ、寬優ゟ交易出來候樣、御許可有之候事、

鎖國之御法ゟ、最早御永續ニハ、迚も相成不申候事、

御國にゐも、此已後ニも御拒み御座候ハヽ、數ヶ國一統と御戰ひ可相成、和蘭政府にて、

聢ゟ見究居候事、

御國にゐも、西洋同樣之御所置有之、可然との事、

一其後仲買商法と名ゟ參候交易之儀御勸め申上、猶又交易筋、外國人御扱筋之儀、度々申出、書面にても申立候事、

一亞米利加人ハルリス下田ゟ渡來、大統領之書翰持參、大統領より申含め候趣も有之、御老中へ御直ニ無之候ゐゝと、御渡不申、右申含之趣、且英咭利人ボーリング申聞候趣等、於江戸、御老中へ御直ニ可申上旨、再應申聞、其後引續右之趣意申立居、品々應接有之候得とも、一切事柄不申聞、出府之儀のミ申立居候事、

一同年、和蘭陀蒸氣船の船將フハービス、長崎ゟ渡來、御制度御改有之候樣、品々申立、英吉利人ボーリング何も長崎奉行に其段申通し置度との傳言等申出、其後右船將箱舘へ廻り、夫より下田ゟ渡來、於同所も、外國人御扱振之儀、夫々申立候事、

安政五年二月十三日

安政五年二月十三日

其後支那及ひ印度之爭亂ニ乘、英吉利人ボーリング渡來延引致候趣、渡來之船々噂有之候事、

英吉利評判記 寛猛二道

一同年、英吉利評判記ニ、日本追々相開キ候得とも、尚西洋人の交りを廣め候ま、寛猛二道有之、もし嫌拒み候ハヽ、無理を以て破るへし、或ハ自ら悟るを待へし、遲々する時ハ、初之法を可用趣有之、

英人ノ請ヲ拒マバ北邊ニ寇セン

一箱舘表ニて、亞米利加人物語之内、英船渡來之上、申立之條御取用無之候ハヽ、速ニ兵威を以て、無人の境より手を下すへき由、申唱へ居候趣、申聞候事、

一同所幷下田へ渡來之外國船、度々申聞候ま、御國ニて、兎角究屈之御取扱御改無之候ハ、軍船(イクサ)差向之催し有之をも不知杯嘲り居候事、

戰敗レテ國ヲ開クハ支那ト「メキシコ」ノ例アリ

一昨巳年、唐船持越候英吉利人漢文之著述地理余志中、亞米利加人御國を開候見込拒む時ハ、戰爭ニ可及旨、認有之候事、

米國領事書翰ノ趣意

一近時、他國与和親之上、猶彼是究屈の仕向のミいたし、遂ニ戰爭ニ相成、敗北之上、和親致候國ハ、漢土・メキシコ等ニ有之候事、

一亞米利加コンシュルより、度々書翰差出候趣意之大凡ハ、御國當今大災ま臨み居候義ま、合衆國よりハ起り不申、他より起り可申、是を御防、御安全之法、大統領ゟ御忠告之趣意、早々申述度、尤江戸へ罷出候ハ、自國之船渡來之節、海路より罷出候得(イハヽ)ま、容易ニ候得とも、人民騷擾も可致ニ付、御支度宜比、一兩人召連レ候ま可罷出、ボーリング御國の事ニ付、思ひ企候(イノ)事も、委細承候間、其節可申立旨、且又大統領格別懇切之存意ニて、書翰等をも差出候趣、快らさる御扱方ニ付ま、右之振合ニま、本國よりも取計候儀与奉存候、其事ハ難申事ゟら、大統領の譽(ホマレ)を不失丈ケ之取計ま、無疑可致趣等、操(ミサヲ)返し度々書翰差出し候事、

防備ノタメナラバ米國ハ大砲五百挺ヲ提供セン

一亞米利加ハ、御國与既ニ和親も整ひ居候事ニ付、御固筋等御手薄ニてハ、御爲不宜候間、若大炮等御入用ニ候ハヽ、只今有合之内、大炮五百挺ハ、只今ニまも御沙汰次第、取寄差上可申、其餘ま御調(イ誂ニ)無之候まハ、急々辨し不申候得とも、差向御入用も候ハヽ、前書挺數丈ハ、差出し可申趣、度々申聞候事、

通商ヲ拒マバ各國皆其國ヲ敵トセン

一和親交易を拒み候國ま、同盟力を合せ、其國を仇讐と致候事、萬國之申合ニて、遂ニ交易普く諸國ニ及候樣押移り、既ニ漢土ニまも、最前英咭利と爭端相發し候處、佛良西人夥敷援兵を出し候事、

露土戰爭

一昨年迄、魯西亞トルコ戰爭之節ハ、佛良西・英咭利・獨逸援兵を出し候、獨逸國より手傳ひ候兵ま、五十九万餘、大炮を同國より出し候數ま、六十八万六千挺と、卯年新聞紙ニ有

安政五年二月十三日

支那トノ條約ハ歐洲各國相互間ノモノト體裁ヲ異ニス

外國人ノ言虛喝ノミニ非ズ

之候事、

諸國條約之內、

漢土与英咭利、　亞米利加、　佛良西、

暹羅与英咭利、　亞米利加但、兩度、

魯西亞与亞米利加、

英咭利与亞墨利加、

佛良西与亞墨利加、

右之分、追々御國ニゐて、飜譯も出來候樣相成候處、萬國共、皆大凡同樣之振合ニ相見へ候、漢土之條約て、歐羅巴國人互之條約与、体裁少々異り居候、尤昨冬比、又々新規條約ニ可及哉之趣相聞申候、

過日、演舌之大意、右之通ニ御座候、元來西洋人共、虛喝も有之候得共、追々對話を遂ケ、其外書籍、又て蘭人差出候風說書、幷持渡之器械、其外實地經驗合考仕候得共(イて)、强ち虛喝のミニも無之段、追々相分り、最初ハ不承知之人々も、次第ニ發明いさし、鎖國不相成義、會得いさし候義、此節ハ十ま八九ニ相成候義ニ御座候、前文相認候義て、西洋人申聞候趣(イ處)を、一概ま取用候譯ニてま無御座、先ツ夷人とも追々之移りを其儘申上候通り相認候事、

堀田ノ旅館ニ於ケル問答

齊昭ヨリ太閤ヘノ書翰寫ヲ示ス

幕府不當ノ處置ヲ捨テ朝議叡慮ニヨリ決スベシ

〔中山忠能書翰〕○中山忠能覆歷資料所載

（聞集錄　上野氏記錄　正親町家記）

○二月十三日德大寺公純宛

彌御安全令賀候、抑昨日、於省中拜面畏入候、極內々御噂、一昨日、堀田亭御行向、御問答之振合、事々關東決定、京都へは屆同斷之趣、昨日、御兩役御前之御樣子如何御時宜に相成候哉、何卒先日御內定之　御沙汰通に相成候樣、內々心中祈居候事に候、昨夜も、大掛念實は安睡も不仕、唯長歎息之至に候、此は水戶昨年太閤殿へ進上之書中とやらにて寫置候、眞僞は不存候へ共、至極理を盡し明斷に有之候、此上萬々一關東申立之通などゝ申す御時宜に成行候共、せめては此文中、全々幕府諸役人共の所爲にて、　朝廷には決して其思召に無之と申候へは、天下有志之大小名始め、一同憤發恢復之期も可有之云々、此趣位は、天下へはきと分り候樣不相成候ては、實に〳〵　神州の大瑕瑾大耻辱無申條事に候、委細之次第言上被聞召候今に至り候ては、關東にて不當の所置は被捨置、於　朝廷は、增鏡弘安四、の叡慮に不被爲在候ては、實に〳〵

伊勢幷　神武帝へ　被對、乍恐被　仰譯も難被爲在哉、附ては、於臣下も夫々祖神へ申譯も難相立事と存候、如下官非其職越樽千萬其罪過當死候へ共、如此重大之國難不堪閉口不顧

恐申上候、尤從來御懇意に付申上候、御役外御聞取可給候也、

二月十三日

忠　能

德大寺亞槐公

追申、護王大明神々魂、更奉感佩候也、

〔徳大寺公純書翰〕○中山忠能履歴資料所載

○二月十三日中山忠能宛

拜見、如貴命春澤潤色候、御淸康恐悦不斜候、然は、御細書之旨、何も敬承候、誠以御精忠之儀、感心候、乍不及事、公三等も御同意之事に候、兎角姑息に相成、且又御返翰之處も、平穩に可相濟哉と、唯々困心仕居候、別紙御寫拜見畏入候、十一月十九日江戸書狀寫、いまた一覽も不仕候、心得に相成辱存候、乍不及事誠重大に候間、力のかぎりは可盡精忠と存候、水戸先日の書狀には、甚々如何敷候へ共、全々以一橋、當正月元日に强諫故、無餘儀外見承諾の事に候、中心悦服と申場合にはとんと〳〵〳〵不參申、外尾州始も、全先達來の見込に少しも相替候儀無之旨に候、昨日も、御對面有之候へ共、武傳も同席不能、委曲遺憾の事に候、今日も、今一應一昨日輩面談申來、無程行向候事に候、何分にも大重事、神州の瑕

瑾、當　御代より相始候ては、一同も恐入候事は、誠に〳〵御心附御力を被添候段、感佩仕候事に候、尙又委曲心事、拜上と申殘候、無程出行已前大に亂書、眞平可蒙仁免候、任御篤諭、打明申入候、觸忌諱候事も有之候、堅固御莫言希入候、御覽後御投火、偏に〳〵願入候、自餘は、屬後鴻候也、

二月十三日

追申、御寫一帋は、極密々々拜借希入置候也、

公　純

內答

〔目付鵜殿長鋭書翰〕○昨夢紀事所載

○二月二十四日福井藩主松平慶永宛

別啓御秘見、

從　京地飛脚到來仕候段入　御聽、御配慮被遊候旨蒙仰、御尤至極之御儀奉存上候、十一日・十三日、備中守殿寄宿所に、傳奏衆・議奏衆被行向、委細之內咄有之候由、未叡慮等之趣は難相分候得共、衆議區々之樣子ニゐる、折合方も如何有之哉之由、且土地風聞之趣申越候、右は同肥後守（目付岩瀨忠震）よりの書狀、十九日夕、私方迄相達候迄ニゐる、備中守殿ゟ被申越候儀ニは無御坐候、其餘奉申上度候得共、認取兼、且は差向可奉申上候義も無御坐候間、廿

薩ノ趣意顯ハル

堀田ノ滯京ハ長引クベシ

朝廷ハ列侯ノ一致ヲ望ム

條約ニ關シ今迄叡聞ニ達セザルハ失禮

九條鷹司兩卿ニ關スル落首

八日、拜謁之刻可奉啓上候、薩州之趣意、聊其兆相顯候儀も御坐候、是は極内々奉申上候、

謹言、

民部少輔

廿四日

〔森泰次郎書翰〕○昨夢紀事所載

○上略、今十三日、亦々本能寺へ御寄合、傳奏衆其外とも御越之趣、今日如何御坐候哉、孰れにも御用濟は御見込なも御手間取と被存候、但御内々

天氣にも相協不申儀下說仕候、中〳〵大御變革之事故、當表ニゐハ詰る處、列侯共ニ一致いたし、衆議多分人心居合之場合ニ至候得ハ、御存寄も無之旨、御返答御座候樣子ニ内々承知仕候、列侯之内にも當表へ書面差出候向も有之由仙臺・水府・佐賀・土浦抔、と申事、且又條約文中其外、是迄逸々

叡聞に達不申廉等、悉嚴ニ御尋相成候ゐハ、御手落も可有御坐樣子ニ風聞仕候、最初此地にても九條關白殿・鷹司太閤殿、御二方御見込異同有之、既ニ其風聞頻ニゐゐ、落首

世の中は、欲と信との堺町、

ひかしはあつま、西は九重、

堺町御門内、東側鷹司殿、西側九條殿、

三條久我卿等ノ評判

議論ハ時期既ニ遲シ

然ル處、終ニハ東西共同意御一決と承候得共、此末如何相成候哉、兎ニ角御骨折之事と存候、兎ニ角此儀相整候上ハ、其御職之御方々不容易事と奉存候、當表ニゐも、三條内府殿・久我大納言殿・萬里小路權大納言殿・東坊城前大納言殿抔ハ、御評判御宜敷御方々ニ御坐候、存外上方者も根張り强き事故、理屈合計りにてハ如何御坐候哉と、愚昧にも奉恐入、只々、

關東の御威光相立候樣、私共にハ晝夜奉祈候、夫と申も安永度御改正後、一際御威光相立候得共、此度之樣成儀ハ、關東御見込御打返し相成、卷返シ抔と申事ニゐハ、私共御役威にも拘り候儀ニ御座候、此儀ハ纔御附衆私共已而之事ニ御坐候、其外へも響候得共、差向當役ハ別る之事ニ御坐候、誠ニ以不及事、天下之御大事と場合(ニノ下由脫カ)候へとも、少々跡之祭り之御論議ニ相成、先方ハ最早安心之處、當方已而被仰譯も吳々奉恐入候儀ニ御坐候、右之通とも奉存候得共、迚も愚昧の私共可論儀ニハ決ゐ無之、斯迄も御心配相懸候夷賊打惱候方可有御坐哉抔と工風仕候得共、更ニ能き勘辨も無御坐、先ツ以御蔭當御役丈ケ之勤ハ、漸勤續罷在候、此表相應之御用向被命可被下候、至(イタ)る二更およひ候儀、亂書失敬之段、偏ニ御用捨奉願候、右之段御請旁奉申上候、以上、

二月十三日

森泰次郎拜復

小石川様尊下

十四日庚申 春日祭。

〔議奏裏松恭光通達〕○内閣記錄課所藏本 武家書翰往來所載

春日祭神事

○二月八日禁裏附大久保忠良等へ

就來十四日 春日祭、從十二日晚、到十五日朝、 御神事候、仍爲心得申入候、以上、

二月八日　　裏松大藏(恭光)卿

大久保大隅守(忠良)殿

都筑駿(峻重)河守殿

〔議奏裏松恭光通達〕○武家書翰 往來所載

春日祭ノ上卿辨奉行職事

○二月八日禁裏附大久保忠良等へ

春日祭、

上卿 坊城中納言(俊克)　辨 萬里小路辨博房　奉行職事 葉室頭辨(長順)

右之通被 仰出候、仍爲心得申入候、以上、

二月八日　　裏松大藏卿

大久保大隅守殿

都筑駿河守殿

〔公卿補任〕

二月十四日、春日祭、上卿坊城中納言、辨左少辨博房(萬里小路)、奉行長順(葉室)朝臣、

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

二月十四日、庚申、晴、議奏當番德大寺大納言(公純)殿、傳奏兩卿參侍、○中略、

〔非藏人日記坤〕○東京帝國大學所藏本

一春日祭也、上卿坊城中納言俊克卿、辨萬里小路博房等參向也、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

二月十四日、庚申、晴、議奏當番德大寺大納言殿、宿替久我大納言殿、傳奏參侍、

一春日祭也、○下略、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

二月十四日、庚申、晴、今日雖當番、日來風邪于今不快之間不參、今日春日祭之、上卿坊城中納言俊克、辨博房等參向奉行、但、相當去二日、而依儀法講ニヨリ延引、

儀法講ニヨリ延引

〔德大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

二月十四日、晴、

一春日祭也、羽林(實明)令參詣畢、○中略、

安政五年二月十四日

一宿久我參勤令退出訖、于時戌斜、

一沐浴降庭中、拜　春日大明神訖、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記　宮内省圖書寮所藏本

二月九日、晴、○中略、

一廻文到來、○中略、

就來十四日

春日祭、從十二日晚、到十五日朝、御神事候、御相番中、且小番未被相勤親族中江茂、可被示傳候也、

忠禮

二月八日

公績

右被觸候、仍申入候、御廻覽可返給候也、

同日

——山科三位殿承候——勘ヶ由小路江順達了、○中略、

十四日、晴、庚申、

今日　春日祭之、去二日依懺法講、今日被行云々、上卿坊城中納言、俊克、辨左少辨博房云々、

家內清間棚　春日神々供々進了、

〔平田職修日記〕○宮内省圖書寮所藏本

二月十日、○中略、

一武傳廣橋家ゟ(光成)、春日祭御神事觸壹通到來候ゝ、

十一日、○中略、

一春日祭御神事、三坊主釜殿江、如例申遣也、

十四日、○中略、

一今日春日祭、上卿坊城中納言俊克卿、辨万里小路左少辨博房、奉行葉室頭辨長順朝臣也、

〔中御門經之日記〕○侯爵中御門經恭所藏本

二月十三日、未、雨、

一出門未刻計坊城へ行、黄門(俊克)　春日祭參向中留主見舞、○中略、

十四日、庚申、晴、

一參番例刻掛、萬里小路へ行向、辨參向中見舞申置了、

〔中山績子日記〕

二月十二日、

御き嫌御よし〳〵、○中略、御神事入、按察使典侍(廣橋胤子)ゟ、中將內侍(高野房子)ゟ手おしまてさからるゝ、

春日祭

十三日、

御き嫌御よし〳〵、別當(甘露寺尚子)のすけゐよへゟ頭つうけ今朝下り、春日まつり御丸火入、御をし行水毎之御通り、

十四日、

御き嫌御よし〳〵、春日まつり御當日、御かけ物せと物、敏宮ゟ御湯出來ゐれくれは、御あ物御をん上ゐし、和宮ゟ・祐宮ゟこゐたまて遊ハし進しのく、

下田奉行井上清直(信濃守)蘭國領事「クルチウス」Curtius ノ上府近キニ因リ、勅許ヲ竢ツテ速ニ日米假條約ニ調印スルノ要ヲ陳ジ、且米國總領事「ハリス」Harris ノ病臥中ニ於ケル調印ノ手續ニ就キ、指令ヲ幕府ニ請フ。

〔下田奉行井上清直伺書〕○宮内省圖書寮所藏本川路聖謨京都表御用留所載

○二月十四日老中松平忠固へ

(朱書)「午二月十四日、伊賀守殿ゟ御直進達、即日御覺書添御直御渡ニ付、承付いさし返上、伊賀守殿」○合原猪三郎筆記

書面伺之通可取計旨被仰渡、奉承知候、二月十四日　井上信濃守

「ハリス」大病全快ニハ日子ヲ要セン

英佛等ノ渡來ヲ恐ル

井上清直下田ニ出張シテ調印セン

岩瀨忠震調印ニ就テノ交渉

亞墨利加使節病氣ニ付假條約書爲取替等之儀奉伺候書付

井上信濃守

亞墨利加使節(ハリス)歸豆以來重病之趣ゟ、追々容體書等を以入御聽置、此程稍快方ニ趣候由ニゟ候得共、元來大病之儀、いまさ本復之見据も無之、快氣仕候共肥立方日數も相懸、兼ゐ使節見込之通再出府之儀、如何可有之哉、彼是時日押移候内、若英佛等渡來仕間敷共難申、其上和蘭領事官ゟ、去月廿五日頃長崎表出立仕趣ニ付、來三月中旬頃迄ニゟ出府ニも可相成哉、旁亞國假條約整居不申候ゐゟ、不都合之儀も出來可仕哉、依之勘辨仕候處、此上於京都御故障不被爲在候趣申越候ハヽ、其段中村出羽守方(時萬、下田奉行)に申遣、兼ゐ約定之通、使節再出府之上、双方假條約に調判可致處、病中之儀、急速出府等難義可仕筋ニ付、私儀下田表に出張仕、右調判可致旨、出羽守より使節へ相尋、別段存寄も無之候ハヽ、右之通取計候樣可仕候哉、尤岩瀨肥後守(忠震、目付)在京中ニゟ候得共、品ニ寄歸府延引可仕候儀も有之候ハヽ、同人ゟ和文條約に於彼地調判之上差越候積、兼ゐ使節に打合も仕置、肥後守花押ゟ兼ゐ申上置候右亞墨利加條約爲取替相濟候段、同國政府より魯英に可相達旨、同人私連名之書面に、肥後守出立前調判仕置候間、差向條約に致調判候儀も有之候節ゟ、前書調判を鑑ニ以ゐ一、於當地同人

居判と取計候旨申談置候間、於京都御故障不被爲在候ハヽ、備中守殿に伺之上、早便を以可申越旨、幷前書肥後守居判之儀、談判濟之通、於當地取計可申段、同人幷川路左衛門尉（聖謨、勘定奉行）へ申遣、彼地より申越次第、私儀條約持參下田表に出張仕、使節を爲取替相濟候ハヽ、去巳五月晦日伺濟期日ニも相成候義ニ付、直ゟ出羽守を交代仕、同人出府之節、右條約持參差上候樣可仕候哉、三奉行出府掛にも申談候處、同意ニ付此段奉伺候、以上、

午二月

覺

伺之通、可被取計候事、○合原猪三郎筆記

〔老中松平忠固等書翰〕○維新史料編纂會所藏本　伏見宮侍御牧家諸留所載

○二月十五日在京老中堀田正睦宛

二月十五日之次飛脚を遣之、

備中守殿を申遣候趣、

亞墨利加使節病氣罷在、假條約爲取替方之儀、（上二載ス）別紙之通井上信濃守相伺候間、伺之通取計候樣相達候、依之右寫一册、爲御心得進ー候、尤

勅答被　仰出候ハヽ、早速御申越可有之候とハ存候得共、前以信濃守ゟ、岩瀨肥後守へ打合置候方、都合も宜有之候間、旁信濃守伺之通、相達候事ニ候、勿論其御地之模樣相分り次第、其段信濃守可申聞、今般伺濟之通、爲取計候心得ニ候得共、此段爲念申進置候、以上、

二月十五日　　連名

堀田備中守樣

〔勘定奉行土岐朝昌等書翰〕○川路聖謨京都寓居所藏　裏御用留所載

○二月十五日勘定奉行川路聖謨等宛

以書狀致啓上候、然者、亞墨利加使節病氣先快方ニと趣候得とも、元來大病之義、いまゝ駸ゝ快氣之見留も無之、依之一同に談判之上、別紙之通、昨十四日、伊賀守殿に信濃守ゟ相伺候處、卽日伺之通可相心得旨、御直被　仰渡候間、右伺書寫差進申候、委細と書面まて御承知、夫々可然御取計有之候樣存候、右可得貴意如此御座候、以上、

井上信濃守　印

鵜殿民部少輔（長鋭、目付）　印

永井玄蕃頭（尚志、勘定奉行）　印

土岐攝津守　印

川路左衛門尉樣

岩瀨肥後守樣

安政五年二月十四日

老中指令

井上清直伺書ノ件

井上伺書ノ件ヲ報ズ

前掲書翰ニ對スル返翰

朝議確定セズ

井上ノ調印ハ延期スルヲ可トス

〔勘定奉行川路聖謨等書翰〕○川路聖謨京都表御用留所載

○二月十九日勘定奉行土岐朝昌等宛

御書狀致拜見候、然ゑ、亞米利加使節病氣先ツ快方ニて候得とも、重病之儀ニ付、いゑさ聢ゝ快氣之見留も無之故、御一同へ御談判之上、信濃守殿ゟ伊賀守殿に御伺被成候処、御伺之通被　仰渡候間、右寫被遣、可然可取計旨、御紙面之趣承知、御別紙をも一覽いゐ一候処、彼是時日押移り候内、若英佛等渡來之程も難計、其上和蘭領事官三月中旬頃、出府ニも可相成哉、旁亞國假條約整居不申候ゐて、不都合之義も出來可致哉ニ付、此上京都ニおゐて、御故障不被爲在候ハヽ、信濃守殿下田表へ御出張之上、御調判可被成旨、羽州ゟ使節に相尋、存寄無之候ハヽ、右之通御取計可有之哉、左候ハヽ、肥後守居判之儀て、御地ニおいて、御取計可被成候間、其段備中守殿へ伺之上、早便を以申進候樣、當方へ御申越可被成旨之御伺濟ニ有之、然ル處、一ト通り奏聞被爲濟候得共、堂上方評議も可有之哉、いゑさ聢ゟ之御挨拶も無之、此上御尋之廉々も有之候ハヽ、夫々條理被仰述候積り之備中守殿御含ニ候へ共、此方ゟ促ー候ゐて、不可然意味合も有之候間、中々前書之通、御取計振等可有之場合ニ無之、猶此上之模樣次第、御同人へも伺之上、可申進候へ共、御見込之趣て、先暫御見合有之候樣存候、右之段、備中守殿へも申上之上、御報旁可得御意、如此御座候、以上、

二月十九日

岩瀬肥後守

川路左衞門尉

土岐攝津守樣

永井玄蕃頭樣

鵜殿民部少輔樣

井上信濃守樣

京都ノ情勢ニヨリ井上正直下田ニ出張調印スベシ

〔老中松平忠固等書翰〕○東京帝國大學所藏本聞集錄所載

○二月二十一日在京老中堀田正睦宛

二月廿一日之次飛脚ニ、備中守へ申遣候趣、○伏見宮侍御牧家諸留

墨夷官吏病氣追々快、出府之儀申立候ニ付、右應接書等寫三冊爲御心得差進申候、尤同人病氣未タ聢ゟ快方ニ及無之義ニ付、其御地模樣次第、井上信濃守下田表に出張、條約爲取替候積、今一應爲及挨拶候筈ニ候、此段爲御心得申進候、已上、

二月廿一日

脇坂中務大輔（安宅、老中）

内藤紀伊守（信親、老中）

久世大和守（廣周、老中）

堀田備中守様　松平伊賀守

猶以、和蘭領事官出府取扱方差圖之趣相達候ニ付、十二月廿六日ゟ發足爲致候旨、長崎奉行申聞候、道中無滯候ハヽ、來月中旬頃、江戸表着可致旨、是又申聞候、此段も御心得迄ニ申進候、已上、

十五日辛酉幕府、目付一色邦之輔直温○後山城守ヲ堺奉行ト爲ス。（伏見宮侍御牧家諸留　堀口貞明筆記）

〔將軍申渡〕○内閣記錄課所藏本　安政年錄所載

○二月十五日一色邦之輔へ

二月十五日、

御座間

御目付

一色邦之輔

（温恭院殿御實紀　高麗環雜記　御城書海防部）

堺奉行　關出雲守跡

右於　御前被　仰付之、

〔松平忠固日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

二月十五日、○中略、

一色邦之輔ヲ堺奉行ト爲ス

一御座間御上段　御着坐、○中略、

御目付

一色邦之輔

堺奉行　關出雲守跡

右　御直ニ被　仰含、月番披露、（老中脇坂安宅）御取合等如例相濟、引、

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

三月十五日、

御白書院御勝手

御暇

堺奉行

一色邦之輔

金三枚　時服三羽織

右御禮、

〔安政年錄〕○内閣記錄課所藏本

三月十五日、

御白書院

御勝手ゟ

邦之輔ニ金ト時服羽織ヲ賜フ

金三枚
時服二
羽綾

〔溫恭院殿御實紀〕○續德川實紀所載
三月十五日、○中略、

銀三十枚
時服二
羽綾

〔松平忠固日記〕○子爵藤澤榮一所藏本
三月十五日、○中略、
一登　城五半ヒ二寸前、○中略、
一○中略、芙蓉間東之方列坐、山田奉行・堺奉行銘々拜領物御禮、一同々席、北之方ヲ月番上坐ニ列坐、

堺奉行
諸大夫被　仰付之、

御暇
堺奉行
初ゐ　一色邦之輔

御暇
堺奉行
初ゐ　一色邦之助（輔）

右月番申渡、○中略、畢ゐ月番ヲ外席有之、外ヲ引、々懸、中之間御張紙下、渡邊肥後守・一色邦之輔御禮、謁之、

〔安政年錄〕○內閣記錄課所藏本
三月十五日、

一色邦之輔
山城守ト改

右諸大夫被　仰付旨、於芙蓉間、老中列座、大和守（老中久世廣周）申渡之、

○溫恭院殿御實紀・高麗環雜記、三月十五日ノ條ニモ、同一內容ノ記事アリ。

〔安政年錄〕○內閣記錄課所藏本
四月朔日、

官位之御禮
堺奉行
一色山城守

銀馬代

小田原藩主大久保忠愨（加賀守）・烏山藩主大久保忠美（佐渡守）・館林藩主秋元志朝（但馬守）・安中藩主板倉勝殷（主計頭）・佐貫藩主阿部正恒（因幡守）・佐野藩主堀田正頌（攝津守）・一宮

大久保忠愨等歸藩ニ就キ登城謁見

藩主加納久宜（遠江守）・多古藩主久松勝行（豊後守）・牛久藩主山口弘敞（筑前守）・吹上藩主有馬氏郁（備後守）・大貫藩主井上正兼（伊豫守）就封ニ依リ各登營ス。又、萩藩支族吉川經幹（監物○後駿河守）參府ニ依リ、登營ス。

〔安政年錄〕○内閣記錄課所藏本

二月十五日、

一今巳上刻、御表ニ　出御、月次之御禮相濟、

御白書院

御暇

半年代

大久保加賀守（忠礼、小田原藩主）

同

同

秋元但馬守（志朝、館林藩主）

大久保佐渡守（忠栄、烏山藩主）

板倉主計頭（勝静、安中藩主）

初ゟ

阿部因幡守（正桓、佐貫藩主）

堀田攝津守（正頌、佐野藩主）

初ゟ

同

同

加納遠江守（久貞、一宮藩主）

松平豊後守（久松勝行、多古藩主）

山口筑後守（弘敞、牛久藩主）

有馬備後守（氏郁、吹上藩主）

井上伊豫守（正兼、大貫藩主）

○中略、

右畢ゟ　入御、

○溫恭院殿御實紀、二月十五日ノ條ニモ、同一内容ノ記事アリ。

〔松平忠固日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

安政五年二月十五日

二月十五日、〇中略、

一御白書院御上段　御着坐、月番被窺（老中、脇坂安宅）　御前、御奏者番并大目付へ會尺こゐ、月並御禮、四品以上一人宛、以下五人充、出禮相濟、御奏者番引、月番御柱際に被寄、尙亦被伺　御前、肝煎に會尺こゐ、御禮書之通、大久保加賀守始、順々出禮、御勝手言上、紀伊守殿（老中、内藤信親）こそ、見計御勝手に被相廻、御納戸搆着坐、大和殿（老中、久世廣周）こも見計、御納戸搆に被相廻、御勝手御禮、是亦御禮書之通相濟、若年寄ゟ會尺こゐ、紀伊守殿、鯉之御杉戸内に被入候ゟ、月番被立、中禮之上、御襖中務殿（脇坂安宅）・紀伊守殿被相勤、御下段に　立御、御次一同　御目見相濟、　入御被遊候ゟ、御襖被閉之、夫ゟ御襖之兩人、并御納戸搆着坐之大和殿こも被相越、黑鷲御杉戸際一同列居、溜詰恐悅申上、自分ゟ挨拶畢ゐ退去、月番そ大廊下こゐ、尾張殿・紀伊殿當日之使者被謁、夫ゟ雁之間秋元但馬守・大久保佐渡守・板倉主計頭・阿部因幡守御禮謁、夫ゟ芙蓉間東之方列座、〇中略、引懸ヶ、中之間加納遠江守御禮謁、

〔安政年錄〕〇内閣記錄課所藏本

二月廿五日、

一種　大久保加賀守使者　有馬兵馬

右、在所到着ニ付、爲御禮差上之、於檜之間、謁中務大輔、

〔溫恭院殿御實紀〕〇續德川實紀所載

二月廿五日、

一干鯛　大久保加賀守

右、在所到着に付、爲御禮、以使者差上之、謁中務大輔、

〔安政年錄〕〇内閣記錄課所藏本

二月十五日、

一今巳上刻、御表に　出御、月次之御禮相濟、

御白書院

參上　吉川監物（經幹、萩藩支族）

吉川經幹參府ニヨリ登城謁見

綿二十把　金馬代

〇中略、

右畢ゐ　入御、

〔毛利敬親事蹟〕〇公爵毛利家編輯所所藏本

安政五年二月十五日　三四七

二月十五日、吉川監物事出府相願、過十日當着、今日登城、拜謁如舊格相濟候ニ付、留守居役を以、老中迄及挨拶候事、

○附　錄

〔萩藩達〕○防長回天史所載

○二月二十三日藩士へ

此度吉川監物出府に付、當御屋敷被罷出候節、出會面々、且彼屋敷へ御下り之節、御供並出勤面々、下々に到迄、別て相愼、少も不作法之儀無之樣、假令如何樣之仕向有之候共、其儀に應じ穩便之心得肝要に候、自然其筋に不相叶儀、又は先例相違之儀有之候共、於其場は何分之不及回答、罷歸候上、可被申出候、若不心得之者於有之は、屹度御咎被仰付候條、下々へも重疊手堅く可申付候事、

萩藩主毛利慶親大膳大夫位階昇進ヲ藩士ニ告ゲ、益儉素ヲ旨トシ、文武ニ精勵スベキヲ諭ス。

〔萩藩家老達〕○公爵毛利家編輯所所藏本　忠正公實錄所載

○二月十五日藩士へ

（安政四年十二月十六日）舊臘

二月十五日、家老とも含を以、左之通、家來中ゟ申聞せ候事。○毛利敬親事蹟

殿樣御位階御昇進被成候處、御書付ヲ以、格別厚キ御沙汰有之、當時於諸家樣モ、御政治向海防等之儀、無御疎段相聞候處、格別之御沙汰ハ無之、

殿樣御壯年之御事ニハ候得共、御家督砌ヨリ御國政向被入御精、被成御苦勞候段、公邊御聞入有之、且御備場御委任等ニテ、出格之御詮議ヲ以、御昇進御沙汰有之、先年モ御鞍鐙被成御拜領、猶又此度御沙汰之趣ニ付テハ、御當家御美目之次第、

御先祖樣方へ被爲對、益々御孝義相立、御家不朽之御龜鑑無此上、就テハ、後來之御政治彌以御大事之儀、公邊へ之聞へ旁、肝要之御時節ニ付、御國中隅々ニ至迄、御趣意不行屆ニテハ不相濟儀、殊更御政事ニ預候面々ハ、不顧前後廉直正銘之筋ニ叶、御仁政行屆候樣遂心遣、且又御備場御委任ニ付テハ、是迄トテモ無疎事ニ候得共、彌御家來中文武令出精、兼々質素節儉ヲ宗トシ、有事時之御用ニ可相立心掛肝要之事候、此段厚相心得候樣被仰出候間、存其旨在役面々且御家來中、日夜心ヲ盡シ御奉公之覺悟アルヘシ、此段重疊申聞候樣ニトノ御事、

儉素ヲ旨トシ文武ニ精勵スベシ

右之通被仰出候條、組支配中へ可被申聞候、以上、

二月

十六日壬戌　宸翰ヲ左大臣近衞忠熙ニ賜ヒ、前關白鷹司政通父子ノ外交意見、

安政五年二月十六日

當役中

（毛利慶親事蹟）

衆ト異ルトコロアルヲ以テ、叡旨ヲ翼賛スベキヲ諭シタマフ。尋デ二十日宸翰ヲ關白九條尚忠ニ賜フ。マタ同ジ。

〔孝明天皇宸翰〕○維新史料編纂會所藏本孝明天皇宸翰寫所載

○二月十六日左大臣近衛忠熙へ

左大臣殿　御机下ゟ　此花

花

不順之時候專一御用心ト存候事、

早々御快復、拜見吳〳〵モ賴入候事、

此花謹言

尊融親王ニ叡慮ヲ申含メタリ

武家傳奏堀田ノ言ニ傾ク

虛喝ノ返答ハ宜シカラズ

諸大名ハ皆叡慮ニ從ハン

實ニ天下之一大事、深悲痛仕候事、

乍毎大々乱書高免、御推覽賴入候事、

快晴乍、兎角難去春寒ニ候處、

倍尊公御安泰令賀候、御所勞追々御快方ニ被爲在候哉、承知致度候、精々御大事ニ御用心、

御壯健之段祈々存候事、

余り〳〵御無沙汰申候間、

御面働之段ゟ恐縮乍、一筆令啓試候、

且亦過日ゟ、以青門（入道尊融親王）愚存申試候處、　御承知之上段々承忝存候、其後モ段々ト日々議奏抔共談候ニ、何共心配之至ニ候、太閤・右府（鷹司政通・同輔熙）之処、何共見込違之様子内々承、其上武傳モ、ちと堀（正睦、老中）田申條ニかゝふゝ掛候模様聞候半ニモ無之、誠ニ〳〵心配仕候、此節テハ、關白（九條尚忠）ハ大分きはり被居候由、先々其カ賴ニ有之候、何卒關白之心得違無之様ゟ、其已存候事、尤きはる可職分カ、心得違有之、虛喝ゟ返答振ニ成候ゐハ、實ニ（イヤ）一大事ニ候、諸大名以下、人々ゟ、叡慮次第ト申、皆とうか私ヲ當ニ目さし候様子ニモ承候得共、私モ兼ゐ御承知之通り（イ之）愚昧短才之質、中々量件ハ少シモ無之候、然又過日、御目ニ掛候書取之様成物乍、万々一ハ麁忽乍モ、

叡慮中途ニ遮ラレテ下ニ達セザルハ歎ズベシ
太閤一己ノ考ニテ事件ヲ處理スルハ危シ
人心一和ヲ肝要トス
主上御一身ノタメニ非ズ日本國ノタメナリ
公卿勅答ノ如クニハ成リ難シ
戰爭ヲ避クルカ好ムカ幕府三家等ノ眞意如何

所存出候義モ無之ニモ無之乍、其サエ諸方ニ不通、中道ニ成霧隔候ハヽ、誠ニ〳〵歎ケ敷存候、實(イヽ)ニ今度之義ハ、誠ニ〳〵一重大事、他事ト替、少シモ見込ヲつれ候ハヽ、後世ニ至、天下之禍ヲ、實ニ心配仕候、其上關白ニ不申聞、太閤邊計ニ成濟候事モ、とうか内々乍、武傳方ニ有之由も、承候半ゐも無之、左候ヲ、私モ不知、又所存不在、可笑お物ニて事治定ニ成候ヲ、誠ニ心配之至ニ候、世上之風評モ、此節太閤ハ甚惡敷樣子、扨々氣毒〳〵之事ニ候、關白ハきつう善評判之樣子、左程ニモ無之候半歟、然〳〵右一件ハ、余程きはいられ候由ニ候、右ニ付、私存候ハヽ、何分ニ衆人心折合人和肝要ニ存候、何卒過日モ、以青門申入候通、御親族之大名方ニ、内々ニゐも右存意御洩(イ漏)有之候ゐ、各承知致居候ヲ、万一今度可笑お返答振ニ成候共、一等之心意とおれ間敷哉、一事ゟ私カ宜者ニ成度ニゐハ實々決ノ無之、何分ニモ、

日本國之爲故、私一人之爲ニゐハ決ノ無之候、其段

御賢察希入候、何分ニ衆、此度之返答之処、只今之模樣ニゐハ、私始勅答方々之御所存通ニハ、ちと成兼候半やと心痛仕候、仍鳥渡御尋申試候ハヽ、

御親族之武邊之見込、沙汰ハ以何樣成義ニ候や、實ニ只今之處ニゐ、堀田申通戰爭ハ致難や、又ハ隨分好候模樣ニ候哉、鳥渡御尋申入候事、

幕府ハ條約ニ關シ叡慮ヲ伺フノ意ナシ
鷹司一家ノ意見ニ拘泥スベカラズ
近衞忠熙ノ盡力ヲ望ミタマフ
薩州ノ建筥獻上ヲ御嘉納

昨日モ、武傳ゟ披露候ゐ、亞米利幹約條和文下案二冊、

右ハ、約條とうか治定之樣ニゐ、中〳〵私所存相談ニゐハ無之樣子ニ候、此中まハ大分之事ヲ有之候事、

此余實(イヽ)ニ六ケ敷世ニ成、扨〳〵困り〳〵入候、鳥渡此段申入置候、又々御所存モ被爲有候ハヽ、無御隔意承度、左候ハヽ、又々勘考之種ニモ成、添存候事、何分ニモ御快氣次第、得拜顏度候事、

甚々申兼候義、且

御心慮之程ゟ以何カ難計候得共、押ゐ申入候ハヽ、他事ハ扨置、此一件ハ、必々鷹司一家之沙汰ニハ、

御おつゝ無之樣ヲ存候、何卒願ハ尊公モ、私之味方ニ御成被遊被下候ハヽ、

厚恩難申盡、畏々入候事、吳々モ御まよさいハ不被爲有乍、

御きはり御配慮希入候事、色々ムサト、不相替

御心易之不顧前後申入、死罪難逃候事、

誠ニ過日ハ、兼ゐ之薩劦ゟ之筥筒被送下、先以忝存候、卽開見候処、過分之御品、大ニもつくり、扨〳〵御立派之仕立、誠ニ〳〵日々用候ニハ宜過候事ト存候、然〳〵珍敷仕立、万端

實々大ニ喜悦無限候、宜御禮申入候、又々御序之節、右喜悦之段
御傳達希入候事、何モ荒〳〵、
吳〳〵モ、色〳〵ムサト申入、恐縮不少高免願候事、御所勞之折柄、
御面働恐入候事、尤〳〵御快節、御勝手ニ御覽願入候、御返事ハ、尤亞相（近衞忠房）ニゐモ、
御代筆ニゐ賜候様希入候事、

二月十六日午半刻認、

左大臣殿　　何モ荒〳〵、
御机下ゟ　　此花

〔孝明天皇宸翰〕○公爵島津忠重所藏本 ○宸翰寫所載

（島津家本宸翰寫）

○二月十三日左大臣近衞忠熙へ

封紙「左府公江」

實々風邪大流行、扨々困リ々々候、御用心可被成存候事、何モ荒々、

天淵」

追々暖氣ニ向候得共、兎角不順之時氣候、益　御安泰之御儀令賀候、誠ニ御無沙汰申候、毎
々御入來、御尋被下候處、其比愚身平臥ニ而、不得拜貌恐入候、然處、過日ヨリ快復仕候間、
何卒　御勝手次第、十五十六日十七日之内、太閤入來無之日、御來臨御待申候、但シ十五日
ハ、少シ差支候間、十六日十七十八日、何日ニ而モ、御入來希入候事、
試ニ烏渡致候事乍、申入度事モ有之候間、賴入候事、
且又此時計、日外ヨリ風与片付有、過日取出時節コマ割替時カケ候處、前之鏡之處留安ク
手サヘ候得者動候得共、暫時ニ而留リ候間、每度ニテ恐入候得共、御直シ賴入候事、何モ荒
々、
追而申入候、尤修復料ハ、書付ニテ（抑水路胃子）大御乳之方へ被仰下候ハヽ、早速持進候、此段無御遠
慮被仰下候樣、實々偏ニ々々希入候事、

二月十三日未刻過、

左府公江　　天淵

〔孝明天皇宸翰〕○宸翰寫所載

○二月二十五日左大臣近衞忠熙へ

封紙「左大臣殿　御机下　江」

時候御用心專一ト奉存候、
大々亂書、御推覽希入候事、何モ荒々、

天淵」

安政五年二月十六日

時計修理ヲ命ジタマフ

密ニ近衞忠熙ヲ召ス

太閤父子ノ態度ニ就テ

姦邪ノ菅卿

鷹司輔熙ヨリ物品到來

議奏傳奏堀田ト面談心配ノ至

玉章令披見候、如御申快晴春暖候、倍
尊公御安泰令賀候、誠ニ一昨日ハ久々ニテ
御來臨、段々及
御相談深忝存候、只今ハ御一封、御細意ニ承、心得ニ成、畏入候、太閤之處ハ大困リ乍、老衰
健忘モ稱、堪忍モ候得共、右府之處、壯年ノ輩、其上大臣ノ登位ニテ、左樣ノ心得、不屆ト存、
歎息ノ至ニ候、何卒改心、國忠盡サレ候ハヽ、身ノ爲、家ノ爲ト存候事、昨日關白共、色々談
候事ニ候、姦邪ノ菅卿（武家傳奏東坊城聰長）、死罪難逃ト存候事、何分ニモ、
神國永久安泰已、祈之候事、御如才ハ不被爲在乍、
尊公モ、何卒
國ノ爲、御家名ノ爲、此處精々御忠意、所希ニ候、私爲ニ申ニハ決シテ無之候、此處御推察
願入候、只今右府ヨリ、文通ニテ、時候見舞之由、寄肴・鉢植到來、何カ氣味惡存候事、御一
笑、
過日、御約束申入候丹酒頂戴忝存候、每々恐入候事、
今日万・裏（議奏萬里小路正房・裏松恭光）、武傳ニ行向、堀田面談ノ由ニ候、扨々大々心配仕候事、
猶又何ソ出來候ハヽ、又々申入候事モ可有哉難計申入置候事、何モ荒々、

御心易、餘々每々色々失敬之詞申入、高免賴入候事、
關白之處モ、トウカ御打明御宜由、安心仕候事、
二月廿五日午過刻、
左大臣殿　御机下江　天淵

〔孝明天皇宸翰〕（○孝明天皇宸翰寫所載）

○二月二十七日左大臣近衞忠熙へ

左大臣殿　御机下々　極密々　此花

封

九條關白來謁談話ノコト

鷹司政通內覽ノ罷免ヲ恐ル

鷹司政通立腹

不苦ハ、此書鳥渡青門へ御見き賴入候、然御序まて宜候、

時候御用心專一ゟ存候、大々乱書、御推覽賴入候、何モ荒〳〵、

先々屬霽候歟、一昨々日、數震驚入候、此後靜謐ゟ存候、

倍尊公御安泰令賀候、然ゟ、御面働乍捧一封候、關白入來ニ面談、只今濟候、右同公談之中ニ、昨日夕ま、一昨日夕ニ右府入來まて、段々談話有之候も、(イカ)太閤內覽邊之處深心配之由、廿一日入來まて私に申入之事、於私腹立いさし候由承、万一內覽被召上ニ成候ゐ、(イあノ下ハ)誠ニ以多年之功一時失、家の瑕瑾ト深心配候、左候と存、參內ヲ强ゐ止候得共、其日ハ深怒まて、何分まゑ太閤所意、急度不申上ハ不成と、可止樣子無之參內ニ候処、そさゞ右之次第故、誠ニ心痛仕候、同日、右府召來候間參候処、今日所存申上候処、何ゑ(幾カ)申上候共、よい共、まるい共無御返答、不都合之至之由(會有之忘失略、)処、太閤被申候と、被仰渡之次第、暫深腹立まて、左候ハヽ、異一件も、關白へ任、太閤ハ何も聞ん樣致所まゝ此話故、右府返答まハ、其ハ宜ゝろう由申置候処、又夕景□召來面會候処、先刻ハ左樣申候へ共、內覽まハ(イテ)何事も不聞居候ハ、又々太閤量件ニ不叶候事モ、其通り成候ゐハ、太閤之是迄之心得方ゟ違不承知故、一向內覽御理申候やうノ口ぬり故、右府被申候ハ、其ハ暫御見合可然、只今御辞退まてハ、過日御參まて御申入事、無御承知候事故、詰り遊しそこなひと申物、且又世上之風評モ甚惡故、こ

異國一件ハ關白ニ委任スベシ

鷹司輔熙近衞忠熙ヲ疑フ

近衞忠熙九條關白ト腹藏ナク談合スベシ

ゝまて御辞退候てハ、彌世上之惡評增候物故、其ハ暫御見合まて、先異件ハ、關白へ御任之方可然と申置候歟、關白まおゐさハ、何レ叡慮も被伺居事故、內々承度、辞退致候ゐ宜敷ハ、右府ゟ申出候ハヽ、何時まゐも辞退致樣之口振ニ候、然若辞退候方御時宜ゟ、鳥渡已前ニ、內々右府へ屆吳候樣賴入、万一御引上ニ成候と、甚心配候間之由、(其余色々有之候へ共、書取六ケ敷略ス、)右府被申入候間、關白ハ、先不寄不障返答有之候由ま候、就ゐハ、左府を以、內覽の事辞方宜御時宜、內々右府へ申渡樣ニゐも被爲有候や尋ニ候間、一向左樣の事ハ無之候歟、昨日入來之時、右府ニ廿二日歟面會之次第話有之、尊公仰之趣と符合之事も有、(イ有ノ下之)又不符合之事も有之候、とうか今迄と違、右府ハ、左府へモ少々疑心出來候樣子、附合氣味まるな由被申入候、とうか左府の心まて、右府之心底探見られ候樣子ニ候、然私モ逐一不覺候間、又々御序モ有ハ、左府へ委細御尋可然、尊公に右府申入候口上振ゟ、左府へノ口上振之違候や、御相談可然之旨申候へハ、左樣なれハ、左府へ尋ミ候可樣今日之処まてハ譚ニ候間、鳥渡此段爲御心得申進候、何卒無御腹藏、關白へ御話被爲有候ハヽ、彌關白之心モ解、尊公御爲宜ゟ存候、話合ハ長〳〵敷候へ共不覺、其上少々ハ書違、承違モ有之候半、其邊御組取賴入候、

關白被申入候ハ、私右府へ又々尋候ゐモ宜候へ共、又々私ハ職柄、何カ遠慮モ可有間、か樣の事之類ハ、左府ヲ問ふゝ一宜、左府ハ當時職役まても無之、又從來鷹へ心易之人故、

是ら㆓ハ左府ヲ使ニ致シ宜由ㇾ㆓て、實ニ疑心ハ無之樣ニ受候、然極意難計候へ共、先此樣子ニてハ、行前々

尊公之御爲宜と、私モ深喜入候事、

鳥渡くさらぬ事乍、此一條、御心得ニ申入置候、其内ㇾ㆓ハ、何そ關白か沙汰有や難計候也、

其邊宜賴入候、然無沙汰延引㆑ハモ難計候事、

何モ荒〳〵、

二月廿七日申刻、

左大臣殿　此花

御机下ゟ極密々

（島津家本宸翰寫）

〔孝明天皇宸翰〕○九條家文書所載

○二月二十日關白九條尙忠へ

時候御用心可被成存候事、大ㇾ㆓亂書、御推覽賴入候事、

鬱々敷天象ニ候處、倍尊公御安泰令賀候、誠ニ過日ㇾ㆓御入來、色々及御相談ㇾ㆓存候、且又每々申入候得共、一筆啓試候、異一件、過日ㇾ㆓より申入候通之事、太閤之處、何共見込違之樣も承候事、其故實ニ心配之至、右ニ付ㇾ㆓ハ、每々申入候事乍、何卒尊公天下之爲と思召、頓と

頓と無御遠慮、御きはり無之ㇾ㆓ハ、實ニ一大事と存候間、吳々其段御勘考希入候事、且又昨日太閤より文通ㇾ㆓ハ、追々快方故、其内ㇾ㆓ハ出仕、御機嫌も伺候半と、大畏之由認有之候、右ニ付、表裏之儀申入候得共、此頃入來ㇾ㆓てハ、誠ニ誠ニ六ヶ敷仕合、其譯太閤と差向應對ㇾ㆓成候ㇾ㆓ハ、私中々存念之程一寸も不被申、萬一申候共、中々是迄之工合ㇾ㆓てハ、申條不立、自分存念通立ねハ置ぬ生質故、風と私申條ハ、自分不□懷之時ハ、自分存念通りを、上も其思召位被申候ㇾ㆓ハ、立所ㇾ㆓失氣候ㇾ㆓、實ㇾ㆓大變ㇾ㆓候、私所存ハ、於尊公も、兼ㇾ㆓御承知候間、其段安心仕候得共、風と間違候ㇾ㆓ハ、實ㇾ㆓心配迷惑仕候間、私所希ㇾ㆓、何卒太閤入來之日を御考候ㇾ㆓、自然ニ成候樣ㇾ㆓ハ、同日尊公ㇾ㆓も御入來有之候ㇾ㆓、御兩人同時ㇾ㆓御逢申候ニ、其邊至極都合宜候、左候ハヽ、太閤と私應對も、一所ニ御聞取有之候ㇾ㆓、工合之惡敷次第之時ハ、御助言被遊下候ハヽ、誠ニ以忝存候間、御面倒之儀恐縮候へ共、何卒何卒太閤入來之事、御向家之事故尤知候可、よし不知共、御家來之內ㇾ㆓ても、目附被仰付、入來之樣子なれハ、是非是非同時御入來之段、幾重ㇾ㆓も幾重ㇾ㆓も希入候事、是ト申ㇾ㆓、天下之爲、私事ㇾ㆓ハ無之間、尤御配慮吳々も賴入候事、

二月二十日

安政五年二月十六日

此花

太閤ノ意見當ヲ失ス

太閤トノ對談ニテハ叡慮貫徹セズ

關白太閤同時ノ參內ヲ望ミタマフ

關白殿　御机下ゟ

〔孝明天皇宸翰〕○九條家文書所藏

○二月二十二日關白九條尚忠へ

異人一件國體ヲ汚サヾルヤウ處置スベシ

武家傳奏ト示談ノ件

關白殿ニ

此花

吳々モ、此一件書取渡候樣存被候事、

時候專一御用心可被成存候事、

此一件ニおゐてハ、御互に精力盡、國體ニ不拘樣可致存候事、

益尊公御安泰令賀候、今朝ゟ御入來、段々及熟談忝存候、乍去、今日ハ實以大ニ困り候事ニ候、定メる尊公ニモ、御掛念御心配ゟ察候事、扨去先刻ハ御一封被下、卽開見候處、段々御細書之趣、委細承仕候、武傳ゟ內々示談之趣、別紙書取一覽候、明日閣老ニ行向、延引申附候義去、太閤所存書取之趣、愚身存念ニ不叶故之事、明日ニるも、尊公ニ一封ニる、委細可申入所存之處、先刻御一封まる、大安心候、此書付計差出候義ニるゝ、尤明日行向ニる宜ト存候、太閤之所存書付添物ニいさし候事ハ、必々可爲無用、何分此一帋計遣し候樣、武傳ニ可

（本月二十三日ノ條參看）

太閤ノ書付差出ハ無用

老年病痾ノ身ヲ歎ズ

被申附ト存候事、吳々も、今晝太閤之所存書付ハ、決しゝ〳〵差出無用ゟ存候事、只々書付計被渡候樣、幾重ニも〳〵存候事、

今日太閤被申候事之一々、愚身存念不叶候テ、返答之處大ニ困り候事、

猶廿四日、御入來之砌、委細申入候事、何モ荒〳〵、

心悤大ニ亂書、御推覽幾重ニも賴入候事、

尤不及御返事候、万一御承知之旨被仰下候ハヽ、今晩ゟ遲刻故、明日之方畏入候事、

二月廿二日亥半前刻、

關白殿　此花

御机下ゟ

〔鷹司政通書翰〕○公爵島津忠重所藏本　安政雜集所藏

○二月朔日近衞忠熙宛

實ニ舊冬以來、心配御察被下候、寢食不及申、時刻サへ不分、晦昏蒙睡之上、老年病痾ト之御用カケ候テ、何ノ役ニモ不立、有無甲斐露命身ヲ恨候、實ニ大職、愚昧病身令恐縮候、尙々昨日心中浮雲晴、畏入候、御病中必々不及御答候、尙又不日、右府ヨリ亞相君江相尋

安政五年二月十六日

之節申入候由、申付候事、
彌御安全令賀存候、併御違例御案申入候、山本ヨリ承、御大事ニ御保養ト存候、抑墨異申立
條々、不容易之義、人和第一ニ候、一家ニ而モ、上下和睦、壁教ニ候、何カ人情立、紛々タル
說モ候旁、實以異情モ、海内人心令恐縮候、昨日、林・津田、以傳奏尋候処、委細關東表之次
第、折合十ノモノナラハ、上京比、七分ハ人和候由、老中衆心配之ヨニ候ヘ共、應接人之内、
岩瀨筑(肥)後別而大和魂強、一朝一夕ニハ折合(歟アラン)候ヘトモ、段々眞實之人ニテ、大ニ解申候由ニ
候、津田ハ別得實之人之由ニ候、國忠之人ニ候由之、
一昨夜(正月二十八日)、水戸前黄門ヨリ來狀、下官所勞深被案見舞申來、且打拂ヒ止候事極上策、外ナク存
候由、深カツテン參リ、此上ハ格別武備張、万一之砌無由斷、國忠和魂專務ニ存候
叡慮イカヽト奉存候由申來、則内々入
天覽候、返シ被下候ハヽ、尚又可入貴覽ニ候、右之通人和之キサシ、實ニ恐悦ニ存候、御安
心之爲申入候、具ニ一家ヨリ同志カ(ヤヽ)者ナラン、
謹言
水人親族多、一人是時勢ナク、一己ニ相成候ヘハ、如去年次第ニ相成申ヘク、□□□ニハ、
人和ニ分□□願候(マヽ)存候哉□ま大慶候、一人ニて和ニ候ヘハト存候外無他候事、

翠山君　内々
玉几下

梅翁

〔萬里小路正房書翰〕○曾子爵東坊城德長所藏本

○二月十八日東坊城聰長宛

日々春暖相催候、愈御清安奉賀、誠々昨日ハ拜面恐入候、其節も内々御示命事、心得と相成、
不相變御舊好ノ懇情少シモ惡クハ不承候條御安心願入候、扨誠ニ〳〵内々ながら申入候、
此度ノ一條、天下ノ重事ハ不及申事、然ル所、最初より老公ノ御評判誠ヲ不宜、尊公ニハ御
役柄故、人も御遠慮申十分ニハ御聞無之ト存候ヘ共、實ヲ言語同斷ノ惡評、下官も從來御懇
命ヲ蒙候事故、實ヲ御氣之毒心外ニ存居事候、まゝ一右樣ノ惡評ヲ御請被成候も自然之義、
天人ヲ以令言候哉トも存候、夫故、此度ノ一條ニ於テハ、老公へ御任セ候ハヽ、
一天之君も、如左惡評ヲ請させられ、天下ノ人ニ御笑ヲれ被遊候半ト存候へ共、實ヲ夜も
寢られ不申悲歎仕候、昨日、尊公噂より已前ニ專ら風評有之候、此度備中ニ阿諛致さん者
ハ各御取除キとも申、又ハ不忠ノ人三人有之、(一說ニハ、四人とも申候由)朝廷ノ忠臣ヲ遠サケン計謀有
之候由專ラ申候、下官も平穩ノ御時節ナラハ往〳〵ハ轉役も致、老後ノ樂ニ黄白も貯度
と存候へ共、カヽル御時節ニ相成候ゑも
君ニ寸忠盡ニ候上ハ、御役義ハ不及申、さとへ流罪ニ處られ候とも遺憾無之覺悟候、何も

墨異一件人和ヲ第一トス

齊昭ノ書ヲ天覽ニ入ル

鷹司政通ノ惡評ハ當然

堀田ニ阿諛スル者ハ罷免セラレン

〳〵從來ノ御懇命ニまろセ申入候、必々惡ろらは御聞取之上、御一覽早々御投火希入候也、

二月十八日

迎陽仁兄　閣下　　蘭生　拜啓

太閤ノ不評判
忠ト欲トノ堺町
叡慮ヲ伺候ス
萬里小路正房ノコト

〔鷹司輔熙書翰〕〇子爵東坊城德所長藏本

〇二月十八日東坊城聰長宛

昨日、萬印御寛談在之、折合之處被仰聞候處、今朝書中御到來ニ付、御内談ノ條、何も〳〵御尤ニ存候、扨世上ニゐ不評判之事、下官も内々傳承致ー、且小林も段々申候事、是又尤ニ存候、既ニ先日より三度計も直ニ申上候事も在之、其上申にくゝ候へとも「忠と欲トノ堺町」ノ哥も、又々御心得ニも可相成と存、申出ー候處、夫ニ付ゐハ只々御歎息の樣子、御不快中又々御心配と存、取合セ强ゐも不申上、短才の本と赤面ニゐ候事、

一過日、　御前に被召候節、　叡慮之程段々伺候へとも、彌ト　御決慮の處伺兼候へとも、輔熙故ゐ、大ニ〳〵御柔き樣ニ、奉恐察候事、

一萬印被召、和ニ忠精を御褒被遊御對話の事、貴卿御望之由、御尤ニハ候へとも、兼ゐの御氣性、其上所勞中、若ふと短慮の對話ゟ成候てハ、彼卿決て疑心增長、世上之風聞、彌取上られ候樣ニ成てハ、近患可發事歟と存候事、是も本人より被願對話ニ候へハ、よろーく存候事、

九條尙忠三條實萬ノコト
萬里小路正房ノ態度ヲ怪シム

一昨日、關白　御前被退候樣子、幷三印土州ゟ和おる文通有候ゐ、彼公和らき候樣子等の事、先々よろーき事と存候事、

一十二月廿九・晦、於柳營、諸大名折合七分通り出來候由、半三郎・肥後守等咄ーの樣子トハ、關東風聞少々相違在之候事、

小林委細ニ存居り候事、

一萬印書狀尤ニ存候、去おゐら書中、（萬里小路正房ノ書翰、上ニ收ム）

しゐー、右樣ノ惡評ヲ御請被成候も自然之義、天人ヲ以令言候哉と存候、

此一言、少々水クサク候半哉、從來懇命ヲ被受候ナラハ、成ぬ迄も、諷諫咄合候ゐ、老人ヲタスケラレ候ガ、ヤハリ忠臣ニゐ可有、一度趣意書ヲウタレ、被叱候トテ、陰ニゐ彼是ト被申　人氣ヲオダテ候ゐ、精忠トハ申されゐーく候歟、

一同、　下官ニも、平穩ノ時節ナラハ、往〳〵ハ轉役も致、老後ノ樂ーミ、黃白も貯度ト存候へとも、カヽル御時節ニ相成候てハ、……

此言、何と貴卿ニハ被存候哉、何ゐ心中一物可在存られ候歟、不義ノ黃白ハ不受有意歟、

君ま寸忠盡ー候上、……

先代トハ少短心歟、是も内々後タテ、東方ニ可有歟と存候事、

諸大名一和ノ令ヲ下サレタシ

鷹司政通公卿以下官人ノ救恤ヲ幕府ニ請ハントスレド世評ヲ恐ル

一右ニ付、六門内ニ入れ候ゑハ、是又不容易、實ニ〳〵可恐事ニ候、

一下官一身に内々存候ハ、諸大名七分通りハ折合候とハ申ゐこら、内心如何候哉之風聞も候事故、今一應、諸大名人和之處仰被下候様ニ相成候ハヽ、彌以　皇朝萬人あゐめ候旋、近國警衛方御手厚ノ事ハ申迄も無之事、在留之守禦ニゑハ大名も困り候様子、土着ニ相成候事仰被遣候義ハ不成とも、兩卿御含ニゑ御咄ー合有度事と存候、

一爭ゑ老人之志願、公家以下諸官人困窮御仁惠之事、尤可願事ニハ候へとも、此時節、世評も在候時節ニハ如何可有哉、竊考候處、爰ニゑ申出候へハ、成就ハ可致事ゐこら、老人ノ惡評、彌實事ト、萬人之おもハく、當人ノ汚名ハ不厭候へとも、　皇朝迄も可申上事、實ニ〳〵不忠ニ可相成旋ト存候へハ、當人心配水ノ淡(泡カ)、表裏の所置と存候へハ、寢食も不安候、併兼ゑの願望故、容易ニハ止メラレマジク存候、貴卿何との御勘考ハ有ゑーく哉、又其邊之處、子細有ゑーく哉、猶御勘考、御序ニ承度存候事、

一自余之條々ハ、今更致ー方有ゑーく哉、且萬國時變も候故、何とも不被申候へとも、上二ケ條ハ、何とそ〳〵殿下・御兩卿御採用ニ成候ハヽ、世評も少シハ薄ラキ可申、旦異人條約ハ是又致ー方も有ゑーく候へとも、此上ハ備州ノ申ノ儘ニ成サル様、少々イタメ候へハ、諸大名幷萬人ノ志情も相達ー、尚更　朝廷ヲ崇敬厚ク成候旋、井蛙之心事、密々申述候事、

二月十八日夕、

〔鷹司輔熙書翰〕〇子爵東坊城德長所藏本

〇二月二十四日東坊城聰長宛

此一件、御かゑい無様との事、

此間耳根ニ承候義、只今得好時、荒增之處申入候處、至極ゑとよく承知ニ候、元來其邊委細覺悟之趣ニ候、貴卿一心配之上ニ、又々一心配内心ニ有候ゑゑ、應對向にふく成候ゑハ、一大事の上の一大事故、昨日より又々所勞ニゑ、彼是案ー居り候處ニハ候へとも、此義なをいちりニ致ー置候ゑハ段々增長可仕、其上殿下・貴卿も御心配と存候儘、忠ニハかへゑさく申入事内々申入候也、

老人所勞、昨日にハかまさーこみ、甚案ー候へとも、今日ハ大ニ〳〵よろーく候ゑゝ、御案ー無之様ニ存候、

今日前左府(九條尚忠、關白)入來、是も深き心配のよー承候事、外事申入度義も候へとも、壁耳岩言令遠慮候也、

二十四日

必ゐ〳〵、御報ニハ不及候也、

安政五年二月十六日

九條關白鷹司家ヲ訪フ

○參　考

〔中山績子日記〕

二月十九日、

御き嬶よく、御拜御參り、去年の十月分、御參り御のさね、太閤ね・近衞左府ねへ、御尋、御くだしまゐる、

〔德大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

二月廿一日、晴、○中略

一理性院入來、御祈之事有談、三國大學來、太閤家、風聞不宜旨有談、

午後右府亭、權亞相同伴參入、有密談、戌斜歸菴、

幕府、令シテ諸國人別改帳ヲ本年八・九月ノ交迄ニ提出セシム。

〔大目付土岐賴旨回達〕○侯爵池田仲博所藏本公儀御觸留所載

○二月十六日福井藩等江戶留守居へ

二月十六日、大御目付中ゟ御廻狀、松平越前守樣衆ゟ到來ニ付、松平阿波守樣衆ゟ致順達候、

當午年諸國人別改被差出候筈ニ付、諸事改方認方等ハ、前々之通候間、人別改帳面、當八・

九月頃迄之內、自分方ニ可被差出候、尤廻狀順達留より可被相返候、以上、

二月十六日

土岐丹波守

人別改帳ヲ八九月頃迄ニ提出セシム

松平越前守殿（慶永、福井藩主）

松平阿波守殿（蜂須賀齊裕、德島藩主）

松平薩摩守殿（島津齊彬、鹿兒島藩主）

松平三河守殿（慶倫、津山藩主）

御

松平兵部大輔殿（慶憲、明石藩主）

右留守居

〔大目付土岐賴旨回達〕○侯爵池田宣政所藏本岡山藩留帳所載

○二月十六日仙臺藩等江戶留守居へ

二月十六日、到來、

當午年諸國人別改被指出候筈ニ付、諸事改方認方等ハ、前々之通候間、人別改帳面、當八・

九月比迄之內、自分方へ可被指出候、此段御回列中不殘樣、可有通達候、答之儀ハ、先々從

銘々不及挨拶、各ゟ可被申聞候、以上、

二月十六日

土岐丹波守

松平陸奥守（伊達慶邦、仙臺藩主）殿

安政五年二月十六日